
俺、ツインテールになります。2
水沢夢 [イラスト]春日歩
GAGAGA

小学館ｅＢｏｏｋｓ

俺、ツインテールになります。２

水沢夢

イラスト　春日歩


俺、ツインテールになります。2
水沢夢 [イラスト]春日歩

CONTENTS

デザイン／新井隼也＋ベイブリッジ・スタジオ


観束総二
トゥアール
津辺愛香
桜川 尊
神堂慧理那



目次

俺、ツインテールになります。2

水沢夢 ［イラスト］春日歩

人物紹介

観束総二（みつかそうじ）
主人公。
ツインテールを愛する
高校一年生。

津辺愛香（つべあいか）
総二の幼馴染。

トゥアール
異世界から来た
超科学力を持つ美少女。

観束未春（みつかみはる）
総二の母親。

神堂慧理那（しんどうえりな）
総二たちの通う高校の生徒会長。

桜川 尊（さくらがわ みこと）
神堂家のメイド兼
ボディーガード。

プロローグ　ツインテールとわたくし。

　ツインテールをご存じでしょうか？

　ほんの少し前なら、こう問いかけて回って、果たしてどれだけの人が答えられたでしょう。

　左右二つに結ゆった髪型。そのまま体たいを表わした名でありながら、ほとんどの人は連想すらできないでしょう。

　ごく普通に生きる人たちにとって、ツインテールとはその程度の認識でした。

　けれどある日を境に、その髪型は世界中の人々の知るところとなったのです。

　ツインテールを筆頭に、人々が好む〝何か〟を奪おうとする怪物。

　そして、それを守るために戦う少女。

　人々は最初、何の冗談かと思いました。

　髪は女の命といいますが……本当に、髪型のために命を懸かけて戦うのですから。

　わたくしにとって、ツインンテールとは幼さの象徴でした。

　どれだけ大人になりたくても、大人であろうとしても、誰だれもそうは見てくれない。

　人一倍勉強して結果を出しても、品行を正し優等生として振る舞っても、生徒会長になって何千人という生徒の代表になっても、誰一人として、わたくしを大人と認めてはくれません。

　すでに婚こん姻いんを結べる年齢になった今も、わたくしは、周囲から幼い子供と見られています。

当然です。

百人が見れば百人が小学生と答える──わたくしは、それほどまでに幼い風ふう貌ぼうなのですから。

その大きな外面ハンデを埋めるには、内面をどれほど高めても及びませんでした。

だからこそわたくしには、ツインテールが必要だったのです。

もはやどうにもならないであろう、発育という現実を認めたくなくて。

リボンを解くだけで容易たやすく失ってしまえる、子供っぽさの象徴。ツインテールを残すことこそ、わたくしにできる最後の抵抗でした。

まして、物心つく前からお母様の言いつけで今日まで続けてきたこの髪型は、どこまでも都合よく、わたくしに言い訳を与えてくれました。

愛あい玩がん動物を見るような優しい目で人に見られるたび、わたくしは思うのです。

ツインテールのせいだと。ツインテールでなければと。

自みずから捨て去る勇気も無いのに、幼さの全てをツインテールに押しつけ、心を守ってきました。

けれどあの日、わたくしは知ったのです。

そんな欺ぎ瞞まんで自分を慈いつくしむ心根こそが、幼かったのだと。

異世界の侵略者──見上げるような巨獣に、世界の御み旗はたを掲かかげるようにツインテールをはためかせ、凜りんとして立ち向かう小さな少女──テイルレッドを見て。

わたくしは、ヒーローが大好きでした。特に、子供番組のヒーローが。

誰だれに理解されずとも、孤独に戦い続ける。フィクションの

ヒーローたちは、誰もが気け高く、決して誰にも打ち明けられぬ心を抱いて足あ掻がき続けるわたくしにとって、何よりの心の支えだったのです。

　そして、現実の世界を颯さつ爽そうと舞う彼女は、わたくしが憧あこがれるヒーローそのものでした。

　世間の奇異の目も、礼節を欠いた流りゅう言げんも一顧だにせず戦い続ける彼女は、わたくしには太陽のように眩まぶしくて。

　いつしかわたくしは、テイルレッドの虜とりこになっていました。

　ツインテールを愛する限り、駆けつけ、助けるという、貴たつとい誓い。

　わたくしは、彼女との誓いを違たがえました。ツインテールへの愛など一片も無いわたくしを、彼女は何度も助けてくれました。

　ツインテールを守るため、懸命に戦う小さな少女。

　わたくしの、憧れのヒーロー。

　彼女は、わたくしの本心を知っても、助けてくれるでしょうか。

　この心の内を告白しても、変わらずに笑顔を向けてくれるでしょうか。

　彼女に、見て欲しい。

　わたくしの全てを。裸のわたくしを。

　彼女の愛するツインテールを侮ぶ辱じょくしながら、それをひた隠しにして救いの手を渇望する、心の汚れた女を。

　どうか、知って欲しい。見透かして欲しい。強引に曝あばいて欲しい。

　自みずから打ち明ける勇気もなく、いつしかわたくしは、そんな

夢想にとろけるようになりました。

お願いします、見て下さい。

わたくしの、本当のツインテールを――――

第一章　第一希望からツインテール部でした。

　顔の横で、指を擦こするように動かす。無意識の行為だった。

「……あ」

　何をしているのか。今、そこにツインテールはない。

「何度も女になったから、癖がついてきちゃってるのか……。気をつけないとな」

　自分への戒いましめの言葉とは裏腹に、顔はどうしてもにやけてしまう。

　放課後の部室棟を一人歩く俺は、確かな手応えと達成感に心を弾はずませていた。

　浮かれるのも無理はない──。

　虚こ仮けの一念岩をも通す、とはいうが……諦あきらめなければ夢は叶かなう、なんて言葉、今のこの世の中で貫き通すのは難しいことだろう。

　しかし、俺、観み束つか総そう二じは、高校に進学してすぐ夢を叶えてしまった。

　幼い頃ころから育はぐくんできた心が、夢を実体かたちにしたのだ。

　ツインテール好きが高じて、ある日突然、俺はツインテールになることができた。

　似合わないのに無理矢理髪を伸ばしたり、女装したりするんじゃなく、正真正銘本物の、しかもとびきりのツインテールだ。

　ただ、それは異世界のオーバーテクノロジーの産物で、俺自身が女に〝変身〟して、しかも異世界からの侵略者と戦うという、また別の意味で夢のような日々の始まりでもあった。

ツインテールを好きというシンプルな気持ちも、世界一にまでなれば、世界を守れるんだ。

それからの日々は、ずっと戸惑うことばかりだったけど……この力を託してくれた女の子の真意を知り、そして、目的や生き方は違えど同じ髪も型のを愛した強と敵もとの戦いを経て、俺は吹っ切れた。

ツインテールを好きなことを、どこか恥ずかしいと思っていた今までの自分と決別し、もっともっと、ツインテールへの愛を高めていきたい。そう、強く願うようになった。

今日は、その決意を公おおやけに表明する、節目の日だと思っている。

小中高大一貫エスカレーター式の私立陽よう月げつ学園の中でも、この高等部は近隣の学校の中でも最大級の生徒数を誇り、部活も圧倒的な数を擁している。

今日、そこにもう一つ、新しい部活が加わることとなるのだ。

ツインテール部──俺たちの部活が。

休み時間を利用して一通りの手続きは終わったので、後は部の新設届が受理されるのを待つばかりだ。

俺は、鞄かばんからツインテール部と書かれたプレートを取り出し、感慨深く見つめた。

昼休みに技術工作室で作ったばかりの真新しいプレートだ。

滑らかな象ぞう牙げの手触りを指で確認しながら、彫られた文字を丹念になぞっていく。

ゴシック体で綴つづられたツインテールはストレートに可愛かわいらしさを象徴するように感じるが、このように明朝体で綴られたツインテールの文字には、どこか厳おごそかな、見ているだけで背筋を正してしまうような無言の迫力を感じる。

部室棟の突き当たりで、足を止める。

教室からはかなり遠いが、ここが今日から俺たちの部室だ。

　入り口のルームプレートを、空きを示す無地のものから差し替える。

「ツインテール部……か」

　ツインテールは、本当に不思議な言葉だ。

　こうして声に出すだけで、その喉のど滑すべりのよさに楽しくなってしまう。

　風ふ呂ろやトイレで、無意識に歌を口ずさんでしまうことは、誰だれにでもあるだろう。

　俺も、『あ、今俺、ツインテールって呟つぶやいてたな』と、後から自覚することはよくある。

　また、こうして文字を眺めているだけでも、宇宙を哲学するような心地のよい途方も無さを感じるんだ。

　自分でツインテールになれるようになった今も、新鮮な発見の毎日だ。

　きっと、この部活で、その発見はさらに大きくなるだろう。

「ようし、こうして正式な部として立ち上げたんだ。覚悟を決めて、めいっぱい盛り立てていくぞ！」

　決意も新たに、扉を開けると――――

「あ、総そう二じ様！　ちょうどいいところに！　この野獣に言って聞かせてやって下さい！　いい加減形だけでも人間らしく振る舞わないと、飼育部に寄贈するぞ、と!!」

　――志同じく集った二人の少女による、キャットファイトが展開されていた。

　盛り上がっていた気分が音速で次元の彼方かなたへカッ飛んでいく。

　いや……一方が気勢と裏腹に床に大の字に倒れ、もう一方がその

相手を決して逃がさんとばかりに馬乗りになっている様は、捕食者と獲物の関係であり、五分五分の戦いファイトとは呼べない。

「あんたこそ動物でしょうが！　なに胸はだけてんのよ!!」

　俺の幼おさな馴染なじみでありツインテールの一番の理解者、津つ辺べ愛あい香か。彼女はこの場の捕食者。

「総二様が扉を開けた瞬間脱ぎかけの制服からブラとパンツがチラ見えする角度で振り返って『きゃっ』とか媚こび媚びな声を出したかったのに、愛香さんに阻はばまれたんじゃないですかー!!」

　そして、自分のツインテールを託し、俺をツインテールにしてくれた異世界からの来訪者・トゥアール。激戦の名残かところどころ何かはだけている彼女は、この場の獲物の立場。

　二人は、いつものように仲良くじゃれ合っていた。

　休み時間になるたびにこまめに一生懸命ピカピカに磨いた床が、窓が、壁が……部室が早くも特設リングと化してしまっている。

「だいたいあんた、なに当たり前のように校内に入ってきてんのよ！　ちゃんと手続きとかしてるんでしょうね!?」

「ご心配なく、もう試験も書類上の手続きも終わってあとは編入日を待つばかりです！　愛あい香かさんこそせめて校内くらいは無軌道な若さの暴走を自重してください！　今だって、何が悲しくて愛香さんに騎乗位されないといけないんですか!!」

「き、騎乗位じゃない！　これはマウントよマウント！　誰だれがあんたなんかに……」

「赤くなったー！　想像しましたねむっつりさん!?　頭の中で殿方にまたがりましたね!?　だけど、揺らすおっぱいもないくせに騎乗位に憧あこがれるなんて百年早いんですよ！」

「………………そうね。でも、他人を揺らすのは得意なんだぁ」

「やめっ……ちょ……待っ……脳が揺れ…………ッ」

　制服をちょっとはだけたトゥアールに愛香がのし掛かり、そして脱出不可能な完かん璧ぺきなマウントポジションで攻撃を繰り出し

ている。いや、お前も揺れているぞ、愛香。ツインテールが。

「トゥアール、そろそろタップしろ……っていうか愛香もいい加減にしろ！」

「タップ……？　スポーツの格闘技じゃあるまいし、ギブアップなんてあると思ってるの？」

「あれよ！　あってくれよそこは!!」

　……通常営業だ。

　今日も今日とてまるで色気とは無縁な光景だが、まあ、この調子ならトゥアールが学校に馴な染じむのはあっという間だろう。

　残念ながら、〝馴染む〟の前には、いい意味でも悪い意味でも、と付くのだが。

　俺と愛香は、ツインテールを愛する心を力に変身する「ツインテイルズ」となり、異世界からの侵略者・アルティメギルと戦っている。今け朝さも、登校中に世界に向け宣戦布告してきた怪物──エレメリアンを倒した。スク水にこだわりを持った、虎とらのような風ふう貌ぼうの敵だった。

　そんな毎日だが、先日敵の大将格を倒したことで戦いが一段落したのを区切りに、トゥアールは陽よう月げつ学園に編入してくることを決めた。

　本当は今日から正式に登校する予定だったようなのだが、そのエレメリアンとの戦いで今朝時間を取られてしまったため、タイミングを逸したと言って後日に延ばしてしまった。どうも、自己紹介やら何やらいろいろ企たくらんでいるようで、そこはかなり不安だ。

　そして、俺も区切りというかけじめとして、自分の不注意で部活動の希望アンケートに記入してしまった部活……ツインテール部を、正式に設立することにした。

「ツインテールを守り、世界を守る。これが俺たちツインテール部の活動だ。頑張ろうぜ、二人とも」

　トゥアールへの死のマウントを解除し、愛あい香かが立ち上がる。

「ま、しょうがないわね。あの変態たちキリ無くやってくるみたいだし、やるなら徹底的にやってやろうじゃない」

「愛香さんのお茶目も徹底的でキリが無いんですが、私はいつまで頑張ればいいんでしょうか。いい加減心も骨も折れそうなんですが……」

　愛香の攻撃から抜け出したトゥアールは相変わらずの超回復力で、すぐさま身だしなみを整える。

　異世界人で身体からだが頑丈なトゥアールと、脳の指令より早く手が出る愛香は相性がいいらしく、こうして毎日姉妹喧げん嘩かのように仲なか睦むつまじく過ごしているのだ。

　部室を確保できたことでまず真っ先にやるべきことを、俺はトゥアールに提案する。

「ところでトゥアール、頼みがあるんだけど、いいかな？」

「分かりました！　脱ぎます!!」

　元気よく挙手したトゥアールの手を絡からめ取り、その細腰に手を添え、愛香が二回転……いや、三回転させて床に叩たたきつけた。

「頼みって何よ、そーじ」

「今、お前への頼みごともできたよ。もう少し落ち着いて生きてくれって」

「……もっと、言ってやって、ください……自分の胸のように、平穏に生きろよ、と……」

　ホラー映画の呪殺された被害者のような苦く悶もん顔で、弱々しく賛同するトゥアール。

「それでトゥアール、この部室をうちの地下基地みたいに改造できないかな？　基地に直行できる転送装置とか、いろいろと必要になると思うんだ。……あと、床をもう少し柔らかい素材にでもしない

と、命に関かかわりそうだ」

「お心遣いありがとうございます総二様！　そうですね、改造しましょう。対蛮ばん族ぞく用の地雷など、防犯設備の重要性を今強く認識したところです」

　まなじりを決して立ち上がるトゥアール。明らかに自分のことを言われていると分かっていながら、けろっとしている愛香が恐ろしい。

　防御じゃなく攻撃を科学で補おうとするあたり、愛香と同じで負けず嫌いだな、トゥアール。

　俺と愛香は廊下の壁にもたれかかり、トゥアールの部室改造作業が終わるのを待っていた。

　あの広大な地下基地を一晩で完成させただけあり、部室の改造は一時間もかからないという。

　トゥアールは鶴つるの恩返しよろしく、改造中は「決して中に入らないで下さい」と俺たちに念を押した。

　まさかと思ったが、案の定、基地を造ったあの晩のように、部室の中から例の妙な音が響いてきた。

　うりせけっへ。

　にゃけろっぱ。しょはっはー。

　かろぺれぺれぽぷー。

　ふもえめめ、こみーんみょいみょい。

「……何よ、このどうテキストに起こしても音感を疑われそうな、奇妙な作業音は!?」

　感性が人類共通なのには安あん堵どしたが、愛あい香かが扉を開

けると言って聞かないので、必死になって止めた。まさか、見られたからには異世界に帰る、とはならないだろうが。

「……けど、こんないい部室、よく空きがあったわね」

　そう聞かれるのも無理はない。うちはマンモス校だが、巨大な校舎も有限だ。たった三人だけの新設部で、しかも四月も終わろうという今の時期に、部室を確保できたのが奇跡のようなものだ。

　まあ、種明かしをすれば、ちゃんと理由があるんだけどな。

「ああ、ここな、今まで閉鎖されてたんだってさ、幽霊の目撃情報が絶えなくて。大昔に女子生徒が自殺したとか、いろいろと噂うわさはあるみたいだな」

「ちょっと、初耳よ!?　そんないわく付き物件が何で今になって開放されたの!?」

「部員に愛香がいるって言ったら、先生、『じゃあ大丈夫ですね～』って言って使用を許可してくれたぞ」

　うちのクラスの担任、マイペースで細かいこと気にしないので、説得ごとがある時は助かる。

「あんたねえ！　あたしを何だと思ってるのよ！　あとあの担任も!!」

「いいか？　エレメリアンは心の力が実体化した存在だ。言ってみりゃ幽霊のお仲間みたいなもんだろ。今さら俺たちが何を怖がる必要があるんだよ」

　愛香は大きく溜ため息いきをつき、横目で俺を窺うかがってきた。

「……じゃあ、幽霊が出たら……責任持って、あんたがあたしのこと守ってよね」

「え？　あ、ああ……」

　ガラにもなくしおらしくなって。こんなに幽霊苦手だったっけ、愛香の奴やつ。

　そもそも、ずっと一緒にいるけど、愛香が何かに怖がってるとこ見た記憶がないな。

「完成しましたよ～。あとそんな抜け駆け十年早いですよ～」

　トゥアールが、扉を開けて手招きした。俺と愛香は、早足で部室に入る。何な故ぜか愛香は舌打ちをしていた。

「これで、カモフラージュは完かん璧ぺきです！」

　ホワイトボード。スチールの本棚。長テーブルと、折り畳みのパイプ椅い子す。ロッカー。

　文化部らしく簡素で最低限の設備しかない部室だが、これらは全てトゥアールの超科学で改造されているのだという。

「何で、改造してるとこ見せてくれなかったのよ」

　愛あい香かが口を尖とがらせる。

「それは、秘密です♪」

　ウインクし、唇くちびるに人差し指を当てるトゥアール。

　愛香はこめかみをひくつかせ、ギリギリと歯ぎしりする。相変わらず、乙女乙女した仕草には憎悪にも似た苦手意識を持っているようだ。

「そーじは興味ないの？　どんなふうに作業してるのか気になるじゃない！」

「まあ、好奇心はあるけど……」

　あるけど、でも、知らないほうがいいような気がする。知ってしまったらもう後戻りできないような……。

「では、代わりに、この部屋の機能を一つお見せしますね。愛香さん、そこの椅い子すに座ってみて下さい」

「……これ？」

　愛香が肘ひじ掛かけ付きの椅子に座ったのを見届けると、トゥアールは制服のブラウスのボタンを外し、胸の谷間からリモコンを

取り出した。

　何な故ぜ、素直にポケットに入れないんだろうか。

「スイッチＯＮ!!」

　リモコンを操作すると、愛香の座っていた椅子の脚が、床から出てきたトラバサミのようなものでガッチリと固定され、愛香の手首が肘掛けの横側からせり出してきた手て枷かせに束縛される。

「……何、これ」

　愛香は冷めた口調で、完全に拘束された自分の身体からだを見下ろした。

「ハーッハッハッハ！　好奇心に負けて、いつもの警戒心が不十分だったようですね、愛香さん！　その状態では、脱出は不可能！　アンチアイカシステム二号、アイカトラエールです!!」

　途端、鬼の首を取ったように愛香を指差し、はしゃぐトゥアール。

「さあ～て、どうしてくれましょう。その、幼稚園児が元気よくクレヨンを走らせるのに丁度いい平らな胸に、落書きでもしてあげましょうか。それとも、この場で私のブラジャーを愛香さんに装着して、精神に再起不能なダメージを与えて上げましょうか……」

　椅子に固定された愛香は、まるで電気椅子に座らされた囚しゅう人じんのようだったが、今にも悪いた戯ずらをせんと近づいていくトゥアールを前に、全まつたく動揺していなかった。

　すぅ――……と鼻から息を吸い、

「ふんっ!!」

　気合い一いつ閃せん、愛あい香かは両腕を胸の前でクロスさせるように振り抜き、相当な強度を誇っていそうな手て枷かせを椅い子すの肘ひじ掛かけから引きちぎるようにして破壊した。

「バ……バカな、アンチアイカシステム二号までもが破られるとは!?」

　驚きよう愕がくするトゥアールを余よ所そに、愛香は余裕綽しやくく々しやくと立ち上がる。

　アンチアイカシステムには変身しないで立ち向かうのが愛香なりのプライドらしい。

「おっぱいの谷間から出したリモコンなんかで、あたしが捕らえられるとでも思ってるの？」

　愛香は手首に残っていた手枷を力任せに引きちぎり、床に放ほうり捨てた。

　その気迫に満ちた視線が自分の胸の谷間に注がれていると分かり、トゥアールは恥ずかしそうに胸もとを手で隠して横を向いた。

「んもう、愛香さん、エッチだぞっ☆」

　エッジの効いたパンチで床に転がされるトゥアール。語尾についていたと思おぼしき☆が、目の前を舞っている。

　何で、運動部より激しい運動が繰り広げられているんだ。

　トゥアールはテーブルの上に、白衣のポケットからにゅるんと取り出した宅配ピザぐらいの大きさの箱を置いた。相変わらずの異世界超科学ポケットだ。

「フン、さすがにそのサイズだと胸の谷間には挟めないみたいね？」

　どっかと椅子に腰を下ろし、足を組んで勝ち誇った笑いを浮かべる愛香。

「何な故ぜお前が勝ち誇る……」

「いいんです総そう二じ様。負け犬おっぱいの言葉を優しく受け止めてあげるのも、胸の大きな者の務めです」

「ぐ、ぎ……」

　自分で挑発した手前か、二の腕を千切るように握って耐える愛

香。

「高貴なる乳の義務ノブレス・オブリージユ……位高い胸の持ち主は、胸持たざる者に施ほどこすべし……。私が愛香さんの暴力に寛容なのも、この格言を胸に懐いだいているからです。これ、この、大きなおっぱいに」

　毬まりを突くように、両手で自分の胸を下からバウンドさせるトゥアール。

　それを見る愛香の唇くちびるからは、吐血したようにおびただしい血が滲にじんでいた。

「なるほど……大きな胸には大きな責任が伴うってことか」

「その通りです！　あれ、あれ？　総二様、おっぱいに興味湧わいてきました!?」

「え？　いや、別に……それより、その箱何が入ってるんだ？」

　格言がちょっとかっこよかったので思わず賛同してしまったが、気になるのは箱の中身だ。

「はい、ツインテール部始動の記念に作ったんです！」

　箱を開くと、中にはスマートフォンのような長方形のガジェットが三つ並んでいた。

「ツインテイルズ用のツールです。三人分ありますので、お配りしますね」

「おお！」

　俺も男だ、新しい機械を見るとわくわくするというのもあるが……嬉うれしかったのは、ツインテイルズ用のツールを三つ用意した、というトゥアールの何気ない言葉だ。トゥアールも含め三人でツインテイルズなんだ、という俺の言葉を覚えてくれていたんだろう。

「高性能通信端末、名付けてトゥアルフォンです！」

「……トゥアルフォン……あんた、名付けてて恥ずかしいと思わな

かったの？」

「思いませんよ？」

　しれっと返され、愛あい香かは押し黙ってしまった。

　二号まで撃破されたアンチアイカシリーズ、そして、トゥアルフォンとくれば、そのうち俺の名前を冠かんした何かも作られるのかもしれない。

「地下だろうと深海だろうと宇宙だろうと圏外にならないのは当然として、変声機能、成分解析機能、その他様々な機能を持ち、バージョンアップで機能の追加も可能になっています」

　テイルギアといい、何で必ず宇宙での使用を想定してるんだ!? 俺は思わず、無重力でのツインテールの動きをツインテール力学に基づいて空想シミュレーションする。

　トゥアールは、広げたトゥアルフォンのうちの一つを手に取って、俺たちに見せてくれた。

「今までのようにブレスを介しての通信は、大勢の人がいる所では怪しまれかねません。このトゥアルフォンの売りの一つは、『通話内容をリアルタイムに暗号化できる』点にあります。声に関しては、認識阻そ害がい装置の穴の一つでもありましたから」

「それはすごいな！」

「え？　どういうこと？」

　機械モノが苦手な愛香が首を傾かしげる。

「簡単に言えば……例えば、総そう二じ様が、公衆の面前でトゥアルフォンを通じて『アルティメギルが現れたって!?』と叫んだとします。その声はトゥアルフォンで受ける私たちにはちゃんと届きますが、周囲の人々には『今日の夕飯なに？』といった、別の言葉に聞こえるんです」

　これは分かりやすくすごいテクノロジーだぞ。

「助かるよトゥアール。正体がばれないようにいろいろなことに気を使わないといけないのは、ストレスになるからな。通信関係がク

リアされるのは、すごく大きいと思う！」

「えへへ～ご褒美に胸撫なでてください」

「ごめーんもっと詳しく使い方教えてー!!」

　愛香がトゥアールにタックルするように割り込んできた。

「……まあ、いいですけど。通話の基本操作は通常のスマートフォンと同じです。総二様、試しに私にかけてくれますか？」

「わかった、じゃあかけるよ」

「はい！　たっぷりかけてください!!」

　何な故ぜ目を血走らせ、顔を赤らめているのかは分からないが、すでに登録されていたトゥアールの番号にダイヤルした。

「ツインテールツインテール、ツインテール？　（アルティメギルが現れたって？）」

「はぁ～、はぁ～、私トゥアールちゃん、今あなたの後ろでスケスケの黒の下着に包まれたおっぱい見せてるの（急いで出撃してください、総そう二じ様！）」

　これはすごい。トゥアルフォンからはちゃんと俺の言葉への返答がきたし、トゥアール側の変換音声もかすかにだけど聞こえた。スケスケがどうとか……。ただ、俺の言葉がどう変換されたか俺自身は分からなかった。

「何よ今のそーじの変換！　まるで古代ツインテール語じゃない!!」

「総二様のツインテールへのこだわりは、割りともう皆さんに認識されてるようでしたので、こっちのほうが違和感がないかと……」

　古代ツインテール語か。大学に進学したら専攻してみたいものだが、果たしてそれが日常会話での使用に耐えうるだろうか。カモフラージュどころか、逆に注目を集めたら世話ないぞ。

　愛あい香かも自分の分のトゥアルフォンを手に取った。

「じゃあそーじ、あたしにも」

「わかった……ええと、愛香の番号……」

　愛香の番号はアドレス帳でトゥアールの次の二番目に登録されていた。津つ辺べ愛香と書いて、ふりがなが『ビッチ』になっているのはどんな変換ミスなんだろうか。とりあえずダイヤルする。



「ツインツインツインテール、ツイツイツイン、ツインテール！（愛あい香か、急いで現場に向かおう！）」

「げはははは、生肉が食いてえええええ！　生がいいんだよ生！　生が好きなのさあたいは！　ビッチだから!!　（どう？　ちゃんと聞こえてる？　また、おかしなことしてないでしょうね）」

　トゥアルフォンに触れている反対の耳から聞こえてくる魔界言語に、古代ツインテール語は完全に霞かすんでしまった。

「うん！　愛香さんの音声も違和感無くバッチリ変換されてます！」

「ほう、どれどれ」

　愛香はスカートのポケットから自分の携帯を取り出して、何やら操作をし始めた。

「ちょっ……愛香さ……まさか」

『げはははは、生肉が食いてえええええ！　生がいいんだよ生！　生が好きなのさあたいは！　ビッチだから!!』

　愛香はトゥアールのことを全まつたく信用していなかったらしく、録音機能でカモフラージュの音声を隠し録りしていたようだ。そういえば、前に録音機能の使い方聞かれたな……。

「うぉらあああああああああああああ!!」

　甲子園決勝戦のラストイニングを思わせる渾こん身しんの投球で、トゥアルフォンを壁に叩たたきつける愛香。

「トゥアルフォンが――――――――っ!!　いずれバージョンアップしていけばテイルブレスと連動して、変身携帯になるはずだったのに!!」

「何が変身携帯よ、略してヘンタイじゃない!!」

「……携帯電話で変身する全てのヒーローを敵に回す気かお前は……」

俺は投げられた愛香のトゥアルフォンを拾い上げた。幸い壊れてはいなさそうだ。

愛香の投球に耐えられるなら、確かに深海でも宇宙でも余裕で持ち堪えるだろう。

「せっかく作ってもらったのに、これはないだろ、愛香。音声変換だけ変えてもらえばいいんだから」

「あんたは自分の好きな言語だから納得できるかもしれないでしょうけどね、あたしは……」

「──待て、愛香。静かに……」

不意に、身体からだを緩やかに貫かれるような感覚が走り、俺は愛香の言葉を遮さえぎって立ち上がった。

「……ツインテールの気配だ。近づいてくる」

「はぁ!?　突然何エレメリアンみたいなこと言ってんのよ！」

「お前にだけは言われたくねーよ！」

常日ひ頃ごろから五感を研とぎ澄まし、視覚に頼らずとも周囲の気配から危機を察知できる愛あい香かよりは、よほど常識的だ。

直後、扉からコン、コン、と控え目なノックが聞こえた。

「生徒会長の、神しん堂どう慧え理り那なですわ。入ってもよろしくて？」

「────ええぇ!?」

予想だにしない人物の来訪に、軽くパニック状態になる。

「ちょ、ちょっと待って下さーい！」

猶ゆう予よを求め、俺は急いで周りを見回した。トゥアルフォンは誤魔化しが利くが、見られちゃいけないものを出しっぱなしにはしていないか……!?

「トゥアール、何か隠さないといけない荷物とかはあるか!?」

「いえ、これだけです！」

　トゥアールは愛香を手で示した。真顔で。

　愛香は顔面エルボーからのヘッドロックでトゥアールを沈める。しかし、この緊急時に日常の光景を気にしてはいられない。ぶっちゃけ、会長の来訪を前にトゥアールの言葉はあながち間違いとも言えない。

「ど、どうぞ！」

　てんやわんやの状態のままだが、やむなく会長を招き入れる。

「お邪魔しますわ」

　扉が開いた瞬間。空気が————変わった。

　しゃなり、しゃなり、と音が聞こえてくるような、たおやかな歩み。

　メイドさんを一人後ろに携たずさえて入室する会長は、まさにどこかの国のお姫様のようだった。

　血生臭いコロッセウムに、清廉な王女が足を踏み入れるような場違いさを感じる。

　神堂慧理那会長。

　俺が入学式で心奪われた、輝くツインテールの持ち主だ。

　八の字に垂れ背を彩いろどる金髪のツインテールは、花嫁のヴェールを思わせた。

「あ、ああ……」

　何度見ても見慣れることはない。恐怖さえ感じるほどに洗練されている。

「……そちらの方は—」

　いち生徒として溶け込むにはやはり存在感がありすぎたようで、会長はすぐにトゥアールに目を留めた。言い訳を考える俺より先に会長が言葉を紡つむぐ。

「確か、今日編入手続きをされた女生徒が一名いると聞いていますが、その方ですか？」

「はい。俺の親戚で、海外から引っ越して来たんです。すいません、正式に登校する前に、一度校内を案内して欲しいってせがまれて……」

　三人で示し合わせていた「設定」を咄とつ嗟さに口にする。さすがは全校生徒の名前を暗記しているほどの生徒会長、編入生の情報も筒抜けだった。

「そうですの。今日は隅々まで見学して、陽よう月げつ学園を好きになって下さいましね」

　会長に笑顔で言われ、トゥアールは無言でこくこくと頷うなずいた。厳密にはまだ部外者のトゥアールを校内に不要に入れたことを咎とがめられると覚悟したが、一安心だ。

　しかし会長は、手にしていた書類に目を落とすと、笑顔が一転、表情が引き締まる。登校中優しく声をかけてもらったり、テイルレッドには全ぜん幅ぷくの信頼を寄せているような節があったが、今の会長は、生徒会長としての職務を厳然と全まつとうする、人の上に立つ者の目をしている。

「申請のあった部活新設の書類を見て、少し気になりまして。直接確かめて新設許可を出させていただこうと思い、こちらへ伺うかがいました」

「わ、わざわざすみません」

　言葉に詰まりながらも、声を絞り出す。

「部活内容は、ツインテールを研究し、見守ること、とありますが」

「間違いありません」

　誤魔化すわけにはいかない。俺は精一杯の真ま顔がおで、会長のツインテールを見て返答した。

　相手の目を見て話しなさい、とは礼儀の中でももっともポピュラーなものだろう。だが俺は、相手がツインテールならば、その相

手のツインテールを見て話すことこそ礼儀だと思っている。

　ここで礼を失すれば、この、一見少し変わった名前と内容の部活を不審に思われてしまうだろう。ある意味、真剣勝負だ。

「観み束つか君。あなたは……ツインテールが好きなのですか？」

「大好きです」

　息をするように、俺は即答していた。誠実さが伝わったかは定かではないが、会長は質問を重ねた。

「何な故ぜ、ツインテールが好きなのです？　それも、部活動にするほど」

「ツインテールを好きになるのに、理由が要いりますか？」

　俺の言葉を聞いた途端、会長のツインテールに僅わずかに動揺が見えた。

　これだけのツインテールの持ち主だ。当然、共感してくれるものと思っていたが……何故だろう。難しい顔をして、黙り込んでしまった。

　いや……むしろ、これほどのツインテールだからこそ、俺を試しているんだろう。

　私のこの髪を目の前にして、そんな大言壮語を吐くだけの覚悟が本当にあるのか、と。

　負けないぜ、会長。

　俺を見てくれ。これが、嘘うそを言っている男の目か!?

　そして、俺の心なかに息づく、世界最高と称されたツインテールを見てくれ──。

　ツインテールとツインテールの鍔つば迫ぜり合いは、会長が深く頷くことで、終わりを迎えた。

「……そうですか……ええ、分かりましたわ」

　何か含みのあるような返事が気になったのか、横から愛あい香か

が聞き返す。

「活動内容が問題ですか？」

「いえ。問題ありませんわ。ツインテールを愛する部活なら、ツインテイルズの応援にも繫つながると思いますし」

　そう。実のところ、この打算が無かったと言ったら嘘うそになる。学園を挙げてツインテイルズを応援している以上、ツインテールを探求する名目の部活申請が却下されることはないだろう、と俺は踏んでいたのだ。

「……あら？」

　会長が俺の右腕をまじまじと見つめてきた。

「観み束つか君。いくら部室の中といっても、派手なアクセサリーは校則で禁止ですわよ？」

「っ……!?」

　俺は、右腕を庇かばうように胸に抱いた。

「テイルレッドのデザインのものですわね。最近、よく見かけますわ」

　さらに衝撃的なことを告げられ、現状把握がとても追いつかない。

　ツインテイルズのグッズやアクセサリーなんかは今や次から次に発売しているから、同じデザインのブレスレットをしていてもそこから何かを疑われはしないだろう。だが、問題なのはそこじゃない。

　反射的に愛香を窺うかがうと、さすがというか、咄とつ嗟さに腕を背中に隠していた。

「お嬢様、そろそろお時間です」

　連れのメイドさんの言葉に、小さく頷うなずく会長。

「ええ。それでは、ツインテール部のこれからの躍進を期待してい

ますわ、皆さん」

　会長は忙しい合間を縫ぬって来たようで、口が半開きの間抜けな表情を晒さらしたまま、俺は小さく手を振って見送った。

　メイドさんが俺を振り返って言う。

「時間を取らせてすまなかったな。ところで君、さっきはいい目をしていたな。真剣さが伝わってきたぞ」

「そ、そうですか」

　生き真ま面じ目めな教師のような口調で礼を言うと、メイドさんは会長の後に続いて出ていった。

　褒ほめられて悪い気はしないけれど……今はそんなことを考えている場合じゃない。

「お……おい、どういうことなんだ、トゥアール！　テイルブレスは変身前は普通の人には見えなくなってるんじゃなかったのか⁉」

「そのはずです！」

　認識撹乱装置イマジンチャフの効果で一般人にはブレスそのものが見えなくなるようで、事実、これまでは体育の時間に着替える時だって誰だれにも見み咎とがめられたりはしなかった。

「トゥアールも予想していないような弱点があるってことは考えられないか？　例えば、認識撹乱装置イマジンチャフだってテイルギアのコアが……つまりツインテール属性が元になっているんだ、同じツインテール属性の持ち主には、撹かく乱らんの効果が薄いとか」

「……ツインテール属性があるだけで見えるのなら、テイルレッドの影響でツインテール属性を持つようになったほかの生徒さんたちにも見えているはずです」

「けど、会長はアルティメギルに何度も狙ねらわれるくらい、強力なツインテール属性を持ってるんだぞ？」

　トゥアールはまだ何かを言いたそうだったが、ひとまず納得をしてくれた。

「……そうですね。認識撹乱装置イマジンチヤフは、総そう二じ様たちの生活に支障が出ないようにするための、一番重要な装備です。念のため、お二人のブレスを今夜メンテナンスしてみます」

「ああ、頼むよ」

　トゥアールには悪いことを言っていると思う。仕事ぶりを疑うようなものだからだ。

　でも、こればかりは、気のせいで流すわけにはいかない。場合によっては一大事になり得るんだ。

「特に、愛あい香かさんのは、徹底的にメンテナンスをします」

「え、あたしのだけ？　何か具合悪いとこあったの？」

「はい。今までの戦いを見るに、どうもテイルギアの防御力が高すぎるようです。もう少しこう、手で引っ張っただけで胸の部分が破れるようなエロアニメ強度に調整しなければと思って」

「何でそんな余計な真ま似ねされなきゃいけないのよ!!」

「未いまだにテイルブルーだけ世間で人気が無いことを悩んでるじゃないですか。いっそ脱ぎキャラで売っていきましょう！　インクジェットプリンタの給紙トレイみたいな真まっ平たいらな胸だって、見せればコアな層の人気を獲得できる可能性がなきにしもあらずです!!」

「あっ、トゥアルフォンが勝手に飛んだわ!!」

「ぐれいっ!?」

　未確認飛行物体と化した携帯がトゥアールの顔面にめり込んだ。推進力は未知のエネルギーではなく、いち人間の腕力だ。

　考えすぎならいいが……以前も、こういうことがあった。テイルレッドの話をしてる時、会長は俺のことをじっと見て、違和感を感じてるようだった……。

　神しん堂どう会長は……俺に、何かの疑いを持ち始めているん

じゃないのか──!?

◇

〝世界〟は、無数に存在する。

日本でも、地球でも、銀河でもなく。

それら全てを内包する宇宙そのものが、平行世界として無数に存在しているのだ。

にわかには信じられないことだ。未だ有限を観測することさえできずにいる広大な宇宙そのものが、ほんの一ドットの光点にすぎず、それらが何百万、何千万階調のグラデーションとして広がっているなどと。

人々は気づかない。

薄壁一枚隔へだてたようなすぐ近くに、同じような世界が存在していることを。

そして、その世界の真実を識しり、我わが物顔で侵略を続ける怪物たちがいることを。

──異世界の侵略者、アルティメギル。

人々の心の力・属性力エレメーラを糧かてに生きる、エレメリアンと呼ばれる怪物が集まった組織である。

彼らは人の精神力をエネルギー源として運用できるほど科学が発達した、いずこかの異世界で生まれた。やがて数を増やし、組織化され、それを束ねる首領を中心に肥大化していった。

アルティメギルの最大の目的は、あらゆる世界のツインテール属性を奪い尽くすこと。

そのために、彼らはある極秘の作戦を持っていた。

侵攻時、アルティメギルが持つ超技術の一端を、その世界で一番

ツインテール属性の強い者に流出することであえて、敵対する戦士を作り上げるのだ。

強く美しい守護者ヒーローに憧あこがれ、世界中の人々がツインテール属性を芽吹かせた時、一気にそれを奪う──これが彼らの効率的な常勝戦法であり、事実、今までほぼ全ての世界はそれで片がついていたのだ。しかし……。

──テイルレッド。

最強のツインテール属性を持つその幼女の戦士は、絶望を撥はね除のけて奮戦し、アルティメギルの邪悪な奸かん計けいを粉砕した。

アルティメギルの誤算は二つあった。かつて自分の世界をアルティメギルの常勝戦法で滅ぼされたトゥアールが先手を打って、アルティメギルより先に総そう二じに技術ちからを渡したこと。そしてもう一つは、そのテイルレッド・観み束つか総二が、無限のツインテール馬ば鹿かだったことだ。

この世界の侵攻部隊を指揮していた隊長のドラグギルディは、よもや、テイルレッドの正体が男であると気づく由よしもなく、最後の真まっ向こう勝負に敗れ、総二たちの世界への侵略は終わりを告げた──はずだった。

アルティメギルは膨大な規模を誇る侵略組織である。唯一無二の存在たる首領を筆頭に、無数の大隊が存在し、無数の異世界への侵略を行っている。

そして、その分隊が今、総二たちの世界に集結しつつあるのだ──。

故・ドラグギルディの部隊の基地。

その大会議室に、沈ちん鬱うつな表情で座るエレメリアンがいた。雀すずめのような温和な外見でありながら、老ろう獪かいさを感じさせる戦士・スパロウギルディ。

彼は、そこへ駆け込んできた部下たちの報に、一層肩を落とすこととなった。

「報告いたします！　タイガギルディ殿、ツインテイルズに敗れました！」

「くっ……やはりか……」

　スク水━学校水着属性スクールスイムの雄ゆうと名高いタイガギルディ。

　いち早くこの世界の部隊に合流した援軍の隊長であったが、盟友のドラグギルディに戦闘力で大きく水をあけられていた彼は、今のツインテイルズに真まっ向こう勝負を挑んで勝てる器ではなかった。

「ツインテールに見とれ……実力を発揮できなかったものと」

「それと、テイルレッドのまとう衣ころもがスク水を連想させたのも、敗因と思われます！」

　部下の一人が、大会議室のスクリーンに戦闘員アルテイロイドの記録した映像を映す。

　そこにはテイルレッドの前で、まるで服従のポーズのように仰あお向むけになるタイガギルディが映し出されていた。

　これが子猫ならばどんな鉄てつ面めん皮ぴも思わず口もとを緩ませずにはいられない愛らしさだっただろうが、地面にだらしなく四肢を投げ出しているのは、筋骨隆々の虎とら面づらだ。

　画面の中で、テイルレッドが怯おびえるように後あと退ずさっている。

『な、何だよお前……腹出して寝転がって……』

『素晴らしきスク水をまとう幼女よ！　後生だ！　我わが腹を海と見立て、元気よく泳いでくれい!!』

『ぎゃああああああああああああああああああ変態だああああああああああああああああ』

　絶叫するテイルレッド。だが、その後ろから槍やりをバトンのよ

うに回しながら現れたテイルブルーは、見慣れた光景とばかりに落ち着いている。

『こんなのいつものことでしょ！』

　テイルブルーの露出の多めな出いで立たちを見るや、タイガギルディは不快感丸出しに怒声を上げた。

『失うせろ、汚らわしい！　そのような布面積の少ない水着など、スク水と比すれば尻しりを拭ふく紙も同然！　この幼女に誠心誠意謝るがよいわ!!』

　そして、映像はヤンキーのように眉まゆを歪ゆがめて目を見開くテイルブルーのアップで、途切れた。

「……この後、タイガギルディ様に無言でとどめを……。相変わらず、冷徹にて恐ろしき戦士です。テイルブルー」

　部下たちからの報を聞き終えて、スパロウギルディは頭を抱かかえた。

　今は亡きドラグギルディからこの部隊の全権を引き継ぎ、打倒ツインテイルズに闘志を燃やす──といえば威勢はいいが、実際、彼は半分諦てい観かんに支配されていた。

　ツインテイルズは、強すぎる。

　ドラグギルディの側近を長年務めてきた、参謀ブレーンともいえる彼は、当然、侵攻の裏に隠された真の作戦、効率化を目指した属性力エレメーラの拡散についても知らされている。

　だからこそ、作戦の仕上げを務めるべき司令官であり最強の戦士であるドラグギルディが倒された時、参謀たるスパロウギルディも、この部隊もまた倒されたも同然だった。

　何も知らぬ若い部下たちは、弔とむらい合戦だ、と怪気炎を上げてはいるが、このままでは本当の意味で無駄死にだ。

　補充部隊の長・タイガギルディが倒され、その部隊の部下たちだけが残されてしまった。今や二部隊の戦士をまとめ実質指揮する立

場となったスパロウギルディだが、戦闘力に自信が無い彼にとって、敵はあまりにも強大だった。

「ツケが、回ってきたのか……」

　今まで、効率ばかりを求め、部下たちの育成をろくにしてこなかったことが、一強百弱という脆もろい部隊の体質に繋つながったのだ。

　ほかの部隊も同じだ。まして、ドラグギルディほどの豪傑は部隊長でもそうはいない。

　もはやこれまで……部下たちをなだめ、この世界からの撤退を考えなければならぬか。

　思わずそんな弱気に支配された時──。

　別の部下が、慌てた様子で駆け込んできた。

「ス、スパロウギルディ殿！　新たな部隊がここへ！」

「……そうか……しかしな」

「リヴァイアギルディ様の部隊です！」

「ほう⁉」

　スパロウギルディは思わず立ち上がった。

　リヴァイアギルディといえば、ドラグギルディと修業時代を共にした同期の桜。

　実力も彼に匹敵するものと讃たたえられている。

「そ、それともう一部隊──」

　微かすかな希望を見み出いだしたスパロウギルディに、さらなる衝撃的な報が告げられた。

「クラーケギルディ様の部隊も、ここへ‼」

「何ィ⁉　それは確かか⁉」

「はっ……間違いありません」

　一方のクラーケギルディは、リヴァイアギルディに執しつ拗ように対抗意識を燃やす戦士。

　常勝の作戦にこだわらず、常に自みずからが前線に立つ超実戦主義で結果を残し、名を上げてきたという。

「むう、どういうことだ……お二人が互いを強くライバル視されているのは、アルティメギルの兵なら誰だれもが知るところ……。そのお二人を、同じ部隊に統合するなど……」

　今、この部隊に波乱が巻き起ころうとしていた。

◇

　控え目にカウベルを鳴らし、自宅である喫茶店の扉を開ける。

「ただいま、母さん」

「お帰りなさい、総そうちゃん～」

　迎える母さんは、カウンターと店内を忙せわしなく往復していた。

「あれ？」

　なんと、カウンター席以外全部のテーブルがお客さんで埋まっている。

　こう言っては何だが、今までそんなに混雑する店ではなかったのだが（何より店主自体が道楽経営でいい加減だし）、最近、少しずつお客さんが増えている気がする。

　裏口から入ればよかったな。

「ごめん、少し手伝ってくれない？」

「わ、わかった」

　母さんが捌さばききれなさそうだったので、手伝うことにした。

「はい！　お義か母あ様、私も手伝います！」

　トゥアールも当然のように名乗り出る。

　愛あい香かは店を手伝うのが初めてではないので、俺が頼まれた時点ですでに準備をしていた。

「あんたはいいわよ！　カップに何入れるか分かったもんじゃない!!」

「愛香さん以外の人に対しては、私は常識人です！」

「そーじに対して地球で一番非常識でしょうが!!」

　騒ぎ出した二人を、目で牽けん制せいする。頼む、せめて一般のお客さんの前では勘弁してくれ。

「お待たせしました～」

　店のエプロンをしたトゥアールが、フィギュアスケートのような流麗な動きで注文のコーヒーをお客さんのテーブルへと運ぶ。

　エプロンがエプロンとしての丈たけを保つギリギリなくらい、その豊満な胸が布地を押し上げている……が、相変わらず白衣は着たままだ。

「こちらになります」

　半面、実に業務的な口調で別のテーブルにコーヒーを出す愛香。

　こちらは、エプロンに過度の負荷がかからず、澄んだ湖面のように穏やかな平面だった。

　母さんは、カウンターでミルを挽ひきながら、二人の様子を微笑ほほえましそうに見守っていた。

　しかし、……気のせいだろうか。

何か、店の雰囲気がおかしい気がする。

珍しくウェイトレスがいるからとかじゃなく、きっと……お客さんたちが、違和感の原因なんだと思う。牽制しても時すでに遅く、トゥアールと愛あい香かのやりとりに引いてしまったか？

俺が漠然とした疑問に首を傾かしげていると、勢いよく店の扉が開いて、ひとりの男性客が入ってきた。

「すまないマスター……水と……新聞を……今日の新聞を見せてくれないか！」

言うが早いか、猛然とカウンターに詰め寄り、差し出されたお冷やを一気飲みする男性客。

スーツはよれ、ネクタイは曲がり、無ぶ精しよう髭ひげをたくわえた、疲れたサラリーマン風の人だ。

「……どうぞ……」

神妙な顔で母さんが差し出した新聞を、震ふるえる手で受け取る男性。

「……四月……二五日……。よかった……帰か還えって来れたんだな、俺は……」

え、何。

何、この人。

慌てて周りを見回すと、お客さんでは誰だれ一人として、彼に注目している人はいない。

俺と……愛香だけが、目を丸くしていた。

憑つき物ものが落ちたように穏やかな表情でカウンターに座る男性客の前に、母さんはそっと、コーヒーを置いた。

男性は無言でコーヒーを飲み……虚こ空くうを見つめ、フッ……と静かに微笑んだ。

あの、どこを見ているんですか、あなた。

「マスター、俺は……」

　母さんは男性の声を遮さえぎるように粛しゆく々しゆくと語り出した。何な故ぜか急に棚から取り出したカップを磨きながら。

「……時み間ちに彷ま徨よったら、いつでもここに来てちょうだい。過去むかしも……現い在まも、未この来さきも、この店の道コー標ヒーの味は、いつだって同じだから……」

「ありがとう、マスター。……行ってくるよ。俺が、自お分れで在あるために──」

　気きっ風ぷよく万札をカウンターに置くと、開いた店の扉から差し込む光の中へ、静かに、溶け込むように立ち去っていくお客さん。

　早いよ。せいぜい一分くらいしかいなかっただろ。何しに来たんだよ。

「母さん……何か、訳ありっぽい人だったけど……知り合い？」

「ううん、全然知らない人」

「誰だよおおおおおおおおおおおおおおおお!!」

　光に溶け込むっていうか未知の空気に溶け込みまくってんじゃねーか!!

　なんかメチャクチャ強引なルビだらけの会話してた気がするぞ!!

「普通に事情を知ってるみたいな会話だったじゃないか!?」

「何となく分かるのよ、どういう答えを望んでるのかな、って。父さんと毎日ああいう会話してたから」

「ッ……」

　まさか……店内に漂う違和感の正体って……。

　俺は、なるべく不自然にならないよう、店内のお客さんの様子を窺うかがった。

　シルクハットにタキシードを着たジェントルマンが、カップを鼻先に運び、香りを楽しんでいる。頑張って吸血鬼をイメージしてみました、的なコーディネイトに見えると言ったら失礼だろうか。

「……この香りだけが、私の血への衝動を抑えてくれる……」

　それ普通のコーヒーなんだけど……。

　あのお客さんに、ガーリックパスタをサービスで出してあげたい。

　ノートパソコンを執しつ拗ようにタイピングしているあのお客さんは、作家さんだろうか。

「フフ……オーケー、オーケー。いい子だ……そのまま、進んで……ＹＥＳ！　やったぜ！　ヒュウ、こんなにヒヤヒヤしたのは、アダルトサイトを見てウインドウが開きまくった時以来だ！」

　洋画の吹き替えのようなややオーバーな口調で、明らかに執筆業ではない何かの一仕事を終えたらしい。うっすら画面を窺うと、無茶苦茶にタイピングしたと思おぼしき無数のアルファベットが羅列されているだけだった。

　しかし多分、彼にしか突破できない強力なセキュリティと戦っていたんだろう。

　一事が万事、そんな感じで店内のお客さんは各おの々おの何か妙な独り言を呟つぶやいている。

　えっ……と。

　いや、もう分かりきっているんだが、それを認めてはいけないような気がした。

　違和感も、たった一つの共通項に当てはめれば、あっさりと氷解する。

　俺は、観念したように頭を抱かかえた。

——中二喫茶になってるじゃねーか……!!

トゥアールが、ほえほえと微笑ほほえましそうに見守りながら、小声で説明してくる。

「お義か母あ様の中二病の属性がどんどん高まってきているのが原因だと思います。同じ属性の者同士は、より強大な属性力エレメーラの持ち主に引かれやすいものですから」

「やめてくれ……まず間違いないだろうけど気づかないふりをしていた母さんの属性力エレメーラについて言及するのはやめてくれ……!!」

絶対母さんに知られてはいけない。母さんが、強力な属性力エレメーラを持っていることを。多分、ツインテイルズの登場で回春したせいで、母さんの属性力エレメーラがどんどん高まってるんだ……！

分からなくはないけどさ……。夢見たシチュエーションが現実になってるってのは、俺もある意味同じだから。

けど、メイド喫茶で客がメイド服を着るようなもんだろ。何でみんなセルフなんだ。

「何だか分からないけど、嬉うれしいわ」

「か、母さん……」

異界と化した店を、しかし、母さんは慈愛に溢あふれた目で見つめていた。

「中二病って、ともすれば悪い意味に捉とらえられちゃうのよね。でも、本当は、何よりも優しくて、何よりも強いものだと思うの。好きなものに打ち込んで、思いきり青春を楽しんでるっていうことだものね」

好きなものに、打ち込む。

　それは――

「誰だれもが熱く青春を駆け抜けることができるわけじゃない。大人になって、ふと懐かしい気持ちになったりもするのよ。仕事や、毎日にちょっぴり疲れた時、その気持ちを思い出す手助けができるなら、母さん、本望だわ」

　それは――その気持ちは、俺が、ツインテイルズとして何よりも守りたいものだ。

　やっぱりこの人は……俺の母さんなんだな。

　そして俺は、母さんの息子むすこなんだ。

「……今の台詞せりふ、覚えた？」

「え、あ、う……うん」

　胸が温かくなっているところへ、母さんがカウンター越しに詰め寄ってきた。

「じゃあ、次にドラグギルディとの戦いくらい大ピンチになった時、思い出してね！　母さんの言葉が窮きゅう地ちから脱する逆転の糸口になるはずだから!!」

「どうすればなるんだよさっきのが！　っていうか声が大きい！　しかも何で敵の名前バッチリ暗記してんだよ！　もうワンブレスで突っ込み切れねーよ!!」

　まあ、この雰囲気ならばれやしないだろうけど……このお願いは難易度高すぎるぞ。

「夢だったのよ……死ぬ寸前まで追い詰められた主人公が、ヒロインである母さんの言葉を咄とっ嗟さに思い浮かべて、そして逆転するシチュエーションが……。今は、総そうちゃんの物語のヒロインではなくて母親という登場人物だけれど……ね」

「わかったから！　そのうちどうにかこうにか思い出すから!!」

「死にそうになったらよ？」

「実の息子の瀕ひん死しのピンチを望むな!!」

　トゥアールが、すんすんとわざとらしく目め許もとを白衣の袖そでで拭ぬぐっている。

「羨うらやましいです……私、家族の温ぬくもりを知らないで育ったから……お義か母あ様と総そう二じ様のやりとりが、とても優しく映って……」

「トゥアールちゃん！　あなたはもう、私の娘でしょ!?　うんと甘えてちょうだい！」

「ああっ……お義母様、その言葉でどれだけ救われるかっ！」

「ところで、あれからそろそろ丸一か月経たつのに、依然としてあっちのほうがまだみたいだけど、どうなってるの!?」

「面目ありません、毎夜アタックを仕掛けていますが胸も守りも鉄壁の野人に阻はばまれ……」

　まだ……って、何がだろう。

　愛あい香かが大人しいと思って様子を窺うかがうと、店の雰囲気に飲まれて石化していた。

　耐性がないと、やっぱきついか……。

　そんな愛香には、店員が全員ツインテールの喫茶店、ツインテール喫茶をお勧めしたい。

　俺はいつかこの店で実現するかもしれない、めくるめく楽園パラダイスへ思いを馳せた。

◇

　神しん堂どう家に仕えるメイド、桜さくら川がわ尊みことは深く溜ため息いきをついた。

　視線の先には、彼女の護衛対象であり、尽くすべき主である神堂慧え理り那なが、笑顔でレジに並んでいる。

　土曜日の早朝から、この大手ショッピングモールの玩がん具ぐ店のテナントには、整理券を持った多くの客が並んでいた。

　ゴールデンウィーク直前の週末。

　玩具メーカーは需要を見越し、ここぞとばかりに新商品を投入してくる。

　パワーアップアイテムや新ロボットなどが発売され、子供にせがまれた親おや御ごさんや特撮ファンの熾し烈れつな争奪戦が繰り広げられるのだ。

　ちなみにこの全国チェーンのショッピングモールは、独自の店舗購入特典を配布しており、慧理那がここを選んだのもそれが理由だったのだが、それを尊が知る由よしもない。

「買い物なら、私に任せていただければ……」

　すでに慧理那に何度も言った言葉を、改めて口にする。

　そして、いつも決まってこう返ってくるのだ。

〝自分で買うからこそ愛着が湧わく〟と。

　メイドの自分が、主人の趣味にとやかく言うつもりはない。

　むしろ、学校で生徒会長として、そして神しん堂どう家の跡取りとして肩かた肘ひじ張った生活を送っている慧え理り那なが、一つでもなりふり構わずに熱中できるものがあるのは、嬉うれしく思うほどだ。

　だが、アルティメギルがこの世に現れてから、慧理那はもう何度もその身を狙ねらわれている。気軽に出歩くのは危険だ。

　さすがにずっと屋敷に閉じこもってくれとは言わないにしろ、こうしたちょっとした用事なら外出せずに使用人たちに任せてもらいたいのだ。

「お嬢様は、ツインテイルズに心酔しているからな……」

　無理もない。ヒーローに強い憧あこがれを抱いだく慧理那の前に、本物のヒーローが現れたのだ。舞い上がりもするだろう。

　危ない目に遭っても、必ずツインテイルズが助けてくれる、という絶対の信頼がある。それは、護衛を請け負う自分にとって複雑なところではあるが、実際、テイルレッドはことごとく慧理那を助けてきた。

　しかし、尊みことにはある懸念があった。

「……お嬢様は……もしや……むしろそうなるために危険を望まれているのでは……」

　尊は片時も慧理那から視線を外さない一方で、目端に映すように器用に行ゆき交かう男たちをも観察していた。

　チャラい見た目の大学生風の集団。スーツ姿の根暗そうな男性。それから一応、玩おも具ちやをせがむ子供たちも。

　ライフスタイルが変化し、結婚適齢期という言葉が薄れて久しい昨今だが、それでも誰だれもが一度は、年齢とともに結婚を焦る時期があるものだ。

　二八歳。桜さくら川がわ尊、最終決戦フアイナルバトルの予感──。

　一刻も早く結婚したいと願う彼女にとって、人間観察は婚活に等しい。隙すきさえあれば、未来の旦だん那な捜しだ。

　もっとも、職務は結婚願望を差し置いての最優先事項である。耳につけたレシーバーに受信を告げるノイズが走った一瞬、彼女はプロの顔になった。

『メイド長！　今すぐお嬢様をお連れして逃げて下さい!!』

　部下のメイドの切羽詰まった叫び声が聞こえ、尊は瞬時に駆け出した。

　何があった、と聞き返すまでもない。

　ちょうど会計を終えた慧理那が、レジを離れたところだった。

「お嬢様！」

「尊？」

　手を引くのももどかしく、慧理那をお姫様抱っこで抱え上げると、脇わき目めもふらずフロアを駆け抜け、階段へと辿たどりついた。エスカレーターを駆け下りるのでは遅い。ならば──

「お嬢様、舌を噛かまないよう、お気をつけ下さい！」

　子供並みの体重とはいえ、人一人を抱えたまま、階段を一気に飛び降りる。

　三階なので踊り場を合わせて都合四度。その超人的な体術を披露し、一階に降り立つやいなや息も乱さず再び走り出す。護衛主任を任された尊みことが、存分に健脚を発揮する。

　丁度開いていた自動ドアに身体からだを滑り込ませるようにして店から外に出て、駐車場に躍り出た時……尊は、一歩遅かったと歯噛みした。

「くそ、先回りされたか……！」

　これまでに何度も目にした、黒ずくめの不気味な怪人たちが立ちはだかり、甲かん高だかい怪声を上げる。

「モケー！」

「モケケー!!」

　そして、その後ろから悠然と歩いてきた怪物は、直立した蟹かにのような姿をしていた。

「ほう、これはなかなかどうしてハイポテンシャルな幼女……。これだけの強力なツインテール属性を持つ以上、〝あれ〟もさぞかし素晴らしかろうな！」

「またか！　化ばけ物ものめ!!」

　ツインテール属性。

　理屈は分からないが、この怪物たちが慧え理り那なのツインテールを目的に襲ってきているのは、もはや疑うべくもなく明らかだった。

　本来なら、髪型を変えさせるのが手っ取り早く、安全なのだ

が……神しん堂どう慧理那には、それをできない理由がある。

　歯は痒がゆかった。

「我わが名はクラブギルディ！　ツインテール属性と常にともに在ある麗うるわしき属性力エレメーラ、項後属性ネープを後世に伝えるべく日夜邁まい進しんする探求者！」

「ネープ……え!?　うなじ!?」

　またこれだ。化け物でありながら、いつもいつも俗なことを口にする。

　外で待機していた部下たちが、尊のもとへ駆け寄って来た。

「慧理那お嬢様を早く！　ここは私が食い止める！」

　尊は部下に慧理那を託し、怪物の前に立ちはだかった。

「ほう、妙齢の女性、お主もツインテールを嗜たしなむか！」

「妙齢だと!?　化け物がッ!!」

　尊は、ツインテールである。

　ウェーブのかかったもこもこの髪を、頭頂近くから背中に落とすようにまとめている。首もとまでの長さで自己主張をするそれは、活発さを象徴するかのようなツインテールだった。

　怪物の言う通り、今年二八歳になる尊にはいろいろ思うところもあるのだが、この髪型は、神しん堂どう家に仕える誓いを立てたその日から一度も変わらない、尊みことの誇りの一つだ。

　それを馬ば鹿かにされたのだから、黙ってはいられない。

「化け物め！　貴様ごときに品定めされてたまるか！」

　怒りをみなぎらせ、尊が果敢に挑む。

「いつもいつもお嬢様を狙ねらいおって、もう我慢できん！　ツインテイルズに頼るまでもない、私が成敗してくれる!!」

　怪人の身体からだに容赦無く叩たたき込まれる蹴しゅう撃げき。

　メイド服はロングスカートでなければ紛まがい物だと主張する者もいる。だが、ミニスカートのフリルをはためかせ、鍛きたえ抜かれた両の足で無数の蹴けりを繰り出す尊は、誰だれが見ても一流プロフエッショナルのメイドだった。

　戦うため、主人を守るためにカスタマイズされたメイド服。

　鋼鉄の職業意識。

　彼女は、メイドの魂たましいを身にまとっているのだ。

　猛攻は続く。蹴り一つ取ってみても素しろ人うとではない。それどころか一流の格闘家と比べ遜そん色しよくのない熟練のものだ。

　だが、クラブギルディは意にも介していない。

　逆に尊は足を押さえて蹲うずくまった。

「うぐっ……！　な、なんだこの硬さは……!?　身体中金属のようだ！」

　蟹かにのような外見の怪物は、背中の甲こう羅らどころか、柔らかそうに見える胴体を狙ってもビクともしない。

「きゃー！」

　慧え理り那なを庇かばっていたメイドから、戦闘員アルテイロイドが強引に慧理那を引き剝はがした。

　ほかのメイドに危害を加えられないようにと、慧理那が自みずから進んで離れたのも原因だった。

「お嬢様！　お逃げ下さいっ!!」

　尊も、隙すきを突かれて戦闘員アルテイロイドに取り押さえられ、身動きが取れなくなる。

「くっ、こいつら、こんなヒョロヒョロの身体でなんて力だ！　お、お嬢様……っ」

「大丈夫ですわ尊。きっと……きっと彼女が……」

　何の疑いもなく、信頼に満ちた慧理那の瞳ひとみ。

（ああ、やはり、お嬢様はこの状況を──）

「ようし、後ろを向かせい!!」

　戦闘員アルテイロイドが、左右から慧理那の肩を摑つかみ、よちよちと１８０度回転させる。

　クラブギルディはハサミの腕で腕組みをし、うんうんと満足そうに頷うなずいた。

「な、何を見ているんですの！」

　さすがに不気味に思ったのか、慧理那が毅き然ぜんと問う。

「うなじだ！　よいか、ツインテールにする以上、うなじが見えるは必然！　美は相乗され、輝きを増す！　この素晴らしきＷｉｎ-Ｗｉｎの関係を、俺はもっと多くの仲間に伝えたい！　そして、お前たちにも分かって欲しいのだ!!」

「あなたに教わることなどありませんっ！」

　腐った世よ迷まい言ごとを、正々堂々と切り捨てる慧え理り那な。

「たわけ！　男は背中で語り！　女はうなじで語る！　世界の理ことわりを知らぬとは、見た目だけではなく、知性も幼いか!!」

「なっ……わ、わたくしは……！」

　これまで毅然としていた慧理那が、初めて動揺した表情を見せる。

「おのれ化ばけ物ものめ、お嬢様への侮ぶ辱じよくは許さんぞ!!」

「年増のうなじに用はない!!　家に帰ってほうれい線対策に躍起になるがいい!!」

　ピンポイントな罵ば倒とうを受け、尊みことは顔を真っ赤にして抗議した。

「私はまだ二八だぞ！　ふざけるな!!　殺してやる!!」

　その怒りの度合いは、主人を貶おとしめられた時より上だった。

「さて、お主のツインテール属性、いただくとしよう!!」

　クラブギルディが威圧的に地面を揺らしながら、慧理那に近づく。

「お嬢様あ！　……うっ……!!」

　戦闘員アルテイロイドが尊の首筋を軽く叩たたいて気絶させた。

「み、尊っ……私のせいで……！」

　慧理那は、買ったばかりのヒーローの玩おも具ちやを抱きしめながら、背後から近づく地鳴りに、恐怖に必死に耐えた。

　ヒーローはいる。

　彼女は、それを知っている。

　だから、この胸を満たすのは、怯おびえではなく、信じる心──。

「属性玉エレメーラオーブ────兎耳属性ラビット！」

「モケーェ!?」

　慧理那の肩を摑つかんでいた戦闘員アルテイロイド二人が、弾はじかれるように吹き飛んだ。

「はっ!?」

　慧理那が瞠どう目もくする。

　属性玉エレメーラオーブ・兎耳属性ラビットによってもたらされた跳躍力を存分に活用し、青の戦士が戦闘員アルテイロイドたちに放った連続蹴げりは、見る者に同一人物が何人も現れたと錯覚させるほどのスピードであった。

　そして──

「ブルー、その人を頼むぞ！」

弾かれたように振り返った慧え理り那なの目の前には。

テレビの中から飛び出してきたように──怪物の前に敢かん然ぜんと立ちはだかる、小さな少女の姿があった。

◇

俺はテイルレッドに変身し、愛あい香かと一緒に現場に駆けつけた。

「ああっ……やっぱり来てくれましたのね！」

やっぱり、一番の狙ねらいは神しん堂どう会長だったか……。

これでもう、四度目ぐらいだろうか。強力なツインテール属性を持つ会長は、完全にアルティメギルの標的にされてしまっている。

それでも、凛りん然ぜんとツインテールであり続ける会長を、俺は守りたい。守らなくちゃいけないんだ。

だから俺は、何度だって駆けつけるさ、会長。

さて、土曜日の休日に何だが、早速ツインテール部の活動と行くか！

俺はリボンを叩たたいてブレイザーブレイドを出現させ、クラブギルディの眼前に突きつけた。

「現れたなテイルレッド！　ふはは素晴らしい……お主の強さ、美しさ！　すでに世界を超え知れ渡っておるぞ!!」

「そいつは光栄だな！　じゃあ、なるべく大声で宣伝してくれよ！　この世界には俺たちツインテイルズがいるから……侵略を諦あきらめたほうがいい、ってな!!」

「何を言う！　タイガギルディ様の仇かたき、討たずしてどう生き長らえようか！」

「……タイガギルディって、この前倒したトラみたいな奴やつか……？」

　ドラグギルディの友達だっていうから、実力も同じぐらいなんだろうって気を張ってたら、愛香が軽くブッ飛ばしちゃった、あの……。

　いや、確かに能力が同じぐらいなきゃ友達を名乗れないって考えるほうが、おかしいんだけどさ。

「食くらえっ！」

　ブレイザーブレイドが、クラブギルディを一気に脳天から断ち割る。

　だが、手て応ごたえを感じない。

　真まっ二ぷたつにしたはずのクラブギルディは、空気に解けるように揺らめいて消えた。

「フッ……残像だ」

「何っ⁉」

　後ろから声が聞こえ、驚いて振り返る。いつの間にか、背後に回り込まれていた。

　こいつ……速い！

「当然よ。俺は相手の後ろを取るスピードにかけては、隊長たちをも上回ると自負している」

　クラブギルディは、俺の首筋にずいっと顔を近づけてきた。

「素晴らしい！　陰ながら美を支える土壌……！　母なる大地に生命を恵む海！　最強のツインテール属性は、これほどまでに美しきうなじをもたらすのか‼」

　訳のわからない自己完結をして、滂ぼう沱だと涙を流していた。ハサミをチョッキンチョッキンと歓喜のままに動かす。

「超スピードの変態じゃねーか‼」

　剣を持った相手と何度も戦っていながら、それよりも危険に感じるのは、やはりハサミという存在が髪の毛ツインテールを脅かすものに思えてしまうからだろう。

　俺は慌てて剣を振り回すが、クラブギルディはさらに後ろに回り込んだ。

「残像だ」

「このお！」

「残像だ」

「うなじを見るな――――――――っ!!」

「残像だ。そして見る」

　メリーゴーラウンドのように、何度も切っては回転し後ろを取られ、を繰り返す。傍はたから見れば大分滑こっ稽けいであろう戦闘が展開していた。

「おおっ、これ楽しー!!」

　愛あい香かはというと、兎耳属性ラビットの属性力変換機構エレメリーションで、ピョンピョン跳びはねては戦闘員アルテイロイドを蹴け散ちらしていた。救援は期待できない。

　頼むからせめて周りのメイドさんたちに誤射するのだけはやめてくれよ……。

『総そう二じ様、確かに後ろをとるスピードはなかなかですが、それ以外は普通のエレメリアンと変わりません！　絶対に後ろを取るという習性を利用して下さい!!』

　トゥアールから通信が入る。

　……そうか！

　こいつはうなじを見るために、相手の後ろを取るという動きだけを洗練させ、鍛きたえ抜いた一流の変態だ。だったらいっそ、それを逆さか手てに取る!!

「完全解放ブレイクレリーズ!!」

　ブレイザーブレイドが伸長展開し、熱波を噴き上げる。

　刀身を伸ばした剣を大上段に振り上げ、俺は、クラブギルディに斬きり付けた。

　この一いち斬ざん目は、囮おとり──！

「残像だ」

　そして当然、返す二に斬ざん目で、こいつはさらに背後に回る。

　一斬目が空振りした、その場所に。そこには、一斬目が空振った時に放っていた炎の球体が滞空している。

「オーラピラー!!」

　俺の声で炎を噴き上げ、円柱型に変形する結界。

「何い!?」

　発動したオーラピラーが、クラブギルディを捕らえ唸うなりを上げた。

「うおお！　うなじが！　うなじが見えぬー!!」

「グランドブレイザ────────────────ッ!!」

　爆裂する炎刃。

　クラブギルディは、もう一度背後に回ることなく炎の中に消えた。

「ツインテールで相乗される美……うなじ……か」

　少し癪しゃくだが、ツインテールを引き立たせるという姿勢には、大いに学ぶべき点があるな。

　属性玉エレメーラオーブ・項後属性ネープを回収し、俺はブレイザーブレイドをリボンの中へと戻した。

　戦いの一部始終を見守っていた会長のもとに歩み寄る。

「メイドさんは大丈夫ですか？」



「はい。気を失っているだけですわ」

　現こ場こに到着する前に、メイドさんが殴られたと通信で聞いて焦ったが、こうして見る限り、外傷らしきものは何もない。あいつらは人間には決して危害を加えない。面と向かって抵抗されても気絶させるだけに留とどまる。

　こいつらの、精神の力を糧かてにする者としての……美学とでもいうのだろうか。それはある種、信用に近い。

　もっとも、これからもそうだとは絶対に言いきれないんだ。

　けど、危険だからツインテールにしないでと伝えて下さい、なんて言えない。神しん堂どう会長に、危険を自覚させることになってしまうから。

　ツインテールが危険なものだって、悲しいことを思われてしまう。でも……こんなことが続けば、世界の人々はともかく、さすがにピンポイントで狙ねらわれる会長は、考えてしまうかもしれない。

　苦悩する俺に、会長は微笑ほほえんでくれた。

「また、助けていただきましたわね……」

　その笑顔とツインテールに俺は、自分の弱気を払ふつ拭しよくしてもらう。

「こんな目に何度も遭って、怖いだろうと思いますけど……絶望だけはしないで下さい。あなたは、絶対に俺……わ、私が守ります」

「はい。怖くなんてありませんわ。信じていましたもの」

「貴女あなたがツインテールを愛する限り、私はいつだって助けに来ます」

「ツインテールへの……愛……」

　助けるたびに言っているので、そろそろ覚えてもらっていると思う。一応決め台詞ぜりふの一つなのだが、いつも、これを聞いた会長の表情が曇るような気がする。

そう、初めての時からそうだったような。

いや、それはないと信じたい。

会長は俺に以前、子供番組に出るようなヒーローに憧あこがれていると打ち明けてくれた。

ヒーローにとって決め台詞とは、非常に重要なものなのだから。

語ご呂ろが悪いのかな……。ここらで一念発起して、別のものを考えるべきか。

けど、ツインテールは絶対に譲れない……そうなると、愛の部分を……ううむ。

「あの……」

ああ。それにしても、会長のツインテールはいつ見ても綺き麗れいだなあ。

「……あ、あの」

「えっ……あ、ああぁ！」

いけない。決め台詞を考えながら、無意識に会長のツインテールを摘つまんでいた。

申し訳なさげに縮こまっている会長から、慌てて離れる。

いくら何でも、慣れすぎだ！　この距離感じゃ、いつかボロが出るかもしれない。

「ご、ごめん会長……それじゃ！」

俺は慌てて、その場を離れた。

戦闘員アルテイロイドのほうは、愛あい香かが余裕で全部倒したようだ。もはや、トランポリンのように跳ねて遊んでいるようにしか見えない。

「ブルー、頼む！」

「だからなんであたしがいっつも輸送機扱いなのよ、たまにはあん

たも属性玉エレメーラオーブ使いなさいよ！」

　ブルーが入れ替わりで発動させた髪紐属性リボンの属性力変換機構エレメリーションでリボンパーツを翼に変形させ、俺の手を取る。

　そのまま、ジェット機のように急上昇して、現場を離脱した。

　後ろ髪引かれるように別れ際ぎわに見た会長の顔が、飛行中いつまでも脳裏に焼き付いていた。

　驚くように目を見開き、何かを呟つぶやいていた。

　俺が突然、ツインテールを摘つまんだからだろうか？

　会長のツインテールに触れた指を見つめる。

　どうしてだろう。俺には、会長のツインテールが泣いているように見えた。

キャラクター名鑑 007

桜川 尊

MIKOTO SAKURAGAWA



DATA

性別：女
年齢：28歳
誕生日：9月15日
身長：162㎝
体重：51㎏
B84・W56・H82

慧理那の専属メイドにして、陽月学園高等部の体育教師。
幼少の頃より神堂家に仕えており、ツインテールはその恩義の証。慧理那の警護主任も兼ね、格闘技に精通している。
女だらけの職場で出会いもなく、うかうかしているうちに婚期を逃して、現在全力で焦る日々。手当たり次第求婚をして回っているが、今は特に総二に目をつけている。

第二章　学園に痴女。

　愛あい香かは、登校前、総そう二じを起こしによく彼の部屋を訪れる。

　武術家の祖父に鍛えられただけあり、寝坊とは無縁の健康的な生活を送る愛香だが、総二のほうは、同じ祖父の教えを受けてきたにもかかわらず、朝は決して強くない。がなり立てる目覚ましに気づかないこともしばしばだ。

　そうなれば、遅刻を未然に防いであげるのが幼おさな馴染なじみとしての愛香の義務。

　自室の姿見の前で入念にツインテールをセットし、最後に軽くリボンを整え、愛香は頷うなずいた。

　いつものように隣り合った互いの部屋の窓を乗り越え、モーニングコールに向かう。

　起きなければモーニングナックルに変わる仕様だが、幸い最近はコールだけで済んでいる。

「……あれ？」

　ベッドに総二の姿はなかった。愛香の血の気が引いていく。

「ま、まさかトゥアール……!!」

　すぐさま、トゥアールのせいではないかと思い至ったようだ。

　総二の童貞を執しつ拗ようにに狙ねらう痴女・トゥアールのバイタリティは、半端ではない。撃退自体は容易なのだが、回復力と執念が途方も無く、毎晩のように攻防戦が繰り広げられていた。

　最近では、総二の与あずかり知らぬところで二人の戦いが始まって終わることが多い。

　トゥアールは愛香が寝たのを見計らって総二に夜よ這ばいをかけようとするため、愛香も必然、眠りを浅くして気を張り襲来に備え

なくてはいけない。窓二枚隔へだてた部屋の出来事を警戒しながら眠り、それまでの早起きの習慣も崩さないのは、表彰に値する意志の強さだった。

　とにかく、今け朝さは先んじられた可能性がある。

「ど、どこよそーじ……まさか地下基地に拉ら致ちされたんじゃ……!?」

　泡を食って階段を駆け下りた愛香だったが、その先の洗面所に総二の姿を発見した。

　総二は、ひとまずほっとする愛香の存在に気づかないほど、シャンプーのＣＭのように熱心にツインテールを撫なでさすっている。

「………………ツインテール？」

　全まつたくほっとできない、想定外の光景だ。

　総二は総二でも、世間でアイドル扱いの幼女・テイルレッドに変身した総二だったのだ。

　愛香は気配を殺し、様子を窺うかがう。

　まさか……女に変身した状態で服を脱ぎ、シャワーを浴びるつもりなのでは!?

　くまなく全身を洗い、男女の身体からだの仕組みの違いについて、独学で保健体育を修得するつもりなのでは!?

　浮気現場の決定的証拠を押さえる探偵のような面おも持もちで、愛あい香かは赤面しながら息を飲んだ。

　だが、待てども待てども愛香が期お待そすれる事態は訪れず、総そう二じは鏡にツインテールを映してにこやかに笑うだけだった。

　その笑顔があまりにも満ち足りた心からのものだったので、愛香はそっと自分の胸に手を当てる。形のない針がチクリと胸を刺した──からではなく、テイルブルーに変身するために。

「よし……。今日も大丈夫だ！」

「大丈夫じゃないわよあんたの頭が――――――――――ッ!!」

　総二を惑まどわすツインテールに誅ちゆうを下すべく、ハンマーのように豪腕を振り上げてテイルブルーが襲いかかる。

　だが、まるでツインテールに目がついているかのように、テイルレッドはそれを悠々とかわした。無論、ひるがえったツインテールが巻き込まれて傷つかないように、体たい捌さばきにも神経を張って。

「……やめろ愛香。ツインテールに暴力はいけない!!」

「えっ……ええっ!?」

　避よけられたのが意外だったのか、勢い余ってつんのめるテイルブルー。

「何よ、初めから気づいてたの!?」

「？　何のことか分からないけど、自分のツインテールに危険が迫ったら、気づくのは当たり前だろう」

　テイルレッドは当然のように宇宙級の馬ば鹿かを口にした。まさに、愛香の想像が及ばないほどの進化の速さで、総二のツインテール馬鹿はひどくなっているのだ。

「顔や胴体はいい。けど、ツインテールに攻撃が来れば、俺だって全力で防ぐさ」

「普通逆でしょ……!!」

　変身を解除し、額ひたいを押さえて唸うなる愛香。

「起こしに来たら部屋にいないから、何してるのかと思えば……変態！　信じらんない！　自分から女装してツインテール見てニヤニヤするなんて、もう手遅れになってるじゃない!!」

「女装じゃないだろ!?　それにニヤニヤしてるんじゃなく、ツインテールを見て英気を養っていたんだよ！　何気なく早くに目が覚めた朝、こんなふうにツインテールを見るのも悪くない、って思ってさ。俺たちにとって、ツインテールは戦う力の源じゃないか！」

　間違ってはいない……が、愛香にとっては別にツインテールそのものが力の源ではない。

　早起きは三文の得というが、今け朝さは微み塵じんも清すが々すがしさを感じさせない類たぐいの早起きだ。

「どーだか。変身したままテイルギア脱いで、お風ふ呂ろに入ろうとしたんでしょ！」

「いや、風呂入るなら男に戻るだろ」

　真顔で反論するテイルレッドに愛香は目を丸くし、固まってしまった。

「時間やばいか？　悪いな、居間で待っててくれ、すぐ準備してくるから」

　変身を解除し、洗面所を後にする総そう二じ。

「は～あ……」

　変身が解けるその瞬間まで、総二が名残なごり惜しそうにツインテールを摘つまんでいるのを愛あい香かは見逃さなかった。

「むふふ～」

「ぅわあ!!」

　総二と入れ違いで洗面所に入ってきたトゥアールに驚き、壁に背がくっつくまで後あと退ずさる愛香。いつから覗のぞいていたのか知れたものではない。

「……当てましょうか。最近めっきり総二様が自分の髪を触ってくれる機会が減って、物足りないんですよね～？」

「！　だ、だ、誰だれが!!」

　分かりやすいリアクションで赤面する愛香。

　総二は無意識によく愛香のツインテールを摘んでいたのだが、確かに最近はその頻ひん度どが減っている。

「いいえ！　認めるべきです！　愛香さんの身体からだは、総二様

の指を求めて疼うずいていると!!」

「言葉を選べ痴女があああああああああああああああああああああ
ああ!!」



「血所おおおおおおおおおおん!!」

　モーニングナックルで、朝も早はよから死のウェイクアップを強しいられるトゥアール。

「な、納得できませんよ……照れ隠しにしても、この理不尽さは！　本当のことなのにっ……！」

「照れ隠しって何よ！」

「そばで見ていて気づいてないと思ってるんですか！　総そう二じ様が愛あい香かさんのツインテールを摘つまんでる時、愛香さん、女の顔になってるじゃないですか!!」

「ちがっ……そういう時は、ちょ、ちょっとくすぐったいだけで……」

　自覚があるのか、愛香らしからぬ反論の弱さだった。

「今では総二様、セルフでツインテール成分を補給できますからねえ……ある意味これも一人えっｔ」

「責任取りなさいよ！　あんたが総二を女にしたんでしょ！　屈折しかかってるじゃない!!」

　トゥアールの言葉を間一髪で遮さえぎり、詰め寄る愛香。

「だから責任を取って総二様を男にしようと頑張ってるのに、毎晩毎晩毎晩毎晩愛香さんが邪魔するんじゃないですか!!　未み春はる将軍もお怒りですよ!!」

「お陰様であんたが来てからこっち、ずっと寝不足よ!!」

　目の下にうっすらとくまが見える。愛香は化粧をしないので、結構目立ってしまう。

「……愛香さん。真ま面じ目めな話、このままでは総二様の健全な成長に悪影響が及びます」

「もう出てるわよ」

「いえ。と言うよりもですね、テイルレッドになること云うんぬ

ん関係なく……総二様、あの年とし頃ごろの男性にしては女体に興味が無さ過ぎると思いませんか？」

　愛香は分かりやすくギクリと身を震ふるわせた。

「普通、ですよ!?　健全な思春期の男の子が、女の子の身体からだになっちゃったら、まずどうします!?」

「あ、あたしに聞かないでよ……」

「カマトトぶらないで下さい、わかってるくせに！」

「ぐっ……」

　愛香も、自分の耳年増は自覚しているのだろう。強くは反論しなかった。

「自分の身体なんですよ!?　気兼ねなく、何をしても許されるんです！　何をしても誰だれにも迷惑がかからないんです！　良心の呵か責しやくなく、思う存分リビドーをぶつけられるんですよ！」

　トゥアールは目を血走らせ始めた。

「まず見るでしょう！　触るでしょう！　撫なでるでしょう！　まさぐるでしょう！　ちょっと冒険してブラつけて鏡の前でポーズとってみたり、もう一回外してみたり、いっそもう全部脱ぎゃああああああああああああ!!」

　ヒートアップし、言葉に合わせてうねうねと蠱こ惑わく的に動いていたトゥアールの両手十本指を愛あい香かはまとめてむんずと摑つかみ、折り紙で言うところの谷折りの方向に曲げた。

「思春期の男子だってのを加味してもそれはあり得ないでしょ！　女の身体からだったって、あんなお子様体型にそこまで興奮するはずがないじゃない!!」

「そこです！」

　ダメージも感じさせない熱情をたぎらせ、愛香に詰め寄るトゥアール。

「せっかく女になったというのに、不可侵が絶対条件の未成熟な身

体！　じゃあ、溢あふれ出る興味は、女体への探求心はどこへ向かえばいいんです!?　──ここですよ!!」

　トゥアールはポムン、と力強く自分の胸を叩たたいた。

　恨めしそうな愛香の視線に目ざとく気付き、トゥアールはにんまりとする。

「それが好都合なんです！　きっかけでいいんですよ、テイルレッドへの変身は！　飽くなき探求心が完全なる女体を渇望する！　もっとむにゅんとした女の子の身体を見たいな、触りたいな、と！」

「ちょっ……」

　トゥアールは焦点を失った目で髪を振り乱し、自分の胸を揉もみしだきながら愛香に迫った。

「そこで、ああそうだ、トゥアールのおっぱいがあるじゃん！　という唯一無二の正解に辿たどりつくのは自明の理！　そこから今度は女体サイエンス二時間目が始まるはずなのに、どうして私の身体はこの一か月一度も総そう二じ様のフラスコで……」

　□□□□□□□□□□□□。

「あ、あれ……何か記憶が飛んだような……私の身に何が……」

　大きなたんこぶを作ったトゥアールが、身体をよろめかせながら立ち上がる。

「あんたも寝不足なんでしょ、居眠りしちゃったんじゃない？」

「はあ、そうですね、頭ず蓋がい骨こつの縫ほう合ごうがほどけそうなほどの凶悪なチョップを食らったみたいに頭がズキズキしますが、寝不足が祟たたったんでしょうか……」

「ちゃんと寝ないと駄目よ？　寝不足は美容の敵って言うじゃない」

美容どころか、生命維持を阻そ害がいする敵がしたり顔で言う。

強い。ここまで自身の暴力に罪悪感を抱いだかないのはもはや、強さと言っていいのではないだろうか。

「で、何だったっけ？」

愛香は何食わぬ顔で、トゥアールに会話の再開を促うながした。

「とにかく、総二様は女の子の身体に興味を持たなすぎます！　さすがに危き惧ぐするレベルですよ！　何とかしなければ！　ね、愛香さん！」

愛あい香かは、むすっとして視線を逸そらす。

「無駄よ……あんたと最初に会った時も言ったでしょ。あいつはホントに……ツインテール馬ば鹿かなのよ。女の首から下には大して興味なんて向けないわ。昔から、ずっとね」

総そう二じと長い年月を共にしてきた幼おさな馴染なじみである愛香だからこその、年季を感じさせる哀愁があった。

だが、トゥアールは、そんな重い胸中を吐露した愛香を、一笑に付した。

「そうですか……。それがあなたの限界なんですね」

「な、何ですって!!」

「女の身体からだに興味がない!?　これほど近くにいながら、そんな無ぶ様ざまな諦てい観かんにまどろむなんて……私は、津つ辺べ愛香という女性をどうやら過大評価していたようです!!」

珍しく真ま面じ目めな表情をしたトゥアールの語気に、たじろぐ愛香。

「興味がないのなら持ってもらえばいいじゃないですか！　おっぱいを見せ！　触らせ！　どれだけ拒まれようと、どれだけ邪魔されようと、立ち上がり、また見せる!!　男性をあるべき性の道へといざなう！　それが正しき大和やまと撫子なでしこです!!」

「…………」

　ジト目で脱力する愛香。

　だが、トゥアールの演説は続く。

「総二様は女性に興味がないんじゃありません！　一番身近にいるのが愛香さんという怪獣なせいで、女性のよさを見失っているだけなんです！」

「そっかぁ」

　なおも続く演説を前に、せっせと屈伸を始める愛香。

「しかし、思春期！　一五歳という年齢を考えれば、まだまだ余裕で取り返しはつきます！　女の子は硬い拳こぶしでブン殴ってくる化ばけ物ものではなく、柔らかい身体で包んでくれる天使だと根気よく伝え続けるんです!!」

「うんうん」

　入念に肩を回す。

「愛香さんは銃後を守るどころか、積極的に参戦して単身で戦争を終わらせかねない戦闘狂ですが、大和撫子の本懐は分かって下さると信じています！　どうです、心震ふるえませんか!?　こみ上げてくるものはありませんか!?」

「そうね。何か、勇気が湧わいてきた」

　そして、勇気というより幽ゆう鬼きを思わせる禍まが々まがしい笑顔を以もつて、準備は完了した。

　トゥアールは──洗面所で可か憐れんな花々に囲まれ、静かに目を閉じた。

　あくまでイメージ映像だが、トゥアールの周囲には花々が咲き誇っていた。

　散る時も可か憐れんであれ。優雅であれ。

　反論が面倒になると無言で腕力に訴えてくる蛮ばん族ぞくにフルボッコにされたとはいえ、清らかさを失ってはいけない。

　銀髪の日本乙女、トゥアール。大和やまと撫子なでしこの心意気を体現した、見事な散り様であった。

◇

「さあ、今日はいよいよ私の編入初日です！　気合い入れていきましょう!!」

「悲哀しか出てこないわよ」

　全まつたく正反対のテンションの、トゥアールと愛あい香か。

「ところで、トゥアールは何でコルセットとかギブスとかしてるんだ？」

「いえいえ、お気になさらず。あと五分もすれば外せます」

　どれほど徹底した現実主義者リアリストなら、その言葉を気にせず耳の右から左へ流せるだろう。

　三人で登校するのも、制服の上から白衣を着込んだ姿を見るのもこれでもう何度目かだが、今日という今日こそトゥアールは陽よう月げつ学園デビューを果たすと舞い上がっていた。

　週末だと休日を挟んで印象が薄くなるので、編入は週明けがベストだということだ。

「トゥアール……。頼むから三人で決めた設定以外に、変なことは言わないでくれよ。俺、アドリブ利かないんだから」

「はい、重々承知しています！　フフフフ」

　信頼するには難易度が高すぎる笑顔だが、ここはトゥアールの良心を信じるしかない。

　俺は頭の中で、トゥアールの学校での設定をおさらいする。

海外に住んでいた親しん戚せきで、今は俺の家に住んでいる。住居のことまで言う必要があるのか、と思ったが、トゥアール的にはとにかく一緒に住んでいるという事実が重要なのだという。

まあ、ボロが出る前に詳しく決めておいたほうが、後々のことを思えば正解だろう。

トゥアールが何かやらかすかもしれないという不安は多分にあるが、ノリのいい校風なので、よほどのことがない限り取り返しのつかないことにはならないだろう。

「不安なのは……こっちだな」

俺は、右腕のブレスを掲かかげ、降り注ぐ陽光に照らした。

「認識撹乱装置イマジンチヤフに不備は見つからなかったんだよな」

「ええ。あくまで慧え理り那なさんのツインテール属性の強さを想定したコンピュータでのシミュレートですが、ツインテール属性との相互干渉はまずないとの結果でした」

それじゃあ、何で会長にはこのブレスが見えてしまったんだ……？

認識撹乱装置イマジンチヤフの特性からして、たった一つだけ、可能性のある理由が頭を過よぎった。

初めてテイルブルーに変身した愛あい香かを見た、俺の時のように──

「いやいやいや」

頭を振って不安を払う。とりあえず今日は、トゥアールが無事クラスに馴な染じめるように注力するのが最優先だ。

ちなみに。

どんな裏技を使ったのかわからないが、当たり前のようにクラスも一緒だった。

◇

「今日は、転入生を紹介します～」

　ＨＲ。担任が間延びした声で気け怠だるげにそう告げると、ゆっくりと教室のドアが開けられた。

　何で俺がこんなに緊張してるんだ、喉のどがカラッカラだぞ。

　俺は、離れた席にいる愛香と、アイコンタクトを取った。

（いいか、とにかく何言っても喧けん嘩かだけはするな。みんなの前で、暴力は絶対駄目だぞ!?）

　俺の視線を受け、力強く頷うなずく愛香。

（分かってるわ。トゥアールが何かやらかしたら、あたしが力尽くで止めるから!!）

　幼おさな馴染なじみだけあって、意志疎通はバッチリだ。俺の願いは、愛香に通じただろう。

　煌きらめく銀髪をなびかせ、トゥアールは教室に入ってきた。

　男子からも女子からも、ほう……と、感嘆の溜ため息いきが漏もれる。こういう反応をたまに見ないと、トゥアールがとんでもない美少女なのだということを忘れそうになる。

　黒板に踊る白い文字と、それに負けないほどの透き通った肌に、クラスのみんなの目は釘くぎ付づけになっていた。

『観み束つかトゥアール』

　そう書き終えてにっこり微笑ほほえむトゥアール。

「観束だって!?」

　当然、皆の目は一斉に俺に向けられた。

　にわかにざわめきが起こり、好奇の視線に晒さらされる。

　それでも、さほど動揺しないのは、いつもテイルレッドとしてもっと凄すさまじい好奇の只ただ中なかにいるからだろうな。

「ソウデス　コノハンノウガ　ミタカッタンデス」

　どうした、トゥアール！　早くも口端に涎よだれが垣かい間ま見みえているぞ!!　三〇秒前の顔を維持するんだ!!

「トゥアールさんは～、観束君の親しん戚せきで～、海外から引っ越してきて今は一緒に住んでいるそうで～す」

　担任が簡潔に説明し終わると、トゥアールは驚いて担任を糾きゅう弾だんした。

「ちょ、ちょっと待って下さい！　総そう二じ様との関係性を問われたところで『一緒に住んでます』とあえてぼかしてもうひと盛り上がりさせた後、さらにこまごまと誤解を振りまいてやっと種明かしをする算段だったんですよ!?　何ですかその侘わび寂さびのない説明は!?」

「え～と、もうおひと方紹介する人がいるので、時間をあまり割さけないんですよ～」

　全まつたく悪びれずに、先生は言う。

「え!?」

　想定外のことに驚くトゥアール。その言葉に合わせるように教室のドアが再び開け放たれ、堂々とした足取りで、もう一人女性が入ってきた。

　──メイド服を着た、一昨日おととい見たばかりの女の人が。

「本日から陽よう月げつ学園の体育教師として赴任された、桜さくら川がわ尊みこと先生です～」

「うむ、よろしく！」

「…………」

「…………」

　クラス中が静まり返ってしまった。

「あの、先生……」

　女子がおずおずと手を挙げても、レフェリーの追及を小憎たらしい顔でとぼけるヒールレスラーのように、先生は知らないアピールをした。

「私は知りません～。何も知りません～」

　空気読まない上に事なかれ主義。なかなか厄介な本性がどんどん垣かい間ま見みえてきたぞ、ウチの担任。

　それにしても……いつも会長ばかり見ていたから気づかなかったけど、こうして見ると、メイドさん綺き麗れいな人だなあ、ツインテールがよく似合ってて。

　お付きのメイドさんなだけあって、髪型も会長に合わせているのか。それとも、自分のポリシーなのか。少なくとも、あれは昨日今日始めたようなものじゃない。

　あのツインテールこそが、彼女の名刺代わりと言えなくもないだろう。間違いなくプロだ。

　綿菓子のようにふわっとしたツインテールが、俺を童心に還かえしてくれる。

「え、ちょ、な……ええ!?　何ですかこれ、何でこんなことに!?　こんなはずじゃ!?」

　激しく狼ろう狽ばいするトゥアール。それは圧倒的実力差で勝っていた悪役が、慢心して手て心ごころを加えたせいで勝負を逆転された瞬間の悔恨を思わせる。

　メイドさん……桜川、先生……は、無理矢理トゥアールの手を取り握手をし、よろしく、と大人の余裕を醸かもし出して言った。

「皆もよく目にしていたと思うが、私は神しん堂どう慧え理り那な

様の警護を一任されたメイドだ。しかし、ただ校内でじっとしていることにお嬢様が気を遣われるのでな。理事長と学園長に相談して、非常勤の体育教師をすることになった。ちゃんと、教員免許は持っているぞ」

　スーツやジャージではなく、メイド服をまとった体育教師とは、この学園は一体どこへ向かっているんだろう。この前も勇敢にアルティメギルに挑んでいたということだし、運動神経は相当なものなんだろうが……。

「フッ、しかし君たちは大人しいな。普通、美人の先生が赴任してきたら、スリーサイズや彼氏の有無など、これでもかと質問攻めにするところだろう。慧理那様の、生徒会長のメイドだからといって遠慮することはないぞ」

　無茶苦茶を言う。愛あい香かですら、状況についていけずポカーンとしていた。

「待って下さい！　後から来て何を仕切っているんですか！　ここは、私の戦場です!!」

「そう言うな、君はまだ若い。質問される機会はいくらでもある」

「いいえ、ありません！　私にとって、今日が唯一無二の戦いなんです!!」

「ほう、その意気やよし！　君のような女の子、嫌いではないぞ！　ようし、公平に、二人同時に質問を受けようじゃないか!! さあ、質問はないか!?」

　促うながされてなお、無言。

　皆、一いち様ように味わっているのだろう。

　足を一歩でも踏み入れたら鉄てつ格ごう子しが下りてくる罠わなの中に、美お味いしい餌えさがぶら下げてある。それを視認できてしまっているが食欲も抑えがたい、中途半端な知能を持った動物の心境を。

「む？　熱い視線を感じるな。君は……おお、観み束つか君じゃあないか！」

「……え？　え？」

　急に名指しされ、半分ぼんやりしていた意識が一気に引き戻された。

　確かにこの前部室で会ったけど、何な故ぜ急に俺を……って、視線？　思考がぼんやりしていても、ツインテールだけはガン見していたのか、俺ってやつは……！

「……いや、その……」

「せんせいー、観束はツインテールが好きなんでーす」

　ようやく上げられた声は、質問ではなく密告だった。あっさりとバラしやがったクラスメイトＡ!!　すまん、俺はまだ名前覚えてない！

「そうかそうか、ならば、これをあげよう！　ツインテールを好きだという君に、私からのささやかな贈り物だ！」

　俺の席まですたすたと歩いてきたメイド先生に、Ａ６サイズぐらいの封筒を手渡された。

　この大きさ……写真？　先生のツインテールのピンナップ写真かな？

　なるほど。自分で配るとは、かなり自信を持っていると見た。

「…………写真……じゃない……折り畳まれた紙……？」

　一五歳の男の俺には、まだ縁のないはずの言葉が見えた。

「嬉うれしいか。そうだろう」

「婚こん姻いん……届とどけ……って書いてるんですけど、気のせいですか」

「気のせいって、君はその程度の漢字を読むのに自信がないのか」

「……妻の欄らんに、すでに先生の名前も書いてあるんですが」

「当たり前だ。夫と妻双方の名前を記して初めて、婚姻届は意味を為なすのだぞ。白紙のまま渡すなど、相手に失礼ではないか」

「相手って!!」

「君だっ!!」

　おかしい。非常識なことを言っているはずなのに、何でこんなに迷いがないんだ、この人は。

「君はツインテールが好きなのだろう？　ならば私と婚約しても何の問題もないじゃないか！」

　自分のツインテールを摘つまんで見せつける先生。

　やばい、ちょっとドキっとした。駄目だ、ここで流されたら人生の終しゆう焉えんだ!!

「問題ありますよこの年とし増ま！　総そう二じ様は、すでに売約済みです!!」

　完全に場の空気に呑のまれていたトゥアールが詰め寄り、非常識教師を糾きゆう弾だんする。

「総二様、そんなものさっさと破り捨ててください！　先生！　誰だれの許可を取って総二様に求婚しているんですか！　私こそ、総二様の前世からの婚約者です！」

　そう言ってトゥアールは得意げに周囲を見渡すが──

　クラスメイトたちは、ノーリアクションだった。

「何で……何でざわめいたり黄色い声ではやしたてたりしてくれないんですかぁ……私の夢見てた学園ラブコメと違う……」

　えぐえぐと肩かたを震ふるわせるトゥアール。

　みんな、この先生のペースに巻き込まれたくないんだろう……。

「……そういえば、君はこの前あの部室で見たな。君が噂うわさの編入生・トゥアールだったか。編入試験を満点でパスした天才がいると聞いていたが、いろいろ問題があると注意を受けていた」

　うん……まあ、素行がね……。でもそれ、当の問題ある生徒の前で決して言っちゃいけないことだよね。まして、注意すべき先生自

体がそれに匹敵する問題のある人だったら、どうすればいいんだろうね。

「だが小娘よ、若いな！　羨うらやましいが考えも若いぞ！　前世がどうだろうと、今恋人がいようと、それは求婚するにあたり何の障害にもならん！　あらゆるしがらみを超えて、求婚は平等なのだ!!」

「こ、これが、婚期を逃した大人の論理思考ロジツクだというんですか……!?」

　トゥアールの動揺が、クラス中の女子たちにまたたく間に伝でん播ぱし、ざわめき出す。

　しかし、メイド先生はその異様なまでの気迫を、引っ込めるどころかさらに全開にした。

「滑こつ稽けいに見えるか？　女子たちよ。だがな、この年で独身でいると、中途半端に焦るのはもはや時間の無駄なのだ。努めて冷静に、そして全力で焦る。独身という十字架を背負い、渾こん身しんの力で毎日を生きるのだ!!　それが、三み十そ路じ射程内までに結婚できなかった女の業ごうだ!!」

「いやー！」

「どうしよう、私カレシいない!!」

「今すぐ結婚しなきゃ！　ああ駄目だ、一六歳の誕生日までまだ半年もあるわ！」

　女子たちが、堰せきを切ったように騒ぎ始めた。

　何な故ぜ、平日のホームルームの時間に、結婚観について深く考えなくてはいけないんだろう。

「うむ、うむ。よく学びなさい、子供たちよ。反面とはいえ、教師は教師だ!!」

　なんて嫌いやすぎる教育なんだ……!!

「というわけで観み束つか君、そろそろその紙に名前を書いてくれたまえ。君が結婚できる年齢になるまであと二年半、しかと保管し

ておこう」

　矛ほこ先さきが戻ってきたー!!

「ええ!?　いや、その……」

　沈黙を守っていた愛あい香かが席を立ち、メイド先生に猛烈に抗議した。

「せ……先生！　冗談でもやっていいことと悪いことがあります！」

　何故か、周りの女子も、愛香を応援するようにそうだそうだ、と声を揃そろえている。

　というか、愛香頑張れー、と声援まで送ってる子がいる。

「何で愛香さんだけ！」

　トゥアールがさらに半泣きになる。

「何が冗談か！　これまで婚こん姻いん届とどけを五二六枚配ったが、全て本気だ!!　ただ、相手の都合がちょっと悪かっただけだ!!」

　いや、なおさら駄目だろ。

　しかも……だ。

　今じゃこの手の書類は自治体のＨＰなんかからダウンロードして印刷できるが、手渡されたのは家庭用のプリンタで印刷されたようなものではなく、窓口で受け取る正式なものだ。

　おそらくは、今まで配ったという全てが……。

　狂気を感じる。

「無論、私も教師として赴任した以上、分別は弁わきまえる！　教師と生徒の男女交際は御ご法はつ度と！　ならば、結婚を前提につき合うなどという回りくどい真ま似ねはせず、即座に結婚するだけだ!!」

「させるかあああああああああああ！」

ついに愛香が走り出し、先生に飛びかかる。って、えええぇーっ!?

「……な……!?」

だが、一撃必倒を誇っていた愛あい香かの拳こぶしは、メイド先生のクロスした両腕にガードされた。

メイド服の袖そでが破れ、布片が宙に舞う。

いやお前、仮にも教師にどんだけの力で殴りかかってんだよ……。

「ほほう、そして君がもう一人の噂うわさの少女、津つ辺べ愛香君だな。若いのになかなかの功クン夫フーだ」

「強い……！」

愛香はすかさず距離を取り、両腕を胸の前で構えた。

「いや、ここまでだ。ホームルームが終わったからな」

「どうしてくれるんですかキーンコーンカーンコーンしてるじゃないですかー!!」

この世の終わりのような表情で絶叫するトゥアール。やはりいろいろと企たくらんでいたようだったが、完全に食われてしまった。このスタートでは、今後急にはっちゃけるのも難しいだろう。

観み束つか総そう二じ──経験者は語る、だ。

「ところで男子諸君。観束君のように、婚こん姻いん届とどけが欲しい者はいないか？　念のためこの学園の男子生徒全員分の枚数は持ち歩いている、遠慮はいらないぞ」

クラスの男子たちは、受験当日もかくやという猛烈な気迫と共に一斉に教科書を広げた。

自分たちには関係無いと思っていたことの矛先が、軌道を変えるどころか分裂して飛んできたのだから、焦るだろう。

「嫌だ……俺はテイルレッドたんと結婚するんだ。婚こん姻いん届とどけなんて目に映しただけでテイルレッドたんが悲しむ!!」

「そうか、これは罰なのか……まだ俺がテイルレッドに相応しい男ではないのに、愛だけは一丁前だという！　ならば、学年主席を目指すのみだ!!」

「念のため、帰ったら俺も婚姻届を書くか……。妻の欄らんはそう、テイルレッド──」

　俺は漏もれ聞こえてくる暗黒の言葉に、人生の墓場に到達したような絶望に襲われた。

　何かもう、そもそもトゥアールの奇行を心配する次元じゃなくなってきている気がする。

　俺たちは本当に、世界を守れているのか？　明らかに、ツインテール属性以外の何かを、俺は拡散させてしまったのではないか!?

　男子の反応が芳かんばしくないので、桜さくら川がわ先生は残念そうに教卓を離れる。

「ふむ、まあ今日はいいだろう。津辺君、いずれまた、語り合おう」

　末尾に拳でな、とつきそうな雰囲気を漂わせながら、メイド先生は去って行った。

　嵐あらしのような人だった。学校で会長といる時や、戦場で見た今までの印象と全まつたく違う。

　会長お付きのメイドという重責から解放された、あれが本来の姿なのかもしれない。

　後に残ったのは、千切れたメイド服の布片と、俺の手の婚姻届……は、戻ってきた愛香に引ったくられて、ビリビリに破かれた。何な故ぜか、女子から歓声や口笛が。

　全男子生徒分あるって言ってたが、あの先生、全てのクラスでああやって自己紹介していくつもりなのか。

　……まさか。

　婚こん姻いん届とどけを渡す被え害も者のを物色している……とか。

そんなまさか……なあ。

◇

スパロウギルディは、クラーケギルディとリヴァイアギルディの部隊を迎えるべく、若輩ながら実力は折り紙付きであるスワンギルディを伴い、基地最奥の搬入口へと向かっていた。

「と、とにかく、あのお二人が手と手を取り合って下されば、鬼おにに金かな棒ぼうなのだ。我われらで何としても橋渡しをせねばならぬぞ」

「はっ……」

看護服属性ナースの申し子──神童とまで謳うたわれた、スワンギルディだが、隊長のドラグギルディが倒されてより、すっかり覇は気きを失ってしまっていた。ドラグギルディと旧知の仲であるリヴァイアギルディが、彼の心に再び火を灯ともしてくれるのを、スパロウギルディは期待している。

だが、水と油の関係であるあの二体を、自分が取り持つことができるのか。

焦燥に駆られ、自然と歩みも速くなる。

アルティメギルが、無数の小隊に分かれて平行世界を侵略しているのは、一つの世界に総戦力を投入し一気に侵略するよりも、多くの世界に戦力を振り分け、少しずつ侵略を進めるほうが効率がいいからだ。

だが、隊を小分けにしているのには、別の理由もある。

エレメリアンたちの個性の分散である。

個々が力を増し、強くなれば、その分我がも強くなる。反発や衝突も生まれる。

　ましてや、属性力エレメーラの化け身しんであるエレメリアンたちにとって、互いの主義主張はまさしく己おのれの存在そのもの。

　少しの諍いさかいが、互いに引かず、譲らず、争いに発展してしまうことも少なくない。

　そのための分隊化でもあるのだ。

　すでにベテランの地位にあり、それを理解しているスパロウギルディだからこそ、今回の招致には不安を隠せるものではなかった。

「っ！　……あああ……！」

　目の前に広がる恐れていた事態に、スパロウギルディは早速頭を抱かかえた。

　移い動どう挺ていの着艦した搬入口は、猛烈な殺気に包まれている。

　すでに二軍は到着するや真まっ向こうから睨にらみ合い、火花を散らしていたのだ。大将の二体は、その最たるものだ。

　細身で、精せい悍かんな顔つきに似合わず、肩から垂れ下がっているものを中心に、全身に細い触手を無数に備える、貧乳属性スモールバストの雄ゆう、クラーケギルディ。

　一方、リヴァイアギルディは、まるで人魚の尻尾しつぽのように股こ間かん部から巨大な一本の触手が伸びており、それを胴体に螺ら旋せん状に絡からめて鎧よろいとしていた。彼はアルティメギルにおいて、巨乳属性ラージバストここにありと謳うたわれている。

　二体は十数体の部下を後ろに従え、今にも戦闘を始めんばかりに威い嚇かくし合っていた。

　最悪の事態を避けるため、スパロウギルディは火中に飛び込む心境で、二人の前に進み出る。

「クラーケギルディ様にリヴァイアギルディ様……お、お二人がこの世界に来て下さるとは、光栄です」

　スパロウギルディの敬礼に軽い手振りで応こたえるも、リヴァイアギルディは露骨に不機嫌を滲にじませた口調で言う。

「首領様の命令は絶対だ。どうも強敵打倒の増援にかこつけて、どこぞの能無し部隊の引き受けまで任されたようだが、まあ、やり遂げてみせようさ」

　明らかな挑発に、クラーケギルディは憤然と言い返した。

「言ってくれるな。それはこちらの台詞せりふよ。侵攻する世界で何度も情けをかけ、属性力エレメーラの完全奪取を遂行せず見逃した半端者が」

「お前こそ、時代錯誤な騎士かぶれが一段と増したようだな。何だ、揃そろいのマントなど部下にはおらせおって」

「お言葉ですがリヴァイアギルディ様！　このマントは我われ々われが──」

　反論しようとした部下を挙手で諌いさめ、クラーケギルディはぎろりとリヴァイアギルディを見み据すえた。

「ともかくだ。私の部下たちが妙な影響を受けぬよう、出しゃばりは慎つつしんでもらおう。巨乳属性ラージバストなどと、下品な属性を吹ふい聴ちょうする貴様にはな！」

「何を！」

　今度は、リヴァイアギルディが、いきり立つ自軍の部下を諌める番だった。

「時代を読めぬ骨こつ董とう品ひんめが。ツインテールには貧乳が似合うなどと、原始時代のような思い込みに縛られる貴様こそ、憐あわれよ!!」

「……」

「……」

　二体は、同時に目を見開き──

「巨キヨォォォ!!」

「貧ヒンッッッ!!」

　裂れつ帛ぱくの叫び。それに続き、耳をつんざくような破裂音が大気を震ふるわせる。

　激突の衝撃波だけで、周囲の壁が消し飛びそうなほど軋きしみを上げた。

　その場の誰だれもが、二体がどんな攻防を繰り広げたのか目に捉とらえることはできなかった。

　やがて、リヴァイアギルディは股こ間かんの触手を身体に巻き付け、一方のクラーケギルディは背中から生えた触手を縮めて身体に格納した。おそらく、それらが激突したのだろう。

「……まあよい。部隊も大きくなれば、今の基地では足りなかろう。私たちの母き艦ちも合わせねばならん。作業が済み次第、噂うわさのツインテイルズとやらの記録を見せてもらう」

「は……はっ！」

　スパロウギルディが応こたえると、クラーケギルディは部下たちと共に、ドッキングしたブリッジを渡って自分たちの移い動どう挺ていへと一いつ旦たん戻っていった。

「よし、お前たちも戻れ。俺は少し野や暮ぼ用ようがある」

　部下たちにそう言い渡したリヴァイアギルディは、スパロウギルディに基地全体の構造について聞く。その最中、ドラグギルディの部屋だった場所も尋たずねる。

「ド、ドラグギルディ様のお部屋に、何か御用が……？」

　恐る恐る聞くスワンギルディに、リヴァイアギルディは大声で笑い答えた。

「はははははははは！　なあに、負け犬の面おも影かげでも見て戦の前に大笑いでもしておこうと思ってな!!」

　スワンギルディは幽ゆう鬼きのようによろめきながらリヴァイアギルディに歩み寄ると、その節くれ立った肩をがっしりと摑つかんだ。

「どうか今の言葉、お取り消しを」

「何な故ぜだ」

「よ、よさんか、スワンギルディ！」

　スパロウギルディの制止も聞かず、スワンギルディは憤怒を面おもてにみなぎらせて上官を睨にらみつけた。

「ドラグギルディ様は、立派に戦われ、昇天なさりました。敗れたとはいえ、まことと見事な――」

「慎つつしめ、若造が!!」

　スワンギルディはリヴァイアギルディが一瞬にして解き振るった、股間の巨大な触手の一振りで吹き飛ばされ、壁に叩たたきつけられた。

　先程、クラーケギルディと一合交えた際に放った、彼の最強の武器だ。

「ぐうっ！」

「貴様も戦士なら、いつまでも敗将になどこだわらず、剣の一本でも振っておれ！　負け犬の後を継いで同じ負け犬になりたいというのなら、話は別だがな!!」

　股間の触手を胴に巻きつけて仕舞い、スワンギルディを傲ごう然ぜんと見下ろすと、リヴァイアギルディは案内のあった方向へと歩いていった。

「うう、私が弱いばかりに亡きドラグギルディ様にあのような辱はずかしめを……」

　スワンギルディは、自分の身体からだの傷よりもドラグギルディへの侮ぶ辱じょくに深く傷ついていた。

　スパロウギルディは、そんなスワンギルディを抱き起こし、ゆっくりと首を振る。

「そうではない……リヴァイアギルディ殿を見よ」

　去りゆくリヴァイアギルディを憎々しげに見るスワンギルディだが、すぐにその表情からは険けんが解けていった。

「あ、あれは……」

　リヴァイアギルディの股こ間かんの触手は、彼の身体を引きちぎらんばかりに張り詰め、震ふるえていた。

　顔で怒って、股間で泣いて。

　無骨な戦士の悲しみの在ありようを目まの当たりにし、スワンギルディは言葉を失う。

「リヴァイアギルディ様は、ドラグギルディ様の旧知の友……悲しくないはずがあるまいよ。ああいう方だ。力が強いだけでは一部隊を率いることはできぬ。ただ、あのお方もまた、自分に厳しきだけよ」

　スワンギルディは、また自分の未熟さに打ちひしがれ、頭こうべを垂れることになったのだ。

　しかし……ここで終わる男ではなかった。

「剣の一本でも振れ……確かに、その通りです」

　スワンギルディは意を決したように立ち上がると、スパロウギルディに頭を下げた。

「スパロウギルディ殿……あなたならご存じでしょう。ドラグギルディ様が成し遂げられたという、伝説の試練への挑み方を。どうか、ご教授いただきたい」

「……なに……!?」

「一年続けなければ修了にはなりませぬが……それでも、時が来るまで続けてみせましょう」

「スワンギルディ、お前……スケテイル・アマ・ゾーンを！　死ぬ気か!!」

　ドラグギルディの武勇の中でももっとも名高い、アルティメギル五大究極試練の一つ、スケテイル・アマ・ゾーン。通販で買った商

品が一年間、透明な箱で梱こん包ぽうされ配達されるその荒あら行ぎように、スワンギルディは挑む覚悟を決めたのだ。

「ドラグギルディ様の遺志は……私が継いでみせます！」

　果たして、白鳥は竜に届くことができるか──。

　スワンギルディの戦いが、始まった。

　リヴァイアギルディは、残されているドラグギルディの部屋を訪れた。

　エレメリアンに、墓標を立てる慣習はない。

　終わりは何も残さず、世界に還かえるだけだ。

　精神の、心そのものの存在である彼らにとって、世界中に語り伝えられるどんな神話や宗教の輪さ廻い転か生いも、心の支えと恃たのむものではない。

　まさに往おう生じよう際ぎわよく消滅して世界に還り、仲間の武勇を見守るのみ。

　その潔いさぎよさこそが彼らの強さであり、誇りであった。必要以上に悲しむことはないし、いつまでも引きずることもない。

　それでも……別れはつらいものだ。

　最高の幼女に背中を流してもらいたい、と常に夢を語っていたドラグギルディの部屋には、部下たちが手た向むけた幼女のフィギュアが積み上げられ、奇くしくも墓標のようになっていた。故人の人柄を思わせる。

　その即席の墓標の上に、リヴァイアギルディは持参したおっぱいマウスパッドを供えた。

　幼女とは対極にある、豊かなバストを模したマウスパッドだ。

「受け取れいドラグギルディ……俺からの、せめてもの餞はなむけよ」

　人間ならば。供え物は、魂たましいの慰めになろう。

　だが、彼らはエレメリアン。

　血も肉も持たない、精神の生命体。

　花の芳に香おいも知らなければ、美さ酒けの味も分からない。

　そんな彼が、同と胞もの死を悼いたんで捧げるものは……おっぱいマウスパッド以外に何がある。

「お前はツインテールのみを求め、走り抜けた。だが、もうよいのだ。ゆっくりと休むがいい。そして、巨乳にも目を向けてみるがよい……。戦いを忘れ、心安らぐことを祈っておるぞ」

　祈りを捧げることもなく、そう言い残したきりで、すぐに踵きびすを返す。

「お前を破ったという最強の少女……そのツインテールを奪うことで、お前への鎮魂としよう」

　部屋を後にし、搬入口に戻ったリヴァイアギルディは……移い動どう挺ていには戻らず、傅かしずいた姿勢のまま主人を待っていた一体の戦士に声をかけた。

「分かっておるな。クラーケギルディの部隊には負けられぬぞ。巨乳属性ラージバストの力を、見事知らしめてみせよ」

「はっ!!」

　意気揚々と立ち上がる、リヴァイアギルディよりもさらに巨きよ軀くを誇る戦士。

　そびえ立つ猛たけ々だけしい二本の角は、荒ぶる猛牛を思わせる。

　バッファローギルディ……リヴァイアギルディの懐ふところ刀がたなが、ツインテイルズ打倒に燃え、荒々しい足音を響かせて出撃した。

◇

　トゥアールが高校デビューに完全失敗したその日の放課後、エレメリアンが出現した。

　現場は、グラビアアイドルのオープンコンテスト会場。

　逃げ惑まどい、跳ねる胸が乱舞する。

　愛あい香かの怒りは、何な故ぜかエレメリアンより水着姿の女の子たちに向けられているようだった。

「胸くそ悪い、瘴しよう気きの濃い場所だわ。とっとと片付けて、帰りましょう」

「いや、早く終わらせたいのは同感だけど……」

　華やかな会場におよそ不釣り合いな、縦も横も大きな牛のようなエレメリアン。それも、あの「し」の字に曲がった鋭く大きな角は、野牛……あるいは闘牛だろうか。

　そいつは、女の子たちに一いち瞥べつもくれず、不機嫌そうに腕組みをして仁王立ちしていた。

「はったりばかりで見かけ倒しの者ばかりよ！　やはり真の巨乳はここにもおらぬか」

　やけにあっさり見逃しているとは思ったが、来てはみたものの、こいつが求めるほどのターゲットはいなかったみたいだ。

「とにかく、まずはツインテール属性を奪うのだ！　かかれい!!」

　ツインテールにしている子たちは、戦闘員アルテイロイドに囲まれ、へたり込む。怯おびえつつもテレビ局のカメラを意識してポーズをとっているように見えるのは、気のせいだろうか？

　助けようと、彼女たちに近づいた俺たちの前にそのエレメリアンが立ち塞ふさがった。

「邪魔はさせんぞ、ツインテイルズ！　我わが名はバッファローギルディ！　我が愛する巨乳属性ラージバストを広めるという大義を掲げ戦う主あるじのためならば、この命惜しくはない!!」

　見た目はなかなか強そうな敵だが、いつも通りに強こわ面もてと言動が一致していない。

「巨乳属性ラージバスト……そんな俗な属性、ホントにあるんだな……」

　げんなりする俺とは裏腹に、愛あい香かは獲物を見つけたハンターのようにギラリと目を光らせた。

「……巨乳属性ラージバストですって……？　つまりあんたを倒せば、巨乳の属性玉エレメーラオーブが手に入るのね……？」

「お、おいブルー……」

　愛香の獲物を狙ねらうような目に気づかず、バッファローギルディは俺にしみじみと語り出した。

「俗な属性とは言ってくれる。だが、お主のような幼な子にはまだ分かるまい。願わくは、成長と共に胸も大きくなると信じる純粋さを失うでないぞ。そして、弛たゆまぬ錬磨も忘れてはならぬ。それを放棄したなれの果てが、この者たちの中にも大勢いるように人工的な……」

「オーラピラー……んでエグゼキュートウェ――――ブ!!」

　まだ戦闘態勢にすらなっていない敵に、愛香は初しよっ端ぱなから必殺技をブチかました。

　大爆発するバッファローギルディ。聞き取れた最期の言葉が、「乳とは」だった。

「ひでえ!!」

　敵とはいえ思わず同情する。鬼のような形相の愛香を見て、一体どちらが敵なのかと思わず迷ってしまう。かなりの期待を背負っていたような雰囲気だったが、その顚てん末まつがこの瞬殺では、奴やつの言っていた主とやらも言葉を失うだろう。

ブルーは、屍し肉にくを漁あさるハイエナのように、バッファローギルディが消えた場所の爆煙を手で掻かき分けると、ほどなく、地面に落ちていた菱ひし形がたの宝石を拾い上げた。

「やったわレッド！　巨乳属性ラージバストゲットよ！」

「私利私欲のために敵を血祭ってんじゃねーよ!!」

「これで……これであたしは……ふ、ふふ」

やめろ……やめろ愛あい香か、今日は場所が場所だけにカメラがメッチャ回ってるんだ、明日朝イチで後悔するから、その顔はやめろ――――っ!!

「あ、あの～」

武器を出すことすらなく戦いを終えた俺のもとに、ツインテールのグラビアアイドルの子が何人か足早に駆け寄ってきた。

「ツインテール、触ってもらえますか？」

「へ？」

「今、噂うわさになってるんですよ～！　テイルレッドちゃんにツインテールを触ってもらうと、幸せになれるって！」

何だ、その眉まゆ唾つばの都市伝説……。少なくとも俺はツインテールを触れば幸せな気持ちになるけど、見ず知らずの子相手だとさすがに気が引けるなあ……。

「そ、それじゃあ……」

あまり邪険にもできないと思い、恐る恐る、一番近い女の子のツインテールを摘つまむ。

「あん♪」

すごく演技くさい喘あえぎ声ごえが合図になったように、我われも我もと女の子たちが群がってきた。

やばい、胸の津波に押し流されるー!!

「戦いが終わったんで撤収しまーす!!」

　輸送機ことテイルブルーが、低空飛行で飛んできて俺のツインテールを片方引っ摑つかみ、急上昇した。

　不満の声を上げる女の子たちが、見る見る遠ざかっていく。

「痛っ……おい、ツインテールを乱暴に扱うなー！」

「あんたってホンットに……！　ホンットにもー!!」

「ぎゃー！　揺らすなー!!」

　両手でツインテールを摑み直すと、ブランコのように揺さぶり始めた。

「……まあ、いいわ。アレを手に入れたからには、これであたしも、トゥアールに馬ば鹿かにされることもなくなるしね！」

　よほど嬉うれしいことがあったのだろう。

　愛香は飛行しながら、バンザイをした。

　バンザイって、お前……。ああ、またこのパターンか。

　眼前に迫るアスファルトを前に、せめてもの抵抗として、俺は大の字のポーズを取った。

　せめて、生きた証あかしを、大地に刻みつけようと。

◇

「アルティメギルが戦力を増強してきているのは、間違いないっぽいな」

　地下の秘密基地のコンソールルームに、俺、愛あい香か、トゥアールの三人で集まっての作戦会議。

　俺とトゥアールは映像を確認しながら、今日の敵について考えを話し合う。

「主あるじのため巨乳属性ラージバストを──ってことは、当然学校水着属性スクールスイムのタイガギルディじゃないだろうし、幹部クラスがまた別に来ているってことだろ？」

「そうですね。これまでの情報を総合すると、多くの分隊が別行動で異世界を侵略していて、今回のようにイレギュラーな事態で援軍の投入を想定した組織枠になっていると考えて間違いないでしょう」

　つまり、倒しても倒しても補充はいくらでもいるとも考えられる。

　それどころか、撃退するたび、雪だるま式に補充される戦力を増やして規模を大きくしていくかもしれない。

「このまま、俺たちだけで対処できるかな……」

　俺は、胸の内の不安を素直に吐露した。もはやここから先は、トゥアールでさえ予想できない未知の規模を見み据すえなくてはいけない。

　アルティメギルの話を初めて聞かされたあの夜も、俺は敵の存在の途方のなさに不安を抱いたものだが……それすら、大木の枝の一葉に過ぎないなどと、どうして想像できただろう。

「大丈夫です、総そう二じ様。総二様のツインテールを愛する心に、限界はないんですから！」

「……うん。ありがとう、トゥアール」

　やるしかないのは分かっている。あえて不安を口にして、慰めの言葉を期待するのは、ずるいことかもしれない。それでも……トゥアールの励ましが、今は本当にありがたい。

　そして、自分たちを鼓舞して士気を高めなくてはいけないこの局面で、残念ながら俺は仲間にひとつの諦あきらめを促さなければならなかった。

　コンソールルームの隅で、左腕を叩たたいたり振り回したり噛かんだりしている忙せわしない人影。

「愛香。いい加減諦めろって」

一人、テイルブルーに変身している愛香は、今日の戦闘で手に入れた巨乳属性ラージバストの属性玉エレメーラオーブを属性力変換機構エレメリーションにセットし、発動させようと何度もチャレンジしていた。

しかし、結果はご覧の通り。うんともすんとも言わず、今や愛香は怒りさえ消え失うせて憔しよう悴すいしきっていた。

「……使えない……」

この世の終わりのような表情は、数時間前のものと完かん璧ぺきに対極のものだった。愛香は巨乳属性ラージバストの属性玉エレメーラオーブを使えば、自分も巨乳になれると思ったようだ。

「お前、仮に使えたとしても、今まで名目通りの効果だったことあるか？　兎耳属性ラビットだって、ウサ耳が生えてくるわけじゃなかっただろ」

「それでも！　それでもあたしには、最後の希望だったのよおおおおおおお!!」

おいおいと泣き始める愛あい香か。

使えない、というのは、能力が役に立たないということではなく、文字通り、〝使用できない〟のだ。

これはトゥアールも知らなかったことらしいのだが、実は、倒したエレメリアンの属性玉エレメーラオーブ全てが、テイルギアで使えるものではないのだ。

純度、の違いらしい。

例えば以前戦ったフォクスギルディは、奴やつを構成しているコアである髪紐属性リボンのほかに、人形属性ドールも少しながら備えていた。

人間の属性力エレメーラ、趣味嗜し好こうが一つだけではないように、エレメリアンも、生きていればそれだけ時間と共にいくつかの属性力エレメーラを備えてしまう。

　そして、後から得た属性力エレメーラが大きくなればなるほど、コアである本来の属性力エレメーラの純度を下げてしまうらしい。

　俺たち人間ではそういうことは起こり得ないのだが、属性力エレメーラそのものの存在であるエレメリアンにとっては、属性力エレメーラ同士の干渉があり、コアの純度を下げる。それが、トゥアールの結論だった。

「今までの戦いで、一〇体以上のエレメリアンを倒してきたけど、その中で使える属性力エレメーラはそんなに多くないんだよな」

　人形属性ドール。体操服属性ブルマ。髪紐属性リボン。兎耳属性ラビツト。

　そしてタイガギルディの学校水着属性スクールスイム。明確に発動できるのは、まだこれぐらいだ。

「そうだ、トゥアールちゃん。ドラグギルディを倒して手に入れたツインテール属性の属性玉エレメーラオーブで、テイルギアをパワーアップとかはできないの？」

「ツインテール属性を属性力変換機構エレメリーションで使用するのは、暴走の危険性があります。これは、使えないようセーフティをかけているんです、お義か母あ様」

「二倍に掛け合わせるってお約束だと思ったけど、いろいろと難しいのねー」

「発動できたとして髪の房が四つになったらどうするんだよ、ツインテールじゃなくなっちまうぞ………………って、何で当たり前のように交ざってんだよ!!」

　初めからいたかのように当たり前に会話に加わっている闖ちん入にゆう者しやに、俺はビルの屋上からライフルで狙そ撃げきされたような頭痛に襲われた。

　母さんは、地下基地に来るのが日課のようになってしまっている。

「まあまあ」

　トゥアールまで一緒になって、俺をなだめようとする。そういえ

ば、トゥアールは全まつたく動じていない。

「総そう二じ様。戦う者だけでは、視野が狭くなりがちです。こうして日常の象徴であるお義か母あ様の意見を賜たまわることで、思いがけないアイディアが浮かぶかもしれません」

「どこが日常の象徴なんだよドップリこっち側に浸つかってるじゃねーか!!」

　俺は深く溜ため息いきをつき、

「……関係ない母さんを、あまり巻き込みたくないんだよ……」

　言い訳でもあるが、紛れもない本心だった。

「関係あるわ……お腹なかを痛めて産んだ我わが子が、世界を守るヒーローなんですもの」

　自作らしい女幹部コスチュームを身にまとって、清らかな微笑ほほえみを浮かべる母さん。

「その世界を守るヒーローが鼻からスイカ出すぐらいの痛みを胃おなかに直撃されてる原因に心当たりがありませんか母上様!?」

　胃おなか痛い……！　お腹を痛めて産んでくれた親のおかげで、すごく胃おなかが痛い!!

　三六歳の母親のノリノリなコスプレをまざまざと見せつけられるって、思春期の息子むすこが非行に走るには十分すぎる理由だぞ!!

「でも、勿もつ体たいないじゃない。あんなに強敵だったんなら、必ず何かの役に立つと思うの。総ちゃんが大苦戦した、初めての敵ですものね。最後の逆転のグランドブレイザーには、感動して泣いちゃった。総そうちゃん成長したなぁ、って」



「息子むすこが死力を尽くした戦いを幼稚園の運動会撮影したビデオみたいなノリでほのぼの見るなあああああああ!!」

　本人が一ミリも羞しゅう恥ちを感じず堂々としているせいで、倍返しになって俺は転げ悶もだえる。

　しかも余裕で技名まで丸暗記して、この人は一体どこまで行くつもりなんだ！

　そう──その、死力を尽くして戦った、ドラグギルディの属性力エレメーラだ。

　戦いの後に回収した奴やつの属性玉エレメーラオーブは、紛れもないツインテール属性だった。

　あいつほどのツインテール属性が、純度が低いなんてあり得ない。けど、俺はもちろん、愛あい香かも一度も使っていない。トゥアールに先程の説明で釘くぎを刺されたためだが、こう聞くと、確かに勿もつ体たいないとも思う。個人的にも、奴やつの力なら借りることに躊躇ためらいはない。

　母さんはうーん、と悩む仕草を見せ、

「それじゃあ、その属性玉エレメーラオーブをコアにして、もう一つテイルギアを作れないの？」

　とても一般人の視点とは思えない提案をした。

「や、やめてくれよ母さん、自分がテイルギア装着するとか言い出すの……」

「心配しなくても、母さんにはツインテール属性がないじゃない、総ちゃん」

　その代わり、日に日に別の属性のカリスマになりつつあるけどな。

「それにね、母さん、昔ヒーローに憧あこがれていたけど、今はヒーローの母、観み束つか未み春はるなのよ。そんな差さし出でが

ましい真ま似ねはしないわ。母さんは総ちゃんの母親だっていうだけで十分幸せなの」

　いつも、不意打ち気味に割りと感動することを言うから困る。

　そして俺は、母さんの服装を見てすぐさま現実に引き戻されるのだ。

「いや、でもそうだな……仲間が増えてくれるのは、心強いかな」

　──ツインテイルズがもう一人増える。

　その想像を膨ふくらませようとしていた俺は、トゥアールに詰め寄られた。

「いけません、総そう二じ様！　これ以上、誰だれかを戦いに巻き込むのは！」

　さらに、部屋の隅で未練がましく巨乳属性ラージバストの属性玉エレメーラオーブと格闘していたテイルブルーまでもがずかずかと歩み寄ってきて、胸むな倉ぐらを摑つかんでくる。

「そうよそーじ、あんなヘンタイたちと、どこぞの女の子を戦わせるっていうの!?」

「そ、それは、そうだけど……でも、この先のことを考えれば、もう一人ぐらい仲間がいてもいいんじゃないか？　本人にやる気があれば……」

「「絶対ダメ（です）!!」」

「は、はい……」

　二人に気け圧おされ、俺はそれ以上何も言えなかった。

　確かに危険だという抗議は分かるが、気のせいか二人の必死な眼まなこはそれ以上の猛烈な拒否反応を俺に訴えてきている気がする。

「でも、テイルギアの予備を作っておくのはいいかもしれませんね。特に愛あい香かさんのギアは年季が入ってますし、新調するのもいいかもしれません」

「別にいいわよ、これで」

　嚙かんだりしたせいで多少唾だ液えきに濡ぬれた属性力変換機構エレメリーシヨンを、愛香は親しみを込めるように軽く叩たたいた。

「いえ、というのもですね、実は今、属性玉エレメーラオーブのハイブリッド技術を研究しているんですよ」

「ハイブリッド？」

　トゥアールはコンソールパネルに設計図を表示した。難解すぎて、見ても訳が分からないが……テイルブレスと、属性玉エレメーラオーブがラインで結ばれているのが意味するところは、何か象徴的なものを感じた。

「テイルレッドを見ていて思ったんです。総そう二じ様のテイルギアは装着すると幼女化しますよね。でも、別に私の幼女属性が中に組み込まれているとかそういうわけではないです。未いまだに私も原理は分かりませんが、この偶然、あえて必然にすることも可能なんじゃないかって」

「つまり、属性力エレメーラの掛け合わせを人工的に再現する、ってことか？」

　頷うなずくトゥアール。

「さっきの使えない巨乳属性ラージバスト。あれを上う手まく、新しいテイルギアに組み込めれば、属性力エレメ変換機構リーシヨンでは使えなくても、根本的な身体変化には作用するかもしれません」

　耳ざとく反応する愛香。見る見るうちに目に輝きが戻っていく。

「それじゃあ、巨乳に変身できる新しいテイルギアが作れるの!?」

「いえ、まだ研究段階なので……」

　愛香はバネのように飛び跳はねると、空中で変身を解除し、トゥアールの前で両手を組んで祈るように見つめた。

「お願いトゥアール！　完成したらそのテイルギア、あたしにちょ

うだい!!」

「さっき、今ので十分って言ったじゃないですか!!」

「新しいのができるなら話は別よ！　このテイルギア、起動する時ガリガリ音が鳴るし、温度がやたら上がるし、いきなりフリーズもするのよ。早めに交換しとかないと！」

　もはや末期のパソコンみたいな症状だ。元の持ち主にムチャクチャ失礼だろう……と思っていたら、意外にも、トゥアールは笑顔だった。いや、笑顔といっても──

「そうですか～、欲しいんですか～」

　ああ、ああああ……。また、この展開だ。愛香もだが、何な故ぜトゥアールも学習しないんだ。

「フッフッフ、それじゃあまず今までの非礼を詫わびて土下座でもしてもらいましょうか……そして私を様付けで敬うやまうように……」

「トゥアール様!!　今まですみませんでした!!」

　その間、コンマ一秒。逡しゆん巡じゆんは一切なかった。

　愛あい香かは頭突きするように額ひたいを床に叩たたきつけ、土下座をした。

「ひいいいいいいいいいいいいいいい蛮ばん族ぞくが平身低頭!!」

　嘘うそだろ……他人に謝るくらいならいっそ殴る、でお馴な染じみの愛香が……土下座なんて!?

「や、やめて下さい愛香さん、頭を上げて下さい！　どうせ後で仕返しするつもりでしょう！」

　ゆっくりと頭を上げた愛香は──さらなる驚きよう愕がくを俺たちにもたらした。

「お願い……します……」

「ううっ、け、血けつ涙るい……!!」

　血涙。魂たましいの慟どう哭こく。決して頭を下げたくない相手に、何な故ぜかライバル視しているトゥアールに、愛香は心を捨てて土下座しているのだ。

「お前、そこまでして巨乳に……」

　すまん愛香。もう、貧乳を口くち喧げん嘩かのネタにするのはやめるよ……。

「あたしの唯一絶対の欠点は胸が無いこと！　母性の証あかしが、あたしには備わっていない!!」

「いや、母性の証の前に母性そのものを身につけろよお前は！」

「女は誰だれだって、胸が欲しいのよ！　スカした顔して『別に胸なんてどーでもいいし』とかほざいてる女だってね、ちょっと胸むな倉ぐら摑つかんで軽く揺さぶれば『やっぱ欲しいです』って本音が出るんだからね!?」

「お前、両手を後ろ手に組んだ状態のまま誰かと分かり合おうって、人生で一度でも思ったことはないのか？」

「総そう二じ様。基本的に愛香さんの言うことは全て否定して生きていたいがモットーの私ですが、これは同感です。胸がどうでもいい女なんていません。毎日一喜一憂。人生の命題です」

「そ、そうか……」

　深い。女の子の願望って、底知れず深い……。

「もし巨乳になれるのなら、相手が神々だろうと屠ほふり去る覚悟があるのに……」

「そんな理由で人間に謀む反ほん起こされたら、神様もたまんねえだろ」

「ああ……胸が欲しい……胸が……」

　悲痛な願い。

　砂漠を三日彷徨さまよい死の淵ふちにある者が、うわごとで水を求めるかのような、全てと引き替えの願いだった。

　トゥアールは観念したように跪ひざまずき、愛香の肩にそっと手を置いた。

「……わかりました。その願い、聞き届けましょう」

「トゥアール様!!」

　感かん極きわまったのか、トゥアールに抱きつく愛香。

　それでも、抱きついたのが胸でなく腰なあたり、巨乳への闇やみは深い。

「フッ……敵に塩を送るとは……私も甘いですね……」

「ありがとう……ありがとう！　この恩は、一生忘れないわ!!」

「いいんですよ、愛あい香かさん。私たち、友達じゃないですか」

　敵だったり友だったり忙しいが、これがいわゆる戦友ともなのだろう。

　喧けん嘩かばかりしていても、やっぱり二人は親友なんだな。

　二人の友情にほっこりしつつも、その時、俺は見てしまったのだ。

　腰に縋すがり付いて咽むせぶ愛香を見下ろすトゥアールの笑顔が、かつてない邪悪さに満ちているのを。

◇

　明日から再び連休を迎える放課後。

　ツインテール部の部室には、軽快なキータッチ音が響いていた。

　トゥアールの広げたノートパソコンには、テイルギアの設計図らしきものが広がっている。ワイヤーフレームに無数の数式が繋つな

がり、重ねて表示されたウインドウが目まぐるしくアクティブ・ディアクティブを繰り返す。

　この世界の常識を超えた叡えい智ちを二本の腕で自在に操るトゥアールを見て、俺は素直にかっこいいと思った。

　普段の剽ひよう軽きんさからは想像もつかない、崩壊したファーストインプレッションからしばらくご無ぶ沙さ汰ただった彼女の神秘的な印象を、久々に実感した気がする。

「テイルブレスの完成までどのくらいかかるんだ？」

「ゴールデンウィーク明けには出来上がると思います。新しい機能を組み込むので、基礎設計からの見直しが必要なんです」

「うん。ゆっくりでいいよ。無理は禁物だぞ？」

「ありがとうございます、総そう二じ様。今日、疲れて無防備に倒れる予定ですので、その時はよろしくお願いしますね！　疲れているせいでいろいろはだけているはずです。ほぼ必ず！」

「いや、だから無理はするなと……」

　あの広大な地下基地さえ一晩で完成させるトゥアールが、これだけ時間を要するのか。やはりテイルギアは、異世界のオーバーテクノロジーの最高峰なんだろう。

　慎重な足取りでトレイに載せたティーカップを運んできた愛香が、トゥアールの傍かたわらに立った。

「トゥアール様、お茶です」

「はい、ご苦労様です」

「あたしのために、貴重な連休を潰つぶしていただき、申し訳ありません」

「いいんですよー。ひいてはこの世界のためです」

　トゥアールはティーカップにちょっとだけ口をつけると、トレイに戻した。

「何か盛られていたら困るので、このお茶は愛あい香かさんが飲んで下さい」

　以前に愛香から同じようなことをやられた仕返しのつもりなのだろう。

　そして、普段の愛香ならここで、うるせえ飲め、と顔に紅茶をブッかけた挙げ句、パイ投げのように金属製のトレイを顔面に叩たたきつけるぐらいはやりそうだが──

「……は、ぃ……」

　愛香は何か言い返すことすらせず、部室の隅に設置した茶道具を並べている机へと戻る。

　……ずっと、この調子なのだ。トゥアールが何を言おうとも、愛香は怒り狂うことなく、黙って従っている。

「そういえば総そう二じ様、最近ツインテイルズのフィギュアがちょくちょく発売されているんですけど、これ、見て下さい。昨日見つけた、新製品の食しよく玩がんなんですけど」

　トゥアールはパソコンでブラウザを開き、商品の紹介ページを表示してくれた。

「全八種類のうち、テイルレッドが七種類、シークレットでテイルブルーが一種封入されているんです」

　画面を見る。……これ、ツインテールの作り込みが甘いな。躍動感が足りない。

　この食玩を買い求める人は、まずはツインテールに注目するはずだ。

　低価格帯のアイテムこそ、こだわるべき点を一点集中でこだわって欲しい。

「七対一か……。何か、作為的なアソートだな」

「ほんとですよね、テイルブルーがレアじゃ、当たっても逆に落ち込みます。テイルブルーだけは、外箱から中に何が入っているか分かるようにしないと苦情が際限なく増えるでしょう」

「いや、そーいうことじゃなくて！」

「コスト削減なんでしょうかねー。テイルブルーは胴体がただの直方体ですから、原型作りも楽そうですし」

　ちらりと愛香のほうを窺うかがうと、菩ぼ薩さつのような表情になっていた。

　顔で微笑ほほえみ、怒りが体内を駆け巡っている、実に危険な状態だ。

　ひょっとしてトゥアールは、自分が余命一か月であることを知ってしまったのだろうか。

　そんなことでもなければ、自分の命をボールにして、崖がけの上でリフティングするような今の状況の説明がつかない。

　今まで観みたどんなにスリリングなサスペンス映画も陳腐な子供騙だましに思えるほど、今の二人のやりとりは心臓に悪い。

　カタカタ震ふるえる俺に気がついたのか、愛香が手をひらひらと振った。

「……なに辛しん気きくさい顔してるの。別に、これくらい何ともないわよ。冷静になって考えれば、今まであたしもトゥアールにいろいろしてきたしね」

　……もしダメージというものが累積できたとしたら、一〇トントラック三台くらい木こっ端ぱ微み塵じんにできそうなくらいのダメージはトゥアールに与えてきた、を省略して「いろいろしてきた」、なのだが。

「ま、罪滅ぼしよ。それに……胸が大きくなれるって思えば、こんなこと何でもないわ」

　まるで写真を転写した仮面を被かぶっているような不自然な笑顔で、俺の不安を否定する愛あい香か。

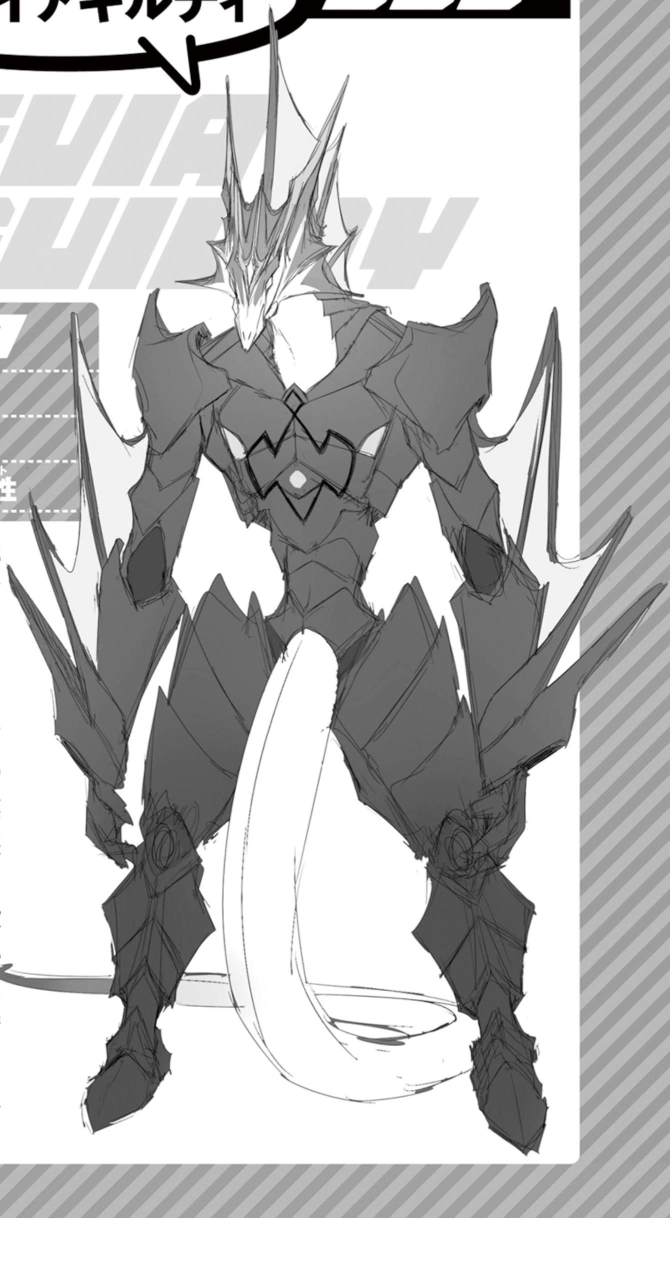
　…………万が一、なんだが。いや、今まで散々見せつけられたあのオーバーテクノロジーをもってすれば、ちょっと女の子の胸を大きくするのがそれほどの一大事業だとは思えないが、それでも、しかしだ。

　愛香が、ここまでプライドを捨てて我慢し、尽くした挙げ句に、トゥアールの理論が間違っていて、新しいテイルギアを装着しても愛香が巨乳になれなかった、その時は――。

　まだ春なのに、マフラーと手袋とコートが恋しい。

キャラクター名鑑 008

リヴァイアギルディ



DATA

身長：276㎝

体重：307㎏

属性力：巨乳属性（ラージバスト）

ドラグギルディの部隊への援軍としてやって来たアルティメギル幹部。
部下や同胞に厳しく冷たい態度を取っているが、それは彼の不器用な優しさの裏返しであり、義理堅く、情に篤い戦士。
必殺の武器である股間の触手はそんな秘めた心の映し鏡であり、顔で怒って股間で泣く彼の生き様に多くの戦士が心打たれ、配下に加わった。

第三章　俺、ツインテールだってバレた。

　合流した分隊の母艦との連結も完了し、基地規模も、統一部隊員数もかなりのものとなった、総そう二じの世界のアルティメギル。

　その大会議室では、各部隊の要人を集結させ頂上会議が開かれており、難航を極めていた。

　巨乳属性ラージバストと、貧乳属性スモールバスト。

　対極の属性ゆえに主張は平行線を辿たどり、今やこの大部隊は、対立で真まっ二ぷたつに割れてしまっていた。

「お主たちもいい加減に呆あきれ果てていよう！　この世界の巨乳属性ラージバストの少なさに！　大事な己おのれの身体からだに刃やいばを入れ、手軽に大きくしようという浅ましさが蔓まん延えんしておる！　その付け焼き刃の乳があるゆえに、巨乳属性ラージバストが生まれぬのだ!!」

「だが、貧乳属性スモールバストは違うぞ！　小さいからこそ誇りが生まれる！　小さいからこそ愛が芽生えるのだ!!」

「馬ば鹿かな、贋にせ物ものがはびこるからこそ、荒れ地に咲いた一輪の花のように、純然たる巨乳属性ラージバストが可か憐れんに映はえるのではないか!!」

「稀少だからこそ巨乳属性ラージバストは美しいのだ！　限られた一瞬に絶美を咲かせる儚はかなくも強き様さま！　それはまさに燃え尽きる瞬間にこそ最高の輝きを見せる流星のごとく！」

「そうよ、貧乳で永えい劫ごうの時を生きたとて、それは彫刻と何ら変わらぬ！」

　かつてないほどに、中学生男子のような会話が繰り広げられていた。

　強こわ面もての怪物たちが熱気をみなぎらせ論じ合うのだから、一般人が目にしたら一か月は夢にうなされそうな地獄絵図だった。

「これを見よ！」

　リヴァイアギルディの部下がスクリーンに一枚の写真を投影する。その口くち許もとには、必勝を確信した笑えみが浮かんでいる。

　登校中だろうか、巨乳の女学生の写真だった。

「ぬうう、下品な乳の女を大写しにしおって！」

「ふん、馬鹿の一つ覚えのようにただ大きさだけを糾きゆう弾だんする前に、もっと大局的な視点で物事を捉とらえるがよい！」

「なにい!?」

　渋々モニターを見る貧乳属性スモールバストの面々。

　たすき掛けにした鞄かばんのベルトが胸に沈み込み、一層巨乳が強調されている。

「この左右に分かたれた乳の有り様よう──これぞ、天と地を創造せし世界開かい闢びやくの再現!!」

「そして、この左右の美しさこそ、ツインテールの根源に通ずるとは思わぬか!?」

　一気呵か成せいに貧乳属性スモールバストをやり込めようと声を荒らげる巨乳属性ラージバストの面々。

　だが、クラーケギルディの部下も負けてはいなかった。

　スクリーンの写真を、貧乳の女の子のものと差し替える。

「見よ、このスク水との調和を！　巨乳ではこうはいくまい!!　貧乳だからこそ数多あまたの衣装が映えるのだ！」

　行くあてもなく部隊に残り、二派閥のやりとりにもどちらつかずな態度だったタイガギルディの隊の残党たちが、スク水と調和する貧乳の女の子を見て、目の色を変えた。

　彼らはスク水で結束した部隊ではなかったが、そこに亡き隊長の面おも影かげを見ては、心も揺らぐ。

「！　貴様！　タイガギルディ殿の部下たちを取り込もうという腹か、姑こ息そくな!!」

「違うな、いかな属性の持ち主も、最後には貧乳属性スモールバストに結実すると伝えたいだけよ！　世界の開闢が巨乳であるというのなら、大地の果ても、大空も、海の彼方かなたも、その平面は貧乳を表わすものではないか！　万物は、貧乳へと還かえるのだ!!」

　スクリーンを使ってプレゼンをした両派閥の二体が、取っ組み合いを始める。

　それを皮切りに、巨乳だ貧乳だと、もはやただの口くち喧げん嘩かとなり、会議は荒れた。

「静まらんか！」

　硬質のテーブルにヒビが入るほど、激情を拳こぶしに乗せ叩たたきつけるクラーケギルディ。

　途端、会議室は水を打ったように静まり返る。

「埒らちが明かぬ。一体何日こうして終わりのない言い争いを続けるか。昨日にいたっては、ゲームのキャラを持ち出しての喧けん々けん囂ごう々ごうの罵ののしり合い。あまつさえ、巨乳貧乳どころか男の娘こキャラだったのに気づかぬ未熟!!　もはや乳の問題ですらないではないか!!」

　無数の触手がビン、と張りつめ、いきり立っていた。

　厳げん粛しゆくな騎士性を重んじる彼までもが感情を露あらわにするほど、事態は深刻だった。

「……やむをえん。部隊の統一は一度白紙に戻し、個々で制圧を開始するほかあるまい」

　リヴァイアギルディの提案は、捨て鉢ばちというよりも、そこしか落としどころを見み出いだせない、将としての苦渋の決断だった。

「リヴァイアギルディ様……お言葉ですが、総力を結集しなければ、ツインテイルズには勝てませぬ!!　たとえ時間はかかろうとも話し合っ……」

　クラーケギルディが部下の発言を遮さえぎって語る。

「このまま座していても事態は変わらぬのもまた、事実。私も賛成だ」

　将たちが言葉を揃そろえては、部下たちは反論などできるはずもない。

「俺の腹心たるバッファローギルディがああも容易たやすく敗れ去ったのだ。ツインテルズの実力はとうに承知しておる。……もっとも、あ奴やつがあそこまで腑ふ抜ぬけだったことに、失望もしているところだがな!!」

　辛しん辣らつな死者への冒ぼう涜とくも、リヴァイアギルディの性分をよく知る部下たちは黙して聞くだけで心中でさえ責めようとはしなかった。

　あの、悲しみに打ち震ふるえる股こ間かんの触手を見て、誰だれがそれを本心だと思おう。

　クラーケギルディの部下たちですら、それを察して目を伏せている。

「大変です……！」

　会議場に、一体のエレメリアンが血相を変えて駆け込んで来た。

「何事か」

「ダークグラスパー様が、この部隊を視察に来られるとのことです!!」

　真っ先に立ち上がったのは、リヴァイアギルディだった。

「なんと！」

「まだ、確かではありませんが……」

　確定情報ではない、と言い淀よどんだにもかかわらず、集まった戦士たちは皆、右に左にと慌てふためき、動揺した。

「ご到着はいつになるか？」

　冷静に問い質すクラーケギルディ。兵は、分かりません、と返すだけだった。

「遥はるか先の話か。それとも明日にでも姿をお見せになるか。はたまた──」

　クラーケギルディは最悪の予感を否定するように頭を振った。

　リヴァイアギルディにも苦渋の表情が浮かぶ。

「……ぬう、やはり見み咎とがめられたか……。噂うわさには聞いたことがある。部隊を持たず首領様の勅ちよく命めいを受け単身世界を渡る戦士。その使命は、組織の反逆者の処罰だという」

「いつしかその謎なぞの戦士は闇やみの処刑人、ダークグラスパーと呼ばれ、恐れられている……」

　そうつぶやいたクラーケギルディだが、彼はダークグラスパーの存在をこう捉えている──本当に処刑人などという物騒な存在がいるとは考えにくい。おそらく、ともすれば馴なれ合い、緩ゆるみがちな面々の気を引き締める、監視役としての存在なのだろうと。実際に存在するかどうかも定かではない。むしろ、噂うわさが尾を引き鰭ひれを引いてくれたほうがいいというわけだ。

　いずれにせよ、今のこの状況が首領に好ましく思われていないのは確実だ。のんびりと構えてはいられない。

「どうだ、リヴァイアギルディよ。私たちのみで出向き、直接手の内を見てみるのも」

「フン、小こ手て調べというわけか。異論はない」

　遺恨は残るが、部下たちの手前、ダークグラスパーの降臨を前にいがみ合いを続けるのも得策ではない。将二体は、自みずから出撃することで落とし前をつけようとする。

　またも実にならない争論のみで終わってしまった会議室を後にし、クラーケギルディは一人廊下を歩いていた。騎士のような精せ

い悍かんな眼まな差ざしには、中間管理職特有の疲れが覗のぞく。

「気苦労が絶えませぬな」

　背後から遠慮なくかけられた声に、クラーケギルディは漫然と振り返った。

「フェンリルギルディ……だったか。部隊を外はずれて勝手にやって来るとは、どういう了見だ」

　会議にも参加せず、自由気ままにしている増援者。合流を命じられずもやってきたのが、このフェンリルギルディだった。

　銀の毛並みも美しく、鋭く尖とがった耳と口からはみ出た真白い牙は、狩人を彷ほう彿ふつとさせる。

　鋭い瞳ひとみには、目に見えるほど確かな野心の光りが灯ともっていた。

「あのドラグギルディ様を倒し、そしてあなた方二人が呼ばれるほどの相手となれば、誰だれでも興味を持ちましょう。私めの力が役に立てばと、こうして罷まかり越した次第」

「思い上がるな。貴様、幹部の座を欲しているらしいが、功を焦ると禄ろくなことにはならぬぞ」

　フェンリルギルディは、いずこからか、女性の下着を取り出した。肌触り滑らかなシルクの煌きらめきが、彼の銀の体毛に調和し、映える。彼はそれを悲しげに見つめながら、

「誰にも理解されぬ属性に邁まい進しんすれば、焦っているようにも見えましょう」

「理解されぬだと？」

「あなた方のように、争えるならまだいい。信念をぶつけ合えるならば本望。しかし、我が下着属性アンダーウエアーは、はなから爪弾きに合い、外道であると同じ土俵で論じることさえ許されない。あなた方の愛する巨乳も、あるいは貧乳も、下着に包まれるものだというのに」

　確かに、全ての属性が仲間内で認められるものではない。同じエ

レメリアンにあって、外道の誹そしりまではなくとも、眉まゆを顰ひそめられるものも少なくはない。

「体操服属性ブルマや学校水着属性スクールスイムが正で、下着属性アンダーウエアーが邪であるという風潮。旧態依然とした考え、実に嘆かわしい。私は、アルティメギルに新しい風を吹き込もうと思っているのです。私という、次世代のエレメリアンの存在を以もつてして」

「フ、確かに若い。ならば好きにすればよい。私たちの邪魔をせぬ限りはな」

　鼻持ちならない相手ではあるが、異質な存在ゆえ、己おのれの誇示に焦るのを認められぬほど、クラーケギルディも器は小さくない。もっとも、続いた言葉を咎とがめぬほど、事なかれ主義でもなかったが。

「私は、ツインテール属性もそろそろ不要ではないかと思っています」

「！　貴様！」

　アルティメギルの理念を根本から覆くつがえすような物言いを前に、クラーケグルディは思わず腰の剣に手をかけた。

「まあ、お聞きを。まず、ツインテール属性が在あり、その上で個々の求める属性を探す。これでは、効率が悪くなるのも当たり前です。いかにツインテール属性が最強とはいえ、もっとのびのびと戦える状況のほうが、結果的には集める属性力エレメーラも増えるとは思いませんか？」

　それは確かに、兵の士気を高めるかもしれない。

　だが皆、ツインテール属性もまた等しく愛しているのだ。フェンリルギルディには、そんな原初の本能さえ野心で消えてしまったというのか。

「それが、貴様の言う新しい風とやらか。存外と小さい野心であったな」

　クラーケギルディは、力強くマントを翻ひるがえし、踵きびすを返した。

「フェンリルギルディ。……ツインテール属性を軽んじることだけは慎つつしめ」

　それは、同胞としての忠告か、あるいは、先達としての警告なのか。

「失礼します。ご忠告通り、決してあなた方の邪魔は致しません」

　警告など何するものぞと立ち去るフェンリルギルディ。

　そうなってはもう、クラーケギルディにできるのは、乾いた溜ため息いきを漏もらすのみだった。

「む」

　クラーケギルディは、いつの間にか、自分の手に下着を握らされていることに気付いた。

　Ａカップサイズのブラジャー。滑らかな手触りのそれは、お近づきの印か、それとも、決闘の手袋代わりか。

「……切磋琢磨する仲間すらいない……か」

　野心に歪ゆがんだ戦士。完全に断裂してしまった部隊の中、その足音は、誰よりも孤独だった。

◇

　エレメリアンが一度も現れず、拍子抜けするほど平和だった連休も終わり、予定通り、ドラグギルディのツインテール属性をコアにした新たなテイルブレスが完成した。

「ついに、ついに完成したんですね、トゥアール様！　巨乳ブレスが!!」

「おかしいぞコアの属性力エレメーラ変わってるぞおい!!」

　嬉うれしさのあまり、もはや本音を包んでも包みきれないほど浮かれている愛あい香か。

地下基地のコンソールルームは、愛香の熱気だけで体感温度がかなり上がっていた。

「さあ、愛香さん、どうぞ。これが、第三のテイルブレスです」

愛香はブルーのブレスを外はずし、真新しい、原色に近い鮮やかな黄色のブレスレットを腕にはめた。

「見ててね！」

「あ、ああ」

「ちゃんと見ててね！」

「分かったよ!!」

こんなにはしゃいでいる愛香を見るのは久しぶりだ。

「テイルオンッ……!!」

力強く紡がれた変身機構起動略語スタートアップワードは、愛あい香かの身体からだを激しい光で包……まなかった。

「……あれ？」

一瞬、何が起こったのか分からなかった。当の愛香はなおさらのようで、目をしばたたかせている。

「テ、テイルオン！」

電池の切れたリモコンと格闘するように、何度も叫んで変身をやり直すも、ブレスはやはりうんともすんとも言わない。失敗するというより、反応している気配すらない。

ついに愛香は、癇かん癪しやくを起こしたようにぶんぶんと腕を振り回し始めた。

「どうして、変身できないのよ!?　トゥアール……このギア、失敗作じゃないの!?」

「いえ、そんなはずはありません、変身は絶対にできるはずです！」

「じゃ、じゃあどうしてよぉ……」

　期待値が大きかった分の反動で、愛香は肩を落とし、よろよろとへたり込んでしまった。

　とうとう恐れていたことが──。

　愛香のこの悲しみが一段落し、「あ、そういえば」とこの製作期間のことを思い出した時、ここは凄せい惨さんな殺さつ戮りく現場に変わる。俺は全身を走る怖おぞ気けに戦せん慄りつした。

「な、なあトゥアール。もしかして、自分で最初に使ったブレス以外は使えないってことはないか？」

「無理矢理奪われないようにセキュリティは組み込まれていますが、そもそも世界最高クラスのツインテール属性がないと使えない装備なんです。本人以外でなければ使えないようにするようなセーフティは、元々搭載されていません」

「そうか……」

「そうだ、一応総そう二じ様も、使ってみますか？」

　俺は、鮮やかな真しん紅くに輝く自分のブレスを見つめた。

　あ……。

　そうか、そういうことだったのか。俺は、愛香が変身できない理由に思い当たった。

「せっかくだけど……俺は、これでいいよ」

「もしかしたら、女の子にならずにすむようになれるかもしれないんですよ……？」

　それは確かに魅力的な提案だ。だけどそんな理由では、俺はこのレッドのブレスを外はずせない。

「いや、これがいいんだ。テイルレッドのギアが。トゥアールのツインテール属性……トゥアールの想おもいが詰まった、このテイルギアじゃなきゃ駄目なんだ」

「私の──想い」

「愛香。何となく、変身できない理由が分かる気がするよ。きっとお前も、心のどこかでテイルブルーのギアじゃなきゃ駄目だって思っているんだ。だから、新しいテイルギアは装着できないんじゃないかな。試さなくても分かる。俺も絶対に、そのギアは装着できないよ」

　トゥアールが、二度とツインテールにできないという覚悟を背負ってまで、俺に託してくれた、赤のテイルギア。そして、長い間たった一人で孤独に戦い続けたトゥアールがまとっていた、青のテイルギア。

「二つとも、トゥアールの想いが、心が詰まっているんだ。それをこの手に託された俺たちが、ほかのテイルギアを使うなんて、あり得ない」

「総そう二じ様……」

　小さな子供じゃなくて、せめて普通の女の子になれれば、多少は世間のアイドル扱いも収まるかもしれない。でも、そんな恩恵リターンじゃ、全然釣り合わない。

「新しいブレスは、もしもの時のために取っておいてくれ。俺たちはこれで万全じゆうぶんだ」

「でも、愛あい香かさん、巨乳に……」

　愛香は全てを納得したのか、からっとした笑いと共に立ち上がった。

「ううん、いいわ。あたしが間違ってた。気軽に着せ替えできるような、軽いもんじゃないもんね、テイルギアはさ。そーじの言う通りよ。心は嘘うそがつけないのよ、きっと」

　真新しいブレスを胸に抱いだき、去来する様々な思いに視線を漂わせていたトゥアールは、意を決したように愛香に告白した。

「愛香さん……白状します。私……復ふく讐しゆうするつもりだったんです。本当は、身体変化のための属性力エレメーラハイブリッドなんて、机上の空論でした。意気揚々と新しいテイルブレスをつけて、全然胸が大きくならない愛香さんを見て……異世界の力を使

おうが何をどうしようが愛香さんは一生貧乳のままなんですよゲハハハハハハ、って指差して笑おうと思ってました……」

「それなら、あたしも同じよ、トゥアール。目的のものさえいただいてしまえば、あとはもう、散々こき使ってくれた仕返しに、ギリギリ心臓が動いてるぐらいの瀬せ戸と際ぎわで、延々血祭りにし続けてやろうと思ってたんだもの……」

「愛香さん……」

「トゥアール……」

　人生って、何が起こるか分からないな。ほんの少し道筋がずれたら、驚くほど簡単に、凄せい惨さんで残酷な結末が訪れていたかもしれないんだ。

　罪を告白し合い、二人の少女は、憑つき物ものが落ちたように晴れ晴れとした笑顔で笑い合った。どう考えても今後の付き合い方にフォロー不可能な溝ができるほどの告白だった気がするが。

　その時、コンソールのアラートがけたたましく鳴り響いた。

　モニターを確認したトゥアールの顔つきが一気に険しくなる。

「！　総二様、エレメリアン出現です！　これは……物もの凄すごい力の属性力エレメーラが、二体！」

「なに!?」

「多分……ドラグギルディのような幹部クラスが、同時に二体現れたんです!!」

　それは、あの死闘を思えば、絶望的な報告のはずだった。

　けど、どうしてだろう。驚くほど、気持ちは落ち着いていた。

「よおし！　望むところよ！　今日なら、どんな奴やつにだって負ける気がしないわ！」

「その意気だ！　行こうぜ、愛あい香か!!」

「うん！」

　愛香もきっと、同じ気持ちなんだろう。その表情からは、不安など微み塵じんも見て取れない。

「「テイルオン!!」」

　俺と愛香は頷うなずき合って二人同時に変身し、トゥアールに見送られて基地の通路を走った。

　そうさ、これが俺たちなんだ。

　新しいテイルブレスは戦力にはならなかったけど、今日確かめ合った絆きずなは、俺たちをそれ以上に強くしてくれた。

　愛香の言う通り、どんな強敵が相手だって、負ける気がしないぜ。

　身体からだの奥からほとばしる、熱い心の輝きそのままに、俺たちは光のゲートへと飛び込んだ――。

「この摩ま天てん楼ろうを颯さつ爽そうと闊かつ歩ぽする、巨乳のツインテールはおらぬかー！」

「違う！　私たちは正しく貧乳のツインテールを求めなければならぬのだ!!」

　光の中を走り抜け、辿たどりついた戦場では、汚らわしい言葉が乱舞していた。

　俺と愛香は同時に蹴け躓つまずいた。両手を腰の横でピンと伸ばしてヘッドスライディングでアスファルトを抉えぐり砕き、ボブスレーのように延々と道路を滑走していった。

「……何よ……何なのよ、最近のこいつらは！　何で乳ばっかにこだわってんのよ!!」

　道路にめり込んだ顔をぐばっと音を立てて引っこ抜き、愛香は叫ぶ。

「落ち着けブルー！　今までだって大概だっただろブルマとかスク水とか!!」

「あたしは乳を力に変えて戦う全ての存在が許せないのよおおおおおおおおおおおお!!」

　男の俺では理解の埒らち外がいにある愛香の怒りは、咆ほう哮こうと共に天を貫いた。

　二体のエレメリアンは俺たちに気づき、正面から向かい合う。

「現れたな、ツインテイルズ！」

　まずい。場所がかなりまずい。最近は、エレメリアンが危害を加えないという中途半端な安全神話が流布されているせいで、現場に居合わせても逃げるどころかそのまま見学しようという輩やからも増えている。

　都心のビル群の中の、大型プラザホールの目の前だ。横目で入り口に立てかけられた看板を見やると、やはり何かのコンテスト……オーディションが開催されていた。目的の属性力エレメーラの都合上、こういった場所が狙ねらわれやすいのだ。

「こんだけ人が密集してる場所で幹部クラスとやり合うのはまずいぞ……！」

　基地の属性力エレメーラ測定器サーチヤーの誤検知を期待したが、対たい峙じするだけで全身を殴りつけられるようなこの圧倒的な存在感は、有う象ぞう無む象ぞうの輩たちとは一線を画す。これこそ幹部級の証あかしだ。

　全力同士での戦いになれば──山林での戦闘とは比べものにならない被害が出る。

　呑のん気きに撮影や見学をしているギャラリーなど、ひとたまりもない。

　早速、全身に鰭ひれのような切り立ったパーツの目立つ、巨大なエレメリアンが俺を見る。

「こ……これがテイルレッドか……。巨乳属性ラージバストの俺の心をも揺さぶる、三千世界に轟とどろく究極のツインテール……惜しい！　成長したその時に出で逢あえていれば、天の川ミルキーウエイを飾る輝星のような巨乳が彩いろどっていたであろうに!!」

　すると、もう一体のイカの怪物のようなエレメリアンが怒声を上げる。

「妄もう言げんはそこまでにしろ、俗物め！　彼女の美しさはすでに完成している！　神の造形に手を加えようなど、それは破滅をもたらす傲ごう慢まん！　それに、もう一人のツインテイ、ル、ズ…………は……」

「はいはいテイルレッドテイルレッドね、もー慣れたっての。そっちがイチャイチャしてる間に、あたしはこっちを……」

　反論しようとして愛あい香かのほうを見た瞬間、俺は弾はじかれたように叫んだ。

「ブルー!!」

「ッ――!?」

　ほんの瞬きほどの間に、一体のエレメリアンが愛香の眼前に接近していたのだ。愛香ですら察知できないほど高速だったのか、それとも気配を完全に消し去っていたのか。

　致命的な隙すきを見せてしまったテイルブルーの前で、そのエレメリアンは何の冗談か、忠臣が王にそうするような恭うやうやしさで、片かた膝ひざをついて礼をしてみせた。

「…………………………美しい……」

「え？」

　緊張が飽和状態に達していた俺は、その言葉に放心してしまった。

「美しい。まさか……敵である貴女あなたがそうだったとは。何という神の悪いた戯ずら……何という悲劇なる運命!!」

「いや、あんた……何言って……」

エレメリアンは、儀式めいた動作で、腰に携たずさえていた細身の長剣を抜き、刃に手を添えて愛香に差し出した。

「私の名はクラーケギルディ。我わが剣を貴女に捧げたい。我が心のプリンセスよ」

「あんた、気は確か!?」

「貴女の美しさに魅せられたのです！　幾いく多たの世界を巡っても、こんな気持ちになったのは初めてのこと！　どうか、私の愛を受け取っていただきたい!!」

「えええええ……」

俺は毎度のことなので慣れてしまったが、テイルブルーがここまで敵に絶賛されるのは初めてのことだ。愛あい香かは戸惑い、リアクションに困ってもじもじしていた。

「むう、とうとう出たか、奴やつの悪癖が。騎士道を奉じる堅かた物ぶつが故ゆえ、ああなったら止まらん!!」

よく知った仲なのか、もう一体のエレメリアンが腕組みをし、苦虫を噛かみ潰つぶしたような表情でそれを見ていた。

「どうか、我わが想おもいを！　愛いとしのプリンセスよ!!」

「ええ、や、でも、そ、そんなの、困る……」

どんどん反論がか細くなっていく愛香。

耳をつんざくような大音量で、トゥアールからの通信が入った。

『見ましたか総そう二じ様、これが女です！　女の本性です！　口でどんな綺き麗れい事ごとをぬかそうが、ほかの男にちょっと甘い言葉をかけられればそっちにころっといく！　愛香さんこそまさしくビッチなんです、さあ、元気よく幻滅しましょう!!』

女に幻滅って……普段から愛香とトゥアールのやりとりを見ていて、これ以上どう幻滅しろというのか。

「かつて、我われらが大いなるアルティメギル首領様に剣を捧ぐ誓いを立てた時、聖布ヴエール越しに首領様は仰おつしやった。お前

の剣に相応ふさわしき主あるじを見つけよ、と。すでにお前の魂たましいはもらっている、だから剣を捧ぐべき相手は自分自身で見つけよ、と！　私はようやく、首領様のお心遣いに報いる時を迎えたのです、姫!!」

「いや、まあ、気持ちはありがたいけどさ、あたしたち敵同士だし……」

「最高の貧乳を持つ、麗うるわしきプリンセスよ!!」

「…………………………………………………………は？」

　熱心なナンパを断るようにやんわり話を終わらせようとした愛香だったが、その次に来た魂をぶつけるような雄叫おたけびに、虚を突かれた。

「ツインテールは貧乳こそ相応しい……生涯をかけた私の想おもいが今、ようやく結実したのです！　最大級のツインテール属性を持つあなたが、よもやこれほどまでに美しく光り輝く貧乳をも備えていらっしゃるとは！　歓喜にて身体からだが震ふるえております る!!」

　遠巻きに大勢のギャラリーに見守られる中、この公開処刑は、あんまりだ。

『もしかしてさっき変身できなかったのって、愛香さんが巨乳属性ラージバストを受け付けない体質か何かだったからかもしれませんね！　それだけ絶賛される貧乳ですし、着々と貧乳属性スモールバストが芽生えてるのかもしれませんよ！　ププ――ププププププ!!』

　あれだけ固い結束を再認識し合った数分後に、敵の仕打ちにさらに鞭むち打うつような笑い声を上げるトゥアール。

「嘘うそよ……あたしは、巨乳になるのを拒絶なんてしない……！」

『こればかりは分かりませんねえ！　いわゆる心で嫌いやがっても

身体は……というやつなのか、あるいはその逆なのか！　いやーまいったまいった、やっぱり科学がどれだけ万能になっても、人の心は分からないものですね！』

「…………」

『でもよかったじゃないですか愛あい香かさん、初ファンですよ！　声はなかなか男前ですし、目を瞑つぶればそこそこ恋人気分を味わえるんじゃないですか⁉　やっぱり、貧乳を受け入れてくれる人がお似合いだと思うんですよ‼』

　もう勘弁してくれ、と心の中で呟つぶやく俺を余よ所そに、トゥアールは最後まで言いきった。

　だが、逆に愛香は、少し落ち着いたように見える。

　そうか、トゥアールはわざと愛香を怒らせるようなことを言って、冷静さを取り戻させてくれたのか。強敵との戦いの前だしな。

「ねえ、トゥアール。帰る前に、シャワー浴びて待っててね」

『えーもう、愛香さんったら、いくら絆きずなを確認し合ったからって、いきなりそれはステップアップしすぎですよぉ』

「────綺き麗れいな身体からだで逝いきたいでしょう？」

　全然、落ち着いてなかった……。

『そ、そ、総そう二じ様！　倒して下さい！　それは敵です！　エレメリアン以上の、地球の脅威です！　倒せるのはあなたしかいないんです、総二様ァァァ‼』

「すまん、目の前に強敵が二体いるんで……」

　幹部クラス二体に大怪獣一体まで加わっては、俺一人じゃ太刀打ちできない。特に、今の後者に向かっていったらテイルギアもろとも挽ひき肉にくにされる自信がある。

「……こんなもんよね、エレメリアンなんて……あー、もう、なんかどうでもいいわ、思いっきり暴れたい気分。みんな避難した？　この辺全部更地にしても、保険が利くかな？」

「ムチャクチャ言うな国が傾くぞ!!」

　これもある意味傾国の姫というのだろうか。侵略者もろとも国を滅ぼす、最強の獅子身中の虫。テイルブルーはウェイブランスを出現させ、目を血走らせてそれを握り締めた。

　大の大人が千ち歳とせ飴あめを全力で握るような心こころ許もとなさで、ランスがミッシミシいっている。

　終わりだ……地球の終わりだ。

「テイルレッドー！　頑張ってくださいましー!!」

　背後のギャラリーから、俺を応援する幼い少女の声が聞こえた。

　くうう、子供たちの清らかな応援を背に、これから巻き起こる凄せい惨さんな殺さつ戮りくを止められないこの無力さよ!!

　せめて、君だけは今から始まる地獄を見ずにお家うちに帰ってくれ！

　切実な願いと共に振り向いたその先には――

「また会長がいる―――――――っ!?」

　桜さくら川がわ先生と一緒に、神しん堂どう会長がいた。

　愛あい香かもギリギリのところで怒りを抑え、見知った顔を案じる。

「まずいわ、会長の存在に気づかれたらこの騎士バカに狙ねらわれちゃう!!　会長はあたしよりも胸が小さいわ……あたしよりもね……!!」

「何な故ぜ繰り返す!?」

　こういう言い方は失礼かもしれないが、貧乳でなおかつツインテール属性の強力な女の子を真っ先に狙うというのなら、愛香の次に会長が危険だ。

　ツインテール属性が強力なのが第一。その上で、貧乳など自分の

属性に基づく要素を備えていればなおよし。両方の属性を備えていれば、パーフェクト。

　大おお雑ざつ把ぱに考えれば、こいつらの基準はこんなところか。

　だが、強力な属性同士の両立はほぼ不可能だ。

　そうなると、愛香が最高だと賞賛するこいつの思考原理も見えてくる。

「会長あのひとを守るぞ、ブルー！」

　だが皮肉にも、俺たちが会長を気遣って騒いだせいで、奴やつらも会長の存在に気づいてしまった。

「むう、あちらにもなかなかのツインテールが！　だが、いずれにせよ巨乳ではないか。ままならぬものよな」

　こちらは予想できた反応だが、貧乳属性スモールバストのクラーケギルディなら、会長を絶賛するだろう。

　そう危き惧ぐしていた俺は、クラーケギルディの発言に意表を突かれた。

「確かによきツインテール属性だ。だが、貧乳属性スモールバストを芽吹かせる可能性は、万に一つもない!!」

　抜き身の剣を突きつけ、悪を断罪するように高らかに告げるクラーケギルディ。

「何だ貴様！　突然お嬢様に向かって何を!?」

　側そばで警戒している桜川先生の批難も気にせず、クラーケギルディは迷いなく言った。

「幼き少女は胸が小さくて当たり前なのだ。ときめく道理はない!!」

　騎士道。

　研とぎ澄まされた刃やいばのように鋭く、実直な信念だった。

　こうなればもう、愛香の怒りは完全に収めどころがなくなってしまった。

「なるほど……あたしは当たり前じゃないってことね……ハハハ……ハハハハハハハ!!」

　羅ら刹せつもかくやという形相でブルーがクラーケギルディに飛びかかろうとした、その瞬間。

「さあ、ご覧あれ、プリンセスよ！　これで、私が本気だと分かっていただけるはず!!」

　クラーケギルディは、両手を八の字に広げ、おびただしい闘気をみなぎらせ始めた。

　身にまとっていた鎧よろいが弾はじけた……が、そう見えたのは、錯覚だった。

　鎧ではなく、無数のパーツだったのだ。阿あ修しゅ羅らの腕さながら、それぞれが意志を持ったように蠢うごめくのは、数え切れないほどの触手。

　強靭な触手で人間を海中に引きずり込む——海の魔獣クラーケンの伝説そのままに、その無数の触手は、摩ま天てん楼ろうに切り取られた空を、俺たちの視界から完全に覆い尽くした。

「あれが、あいつの戦闘形態なのか!?」

　覚えがある。ドラグギルディは竜の翼のようにツインテールを広げたが、これがこいつの全力の形態なんだ!!

　だが、敵の姿よりも驚くべき事態が起きた。

「い、い、い、い、いやあああああああああああああああああああああああああああ!?」

　それを見た愛あい香かが、突然絹きぬを裂さくような叫び声を上げたのだ。

「いや————っ！　やだ、やだ、や————————————っ!!」

「落ち着けブルー！　どうしたんだ!!」

「触手……触手うううううううううっ」

　クラーケギルディの広げた無数の触手を見て、愛香が異様に怯おびえ始めた。

　確かにうねうねしていて不気味だが、見た目の割にどこかコミカルで、ホラー映画のモンスターのようなグロテスクさは感じない。生理的嫌悪を引き起こすようなビジュアルではないと思うが……一体、どうしたっていうんだ!?

「何な故ぜ怯えられるか、姫!?　これは、我わが求婚の儀！　あらん限りの愛の証明なのです！」

「嘘うそオオオオオオオオオオオ触手にプロポーズされたアアアアアアアアアアアアアアア!!」

　白目を剝むき、血を吐く勢いで絶叫する愛香。

　全力の形態と思ったのは早とちりだった。あの無数の触手はあれか、発情したクジャクとかが羽を広げる、あれ。

「うえええええええん、あんたのせいよ、あんたがいつまで経たっても何もしないから……初プロポーズをあんなのにー!!」

「え!?」

　愛香は大泣きし、覚えの無い糾きゅう弾だんで俺を当惑させた。

「ひどいよ、こんなのってないよー!!」

「まあ落ち着け、俺なんてこの数日で一〇回ぐらいプロポーズされたぞ!!」

「あんたは美人のメイドでしょうが！　あたしなんて、あたしなんて……触手うううううう」

　地べたに座り込んで泣きじゃくる愛香と、二体の敵を、交互に見る。

　駄目だ……愛あい香かがこの調子じゃ、俺一人で戦うしかない。どこまでやれるか……せめて、愛香は守らなければ。

「……ちっ！」

　もう一体のエレメリアンは、妙にわざとらしい動作でそっぽを向き舌打ちをすると、

「興が殺そがれたわ！　元々小こ手て調べのつもりであったが、これではそれすらも叶かなわん！」

　そして、クラーケギルディの肩を摑つかみ、退却を促うながした。

「テイルレッド！　今日のところは勝負を預ける！　次の戦いまでに、その不ふ甲が斐いない相棒の涙を拭ふいておくがよい!!」

「お前……」

「俺の名はリヴァイアギルディ！　巨乳属性ラージバストを奉ずる戦士！　俺は、こ奴やつほど甘くはないぞ」

　さすが、こういうところは義理堅がたい奴やつらだ。悪態はついても、愛香を泣かせてしまった仲間の責を、奴なりに感じたのだろう。

　まるで、大海を支配する巨大な竜・リヴァイアサンのように、雄大な心、そして意気を持った男だ。

「ぐううう！　姫、姫えぇぇぇぇー！」

　往おう生じよう際ぎわ悪く引きずられながらも触手を蠢うごめかせるクラーケギルディ。光のゲートに溶け込むその一瞬、一本の触手が、愛香めがけて勢いよく伸ばされた。

「ブルーッ!!」

「……え？」

　離ればなれになる恋人同士が、最後の瞬と間きを惜しみ、手と手を伸ばすように。

　クラーケギルディの触手は、愛香の右手の甲にピトっと触れた。

「え、お………………きゅう」

　アルファベットのような声を上げ、愛香は気絶してしまった。

　途端、愛香の身体からだが発光する。

「まずい!!」

　俺は即座に愛香を抱きかかえて自分を包むようにオーラピラーを薄く展開させると、ギャラリーの間を突っ切って全速力で走った。

　そのまま転がるように人ひと気けの無い路地裏に駆け込み、ブラインド代わりのオーラピラーを解除すると、案の定、愛香の変身は解けてしまっていた。

　あとほんの少しでも気づくのが遅かったら、全国放送でテイルブルーの正体が晒さらされていた。何気に、今までで最大のピンチだったのではないだろうか。

『総そう二じ様もドラグギルディとの戦いで力を使い果たした時、強制的に変身が解除されていましたが、これは危険ですね。次のメンテナンスで、テイルギアに強制変身解除の対策をします』

　トゥアールが申し訳なさそうに通信をしてくる。

「そうだな、頼む。さすがに俺も今のは肝を冷やしたよ」

　俺はこれからの戦いに不安を抱きながら、変身を解除した。

『総そう二じ様！　駄目です!!』

「え」

　瞬間、俺の眉み間けんを、電流のような刺激が走った。何度も何度も体験したこの感覚。

　鮮烈なまでの、ツインテールの気配。

　背後から自分の身体に影が差した瞬間、俺は心臓が止まりそうになった。

　息を呑のんで振り返り、路地裏の入り口を見ると──

「……観み束つか君……が……テイルレッド……」

　肩で息をしながら、ツインテールを振り乱した会長が、呆ぼう然ぜんと俺を見つめていた。

　あれだけ人の目を撹かく乱らんして走り抜けた俺をなお、急いで追ってきたのだろう。

「ち、違うんだ、これは……」

　咄とつ嗟さに言い訳をしようとする前に、会長は緩ゆるやかに壁にもたれかかり、そのまま崩れ落ちてしまった。会長も、あまりの衝撃に意識を失ってしまったのだ。

　トゥアールが、我われを忘れたように捲まくし立ててくる。



『総そう二じ様！　見られたなら……とりあえず裸に剝むいて下さい！　早く……早ぁぁぁく！　すぐにです!!』

「裸にしてどうすんだよ！」

『写真を撮って脅すに決まってるじゃないですか！　誰だれかにバラしたらネットに流すって！　正体を知られたヒーローと、恥ずかしい写真を撮られた女の子！　ほぼ対等の条件です!!』

「どこがだあああああああああああああああああ!!」

　稀き代たいの外げ道どうになれと仲間に唆そそのかされるが、俺自身、もうパニックで気を失いそうだった。

「ど、どうすればいいんだよ……気絶した女の子二人抱えて、まだその辺ギャラリーがうろついてるかもしれないのに……」

　愛あい香かを壁にもたれかけさせ、倒れた会長に近づく。

　それを遮さえぎるように、目の前に一人の女性が割り込んできた。

「…………さ、桜さくら川がわ先生……」

「お嬢様は軽いが、一人で二人抱えるのはつらいだろう。手伝うぞ、観み束つか君」

　驚くほど冷静に、まるで今のこの事態をどこか予期していた風にさえ感じさせるほど淡々と言い、桜川先生はテイルレッドの正体を……俺を、見つめてきた。

「その代わり、聞かせてもらえるな、君たちのことを」

　威圧するような物言いではなく、むしろ、嘆願するような口調だった。

「世間の乱らん痴ち気き騒ぎを見れば……隠したいという事情はよく分かる。だが、お嬢様はもうこれほどまでに何度も狙ねらわれているのだ。傍観者ではいられんよ」

「……分かりました……でも、約束して下さい」

「ああ、誰だれにも話さん。この、私の名前を妻の欄らんに書いた婚こん姻いん届とどけに誓おう」

「それはいいです」

　トゥアールに、俺の判断について確認を取る。俺は愛香をおぶり、桜川先生は会長を。目立たぬよう路地裏を抜け、家へと向かった。

◇

「トゥアールちゃんから話は聞いたわ、さ、早く入って」

　帰り着くと閉店前の時間にもかかわらず店のドアにはすでに「Closed」の札がかかっていたので、裏口へ回ると、待ちかまえていたように母さんがドアを開けた。

「なに六時前に店閉めてんだよ、いつもの時間移動タイムリープしてる設定のお客さんが店の外で黄昏たそがれてるじゃねーか!!」

「まあまあいいからいいから、基地にレッツゴー」

　喫茶店の奥のエレベーターから地下基地へ、母さんは鼻歌交じりに俺と桜川先生を先導する。母さん、絶対にこの事態を楽しんでるな。

　さすがにそろそろ大丈夫だろうと、おぶったまま何度か揺すってみるが、愛あい香かは全まつたく目を覚まそうとしない。よほどショックだったのだろう。慣れてきた俺でさえ、あいつらの奇行には毎回目眩めまいを覚えるからな。

　触れている愛香の太ふと股ももがじっとりと熱を帯びていて、俺は少し恥ずかしさを感じた。

「母さん、ちょっと手伝ってくれ、愛香が目を覚まさないんだ」

　母さんはおぶわれている愛香のことを首を傾かしげながら見つめ、にんまりと笑った。

「んふふ～、おばさん、愛香ちゃんのそういうとこ大好き♪」

「いや、だから愛香気絶してるんだって！」

「そうね～きちんと気絶し続けてるわね～。頑張りなさい総そうちゃん、男の子なんだから！」

　今、愛香のツインテールが震ふるえたような……気のせいか。

　目が覚めたらおんぶなんて子供っぽいこと、嫌いやがるはずだしな。

　でも──愛香って、こんなに軽かったんだな……。

　テレビでビルの爆破解体工事の映像を見た時、愛香なら何分かかるかな、と思ったことがある。その愛香が、こんなに華きゃ奢しゃな女の子だったなんて。

「観み束つか君？　立ち止まってどうした？」

「い、今行きます」

　駆動音の一切しない、チューブのシューターのようなエレベーターに目を見張り、そして、その先に広がる地下秘密基地を目まの当たりにした時、桜さくら川がわ先生は驚嘆した。教室でトゥアールさえ煙けむに巻いた大人の余裕は完全に消え去っていた。

「普通の喫茶店の地下に……こんな秘密基地が……」

「ふふ、部外者が入るのはあなたたちが初めてなのよ？」

　正確には、母さんも部外者のはずなんだが……。

　愛香をおぶったままコンソールルームに入ると、かんかんに怒ったトゥアールが出迎えた。

「起きて下さい愛香さん！　押しつけるおっぱいも無いくせにおんぶしてもらうなんて！　殿方には何のメリットもありません！　重しを背負って歩くだけの重労働です!!」

「おはようトゥアール、もうシャワーは浴びてるでしょう

ね……？」

　散々銃弾を浴びせた怪物が沈黙したので、「やったか？」と油断して近づくと、急にがばっと起き上がる。そんな完かん璧ぺきなタイミングで愛香が目を覚まし、トゥアールに襲いかかった。

「ＮＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯ！」と、お約束の断末魔の叫びが響く。

　何日間かこの二人に密着して撮影したら、ドキュメンタリーを撮っていたつもりでも、見せ場満載のアクションホラー映画が完成してしまっているに違いない。

　トゥアールがシーリングライトの新商品として天井に展示される頃ころ、会長もようやく目を覚ました。

「……やっぱり、夢じゃなかったのですわね」

　意識を取り戻し、基地の様子を目にした会長は途方に暮れるようにそう呟つぶやいた。

　最後まで悩んだ。会長は気絶したんだから、上う手まく口くち裏うらを合わせて、夢でも見たということにしてもらえないか、と。しかし、桜さくら川がわ先生にそれは無理だ、ときっぱり断られた。

　だから俺は、これまでの大まかな事情を、二人に包み隠さず説明した。

　衝撃が強すぎるため、トゥアールの世界が滅んでしまった顚てん末まつだけは上手く誤魔化して。

「そうですか……異世界を渡る怪物……」

「それにしても、学園きっての問題女子が二人揃そろってツインテイルズ関係者とは、世間は狭いものだなあ」

　さすが会長の護衛というべきか、桜川先生は冷静さを取り戻し、場に馴な染じみ始めていた。

　当の愛あい香かとトゥアールは椅い子すに座らず、会長たちから距離を取って壁にもたれかかっていた。

　特に愛香にすれば、同意を得ずに正体を知られる羽目になったのだから、思うところはあるだろう。俺の責任だ。しかし、逆に愛香は沈痛な表情で謝ってきた。

「……ごめん、そーじ。あたしのせいで……」

「いえ、私も慧え理り那なさんの存在に気づくのが遅れました。正体がばれたのは、私のせいです」

　トゥアールも続く。

　気持ちは分かるが、それだと会長が悪いことをしたように聞こえる。何とかフォローしようと考えていると、先に会長が口を開いた。

「どなたのせいでもありませんわ。わたくし……ずっと前から、あなたたちがツインテイルズと何か関係があるのでは、と思っておりましたもの」

「何だって!?」

　衝撃の告白に椅子から飛び上がりそうになる。しかし、思い当たる節は多々あった。

「会長……今は、このブレスが見える？」

　俺は右腕のブレスをかざし、会長に見せた。

「ええ、はっきりと」

「やっぱりか……。認識撹乱装置イマジンチヤフが完全に作用しなかったのは、会長が、テイルレッドの正体をおぼろげに思い浮かべていたからなんだな」

　会長のツインテール属性の強さは関係なかった。もっと、単純な話だったんだ。

「何な故ぜ、そう思ったのかは分かりません。何度も、頭の中で否定しましたわ。けど、わたくし……テイルレッドの小さな腕に抱か

れるたび、いつも、一人の少年のことを思い浮かべていたのです」

「今の部分、録音しました。素敵台詞せりふアーカイブに登録しておきましょう、お義か母あ様！」

「ナイスよトゥアールちゃん。どのフォルダに入れようかしら」

　母さんが、トゥアールの報告にサムズアップする。なぜ言げん質ちを取る必要があるのか分からないが、こっそり会話を録音されているらしい。俺も気をつけないと。

「ごめん会長。女の子に変身して戦っているなんて、人に言えるようなことじゃないから……。あんなに応援してもらっていて、結果的に騙だますことになった」

「いいえ、正体を隠すのは当然のことですわ。ヒーローなんですもの」

　逆に申し訳なさそうに頭を下げ、会長は俺を見つめると……にわかに頬ほおを染めた。

「ただ……すみません。女の子だと思って無防備でしたので、いろいろはしたない姿をお見せしてしまいましたわ……」

「い、いや！　それは俺が悪いよ……でも俺、いつも必死で！　だから……」

「ええ、分かりますわ。ありがとう、観み束つか君。何度も……わたくしを助けてくれて」

「か、会長……」

　はしたない……か。怒ってるかな。ツインテールに触っちゃったこと。女の子だと思っていたからこそ拒こばまなかった会長を、裏切ったことになるんだ。

　いたたまれなくなってトゥアールたちのほうを窺うかがい見る。

「なんでしょう、あれ……」

「気に入らないわね……」

　二人は腕組みをして、ギリギリと歯を鳴らしていた。

「ああいう甘酸っぱい空気を展開する女子ほど信用できないものはありません。呼吸するも同然に暴力を振るってくる女子のほうがまだマシです。幼女じゃなければ追い返しています」

「同感ね。色情狂のほうがいくらかマシだわ。見てると眼球の奥が痒かゆくなるわ。痒くてもかけないじゃない」

　二人して何かぼそぼそと呟つぶやいているが、よく聞こえない。

　母さんは二人を見て涎よだれを口端に滲にじませニヤニヤしているが、会話が聞こえているんだろうか。

　ともかく、洗いざらい言ってしまった以上、会長を信用するしかない。

「会長。俺をヒーローだって言ってくれるなら、分かるよね。正体が世間に知られたら、俺たち、戦えなくなってしまう。このことは、秘密にしておいて欲しいんだ」

「もちろんですわ！　わたくし……これ以上、観束君に迷惑をかけたくありません」

　ふわりと揺れる、会長のツインテール。毅き然ぜんとしていても、恐怖に抗あらがっていても、落ち込んでいても……その美しさは、いつも変わらない。

　そして俺は、ある一つの決心に衝つき動かされていた。

　持ち主不在のまま、壁の格納棚に置かれていた、新たな黄色いテイルブレス。

　それを、覚悟と共に摑つかむと、まだ何かをぶつぶつ言っているトゥアールに、真剣な眼まな差ざしをぶつけて懇こん願がんする。

「……このテイルブレス。彼女に託していいか、トゥアール」

「そ、それは……」

　トゥアールが返答に窮きゅうしている間に、ブレスがひょい、と摘つまみ上げられた。

「桜さくら川がわ先生⁉」

　桜川先生はブレスを揺らしながら顔に近づけ、角度を変えてしげしげと観察した。

「話を聞く限り、ツインテールの女性であることが変身するための条件なんだろう？　観み束つか君は例外らしいが……つまり、私にこれを託してくれるということだな、観束君」

「え」

「えって何だ、えって、何か驚きのリアクションとして違くないか、え、あなたその年で変身するつもりですか、のえじゃないのか、それ」

「マサカソンナコトハ」

　あのツインテールに詰きつ問もんされては、思わず頷うなずいてしまいそうだ。耐えろ俺。

　トゥアールが、力無く首を振る。

「いえ、無理です。慧え理り那なさんの側そばにいて今まで一度も狙ねらわれなかった以上、桜川先生にはツインテール属性はありません。ツインテールにしていれば、誰だれでもその属性力エレメーラが芽生えるわけではありませんので……。超絶貧乳なのに貧乳属性スモールバストが芽生えない人もいるくらいですし」

　軟素材の床を活いかし、愛あい香かがトゥアールの身体からだをボールにバスケットボールを始めた。軽快なドリブルの後、ゴールのない空間にスリーポイントシュートが放たれる。

「むう、そうか。私が変身できれば、お嬢様を守ることができると思ったのだが……仕方がない。私は、結婚を控えた身。身体を労いたわれと……そういうことだな？　未来の夫、観束君」

「いや全然そういうことじゃないです」

　俺はブレスを返してもらい、意を決してその人の前に差し出した。

「ツインテイルズになってくれないか……会長」

「わ、わたくし……ですの!?」

　会長は当惑し、逃げるように一歩後あと退ずさった。

「テイルギアが増えるって聞いた時、正直、まず俺の頭に浮かんだのが、会長だった」

「本当ですの、観束君!?」

「うん」

　俺が知っている中で、愛香を除くと会長ほどツインテール属性が強い人はいない。

「もちろん、このブレスはトゥアールのものだ。トゥアールが駄目と言ったらそれまでだけど」

「総そう二じ様！　所有権なんてどうでもいいんです！　総二様も納得して下さったじゃないですか、これ以上誰かを巻き込むわけにはいかないと！」

　確かに。けどそれは、アルティメギルと何も関かかわり合いがない人の話だ。

「勘違いしないでくれ。俺は、会長に戦いに参加してもらうつもりはない。それは、俺と愛香の仕事だ。でも、これからも会長はあいつらに狙われ続ける。それならいっそ、ブレスを予備で眠らせておくくらいなら、自衛の手段として変身してもらえれば、と思ったんだ」

　愛あい香かが、俺と会長の間に割り込み、ブレスを握る腕を摑つかんだ。

　トゥアールが俺にブレスを渡そうとしたあの時よりもさらに必死に、真剣な面おも持もちで。

「そーじ……。もっとよく考えて。一般の人にテイルギアを渡すのが、どういうことか分かってるの？」

「会長なら、絶対にテイルギアを悪用したりなんてしない」

「どうしてそう言いきれるのよ!!」

「会長のツインテールを見れば、分かる」

　俺は断言した。

「会長のツインテールは、会長の心そのものだ。いつだって変わらない、普遍のものだ。だから、信用できる。千の言葉より、一のツインテールだ」

　言葉をどれだけ尽くすより、ツインテールは全てを語る。

「良き時も悪き時も……富める時も貧しき時も、病める時も健すこやかなる時も。決して変わることのないもの、それが……本当のツインテールだろう？」

　俺が人生の大半を見守ってきた普遍の存在、愛香のツインテールを見ながら、心からの言葉を紡つむぐ。しかし、これだけの信頼をぶつけたというのに、愛香は軽く白目を剝むいていた。

「観み束つか君……結婚しようっ！　もう観束でいいよな、そのうち私もその姓になるのだし！」

　突如、号泣しながら桜さくら川がわ先生が抱きついてきた。

「こら年増ー！　何するんですかあ!!」

「うるさい黙れ、もはや今の言葉を聞いて結婚するなというほうが無理だ!!」

「どさくさに紛れて、ふざけんじゃないわよ!!」

「ようし、やるか、津つ辺べよ！　男は、拳こぶしで勝ち取るものだ!!」

　愛香が俺から桜川先生を引っぺがし、三つ巴どもえの戦いが始まる。

　狩しゅ猟りよう本能に特化したアマゾネス二人の激戦に何とか加わろうとして、その都度ぺしっと弾はじき飛ばされるトゥアールが一人浮いているが、気迫だけは負けていない。

「ああ～なんて素晴らしい日なのかしら、お嬢様にメイドさんも加わって、ますますツインテイルズが充実していくじゃない！　ね、

総そうちゃん？」

　それを見てやおらはしゃぎ出す母さん。

　頼むから、あのコスプレ衣装に着替えてくるのだけはやめてくれよ。

　会長は、黄色のブレスを握る俺の手の上に、そっと自分の手を重ねてきた。

「津辺さん、トゥアールさん。わたくしのこと、あまりにも見くびりすぎていますわ」

　強い意志を含んだその言葉に、三人の喧けん嘩かがピタリと止まる。

「わたくし、ヒーローに憧あこがれていますのよ。悪と戦うことに、何の恐れもありません」

「あいつらただの悪党じゃなくて、変態なのよ!!　会長が憧れるようなかっこいい戦いなんてしてないのよ、あたしたち!!」

「彼らがどれほど常じよう軌きを逸した存在かは、身を以もつて理解しています」

　あまりにも説得力のある会長の言葉に、愛あい香かはそれ以上何も言わなかった。

「もう、ただ守られるだけでは嫌いやなのです！　わたくしも戦うことができるなら……ツインテイルズになる資格があるのなら！　どうかわたくしを、あなたたちの仲間にして下さい!!」

　トゥアールのほうを窺うかがうと、不本意そうではあったが、しっかりと頷うなずいた。

「……わかった。会長。受け取って」

　俺がブレスを会長に手渡そうとすると、会長はゆっくりと首を振り、右腕を差し出してきた。

「お願いします、観み束つか君……はめて下さい。あなたに、はめて欲しいのです……」

　口づけをせがむような、背伸びの上目遣い。頬ほおを赤らめた会長は、仲間の証あかしを、最後まで俺の手で託されることを望んだのだ。

「あ――――――これやべ――――――これはやべーですよ――――――――――!!」

　突如、口から火でも吐くような勢いで絶叫したトゥアールが、地面を悶もだえ転げ始めた。

「その外見とアンバランスな台詞せりふ！　何という破壊力！　何というハートデストロイヤー！　私もあの時そう言えばよかったー！　『総そう二じ様、私がハメてあげますね』って言えばよかった――――ッ!!　一か月前の私を校閲したい!!」

　遠心力で白衣の裾すそが地面につかないほどの猛烈な勢いでブレイクダンスを始めるトゥアール。とりあえず、そっとしておこう。

　俺は頷うなずき、会長の手を取った。

　おとぎ話で、王子様がお姫様にするような仕草で、少し照れくさい。

「うふふ。婚約指輪エンゲージリングのようですわね……」

　会長のとろけるような呟つぶやきを聞いた瞬間。

　カッ飛んできた愛香が俺からブレスを奪い、会長に有無を言わさず装着した。

◇

「ああ……これが、テイルブレス……！」

頬擦ずりさえしそうなほど愛いとおしげに、濡ぬれた瞳ひとみで右腕のブレスを見つめる会長。自動的にフィットしているとはいえ、会長の小さな腕では、やはりブレスがかなり大きく見えてしまう。

「ありがとうございます、トゥアールさん……！　本当に……本当に嬉うれしいですわ！」

「……う、うぇ……」

「何泣いてんのよあんた！」

トゥアールは、会長の感謝の言葉に目に涙を浮かべていた。

「だって……最初からこんなに感謝されるなんて、初めてですから……。渡そうとしたら詐さ欺ぎ師だから頸けい椎つい折いろこうとか言われたり、半殺しにされた挙げ句、永久に借りパクされたりすることもなく、普通に感謝されて受け取ってもらえるなんて……世の中には、常人なら即死するような凶悪な投げ技かけて無理矢理変身アイテムを奪っていくゲスもいるんです……」

返す言葉もありません。

「ひどい……！　そのような外げ道どう、わたくしが成敗してくれますわ！」

早速正義感を燃やす会長。だが、正義でありながら正義に背を向けた女の存在を、彼女はまだ知らない。

「……いつか……会長とも戦う日が来るのかしら……」

「なに受けて立とうとしてんだよ反省しろよお前は!!」

とにかく、愛あい香かが自分で奪って会長にブレスをつけたということは、愛香も何だかんだ言って会長のことを認めたに違いない。

「トゥアールちゃん、慧え理り那なちゃんの武器は何になるのかしら？」

興味津しん々しんといった感じで、母さんが会長のブレスを見ている。

「それは、事前に分からないんです。形成される武器には、装着者の意志が反映されますから」

「ふうん……ねえ慧理那ちゃん、それなら銃はどうかしら？」

「銃、ですの？」

「総そうちゃんも愛香ちゃんも剣と槍やりで近接戦闘タイプでしょ？　ここに新しく仲間が入るなら、より多くの敵との戦いに対応できるように、後方支援も兼ねた火力タイプがいいと思うの」

「よく見てらっしゃるなあこの母上は――――――――――!!」

　恐ろしいほどにきちんと戦力分析をしていた。そんなこと、俺考えもしなかったのに。

「でも総ちゃんも、授業中にふと『自分は接近戦が得意だけど、遠距離攻撃が得意な敵と戦う時のために、飛び道具も持っておかないと』って考えたりするでしょ？」

「考えるかあああああああああああああああああ!!」

　せいぜい、窓の外に流れる雲を見て、ツインテールに見えるな、って思ったりするぐらいだ。いたって健全だ!!

「母さんいつもそういうこと考えてたわ。そしたら父さんと目が合って、はにかみ合ったりしてね。お互い、同じこと考えてるんだな……って」

　親の青春の回顧に俺が胃を痛めていると、会長は目を輝かせて母さんに賛同していた。

「素敵な青春時代でしたのね！　わたくしも、できれば、ヒーローについて熱く語れる旦だん那な様だと幸せですわ……！」

「うふふ、その夢、結構すんなり叶かなうかも」

「お義か母あ様!?」

「未み春はるおばさん!?」

　何な故ぜか焦って詰め寄る愛あい香かとトゥアールを、母さんは

さらっとかわして笑っていた。

　その後も、和気藹あい々あいと話す母さんと会長。いけない化学反応が起こる気がする……。

「それじゃ、早速変身してみようぜ、会長！」

　期待に胸膨ふくらませ、俺が提案すると……

「ん、ふぁ……」

　会長が、可愛かわいい欠伸あくびをした。

「む、いかん。もう八時か。お嬢様は、九時には眠たくなられるのだ。そろそろお暇いとませねば」

「駄目ですわ、尊みこと。せっかく仲間と認めていただいたのに、途中で帰るなんて……」

「無理しないで、会長。俺たちも疲れたから、今日は早く休むつもりなんだ。使い方とか、説明については明日でも大丈夫さ。放課後時間があったら、ツインテール部の部室に来てくれればそのほうが早いし」

　よく見れば、会長のツインテールもおねむのようだ。休ませてあげないと。

「そ、そうですの？　それじゃあお言葉に甘えて……」

「ええ!?　泊まっていけばいいじゃないの、慧え理り那なちゃん」

「そうですよ、何もしませんから、はあはあ」

　母さんとトゥアールから会長を守るように、桜さくら川がわ先生が割って入る。

「申し訳ありませんが、門限が迫っておりますので。さあ、お嬢様」

　聞くと、神しん堂どう家の門限は夜の八時だという。さすがお嬢様、そうなると強要はできない。

俺はちょっと強引に会長と桜川先生を連れ出し、エレベーターまで見送った。

「……何よ。二人で戦ってくって言ったクセに。そーじのばか」

どこか拗すねたように、愛香が文句を言ってくる。

「いや、だから自分の身を守るために変身してもらうだけだって。九時に寝るくらい規則正しい生活を送ってる会長には、あいつらとの戦いはハードすぎるよ。そう考えれば、母さんが言うように後方支援に特化してもらえるのは、大正解だと思う」

「そーじゃないわよ。もーいい、あたしも今日は帰る」

「愛香……？」

不機嫌さを露骨に滲にじませてコンソールルームを後にする愛香。

そりゃ確かに、気の知れた仲間同士の中に、新しいメンバーが加わるのは不安だと思うよ。でも、会長はツインテイルズの一番の理解者だったじゃないか……？

「あたしだって、触手……怖いんだからね!!」

扉の前でもう一度振り返り、俺を睨にらんで言い捨てると、ふんっ、と鼻を鳴らし出ていった。

「今一度！　今一度チャンスを、未み春はる将軍!!　今夜こそ、童貞を!!」

「新しい幹部が到着した今、失敗続きのあなたの居場所はなくなったのよ！」

「そ、そんな……未春様ー!!」

また、トゥアールと母さんで悪の幹部ごっこをしているようだった。いつの間にか母さんが着替えている。危ない危ない、会長に

帰ってもらって正解だった。

　そうか、愛あい香か、触手が苦手なのか……。俺が、守ってやらなくちゃな。

◇

　相も変わらず騒々しい巨乳貧乳の争いを尻しり目めに我わが物顔で通路を歩くフェンリルギルディは、憂色隠せぬ沈ちん鬱うつな表情のスパロウギルディに呼び止められた。

「……ダークグラスパー様が、お前をお呼びだ。心して謁えつ見けん賜たまわるがよい」

「なんと!?」

　真に存在するかどうかすら定かではなかったというのに、すでに到着していたというのだから予想外だが、巡ってきたチャンスにフェンリルギルディは内心笑いを隠せない。

　闇やみの処刑人と恐れられているとはいえ、首領直属の戦士。その権威に声をかけられたとあらば、思い当たる理由は一つしかない。

　力を合わせよという首領の心遣いも虚むなしく、巨乳貧乳の争いを続ける二幹部。

　早々に見切りをつけ、相応ふさわしい戦士に統一を任せるという勅ちよく命めいであろう。

　そう、自分だ。

　それで、スパロウギルディの表情にも納得がいく。大出世する若造を、指を咥くわえて見ているしかできないのだから。

　毛並みを靡なびかせ風を切って歩き去るフェンリルギルディは、

スパロウギルディがその背中をどんな目で見つめているか、知る由よしも無かった。

「お呼びになられましたか、ダークグラスパー様」

　ことさらに背筋を正し、専用に改造したと思おぼしきその部屋の中に入る。一歩踏み入った瞬間、違和感を感じた。どうやら、入り口は別の場所へ転移するゲートだったようだ。

「来たか」

「……！」

　目を灼やくような色彩溢あふれる部屋だった。立方体の広大な部屋で、一辺は二○メートルにも及ぼう。

　だがフェンリルギルディが驚いたのは、その部屋の中心で目にした人物の横顔が、あまりにも予想だにしないものだったからだ。

（に、人間だと────!?）

　広大な部屋の中心には、所々が禍まが々まがしく棘とげ立だった黒のデスクが置かれている。揃そろいの、魔王の玉座を思わせるフォルムの椅い子すに深く腰掛けているのは……紛れもない、人間の少女だった。

　首から足までを覆うほどのケープ型の漆しつ黒こくのマントをまとい、その黒衣に負けず劣らず色濃い黒髪はツインテールにまとめられ、お下げのように垂らされていた。

　胸もとのマントをなだらかに押し上げる双丘にツインテールが垂れる様さまは、怜れい悧りさと母性を兼ね備えた、魅惑的な光景だった。

　そして……彼女の存在感を決定づけるもの──それは、自おのずから光を放つかのような幻視を覚える、アンダーフレームの楕円の眼

鏡めがねだった。

　出世の昂揚も半分冷めてしまい、フェンリルギルディは彼女の横顔をじっと観察した。

（どこぞの世界で利用したツインテール属性の少女が、逆に我われらの同胞となった、ということか。フン……それにしても人間が首領様直属とは。忌いま々いましい……よほど媚こびが上手いと見える）

　よもや人間を同志として迎え入れるとは、嘆かわしい。数多あまたの世界を巡り、自分を売り込むべく実力で成果を上げてきたフェンリルギルディにとって、これほどの喜劇はなかった。

　確かに、属性力エレメーラ変換の力を与えられれば、人間といえど自分たちに匹敵する力は持つ。だが、よりにもよって首領直属とは。

（ツインテールを世界に芽吹かせ、一気に奪うというあの手法も末期ということか）

　支配されておきながら擦すり寄ってくる人間がいては、世話がない。

　やはり、自分のような者がアルティメギルを変えていかなければ――。

　仄ほのかに、野心が灯ともる。

　肌を切るような冷たい沈黙に耐えきれず、フェンリルギルディが恐る恐る質問した。

「失礼ながら……ダークグラスパー様でお間違えありませぬでしょうか」

「相違ない」

　短く、静かに応こたえ、再び押し黙る少女。

　所在なく周囲を見回したフェンリルギルディは、取り囲む壁の異

変に気づいた。

「ううっ、これは！」

　エロゲーの箱だった。

　しかも、上うわ蓋ぶたの絵柄がマスゲームさながらに整列し、壁にツインテールを描いている。

　ここはまさに、侵おかしがたき聖域サンクチユアリー。

　立っているだけで、聖なる気が降り注ぐような錯さつ覚かくを覚えた。

　少女がパチン、と指を鳴らした。

　直後、壁の一部が僅わずかに震ふるえ、塀へいから一枚のレンガが飛び出してくるように、一本のソフトが排出された。

　飛び出した部分はぽっかりと穴が開いたが、崩れるどころか僅かにずれ落ちる様子もない。

　そもそも、これだけ無数のソフトが積み重なっていれば下のほうに積んであるものは当然、相当な重量を支えなければいけないわけだが、全まつたく潰つぶれても歪ゆがんでもおらず、どれもが発売日に店に置いてある状態そのままに真新しさを保ったままだ。人ならざる力に守られているのを感じる。

　排出された箱は、少女の真横で静止した。音も無く、外箱の口が開く。

　スタンダードなタイプのエロゲーの外箱は、どうしても開ける時に力点となった中央部に折れが生じてしまいがちだが、果たしてそうなることもなく、流麗に開いた。

　薄灰色の内箱がやはり真新しさを保ったまま開かれ、マニュアル、アンケートハガキ、チラシ、特典カード、その他もろもろが整列を崩さず順番に宙へ浮いていく。

　最後に透明なディスクケースが浮き上がり、そこから静だった光

景は一気に動へと変へん貌ぼうした。

　ケースから飛び出したＤＶＤディスクが、突如として大気に火花を散らすほど唸うなりを上げ、回転を始めた。まるでディスクそのものが色彩を放っているのではないかと錯覚するほど、鮮やかなプリズムが一面に描かれる。

　ディスクはいつの間にかイジェクトされていたＰＣのドライブに猛たけ々だけしくも鮮やかに収まり、落ち着いて息を吸い込むような静かな読み込み音が、部屋に木霊こだました。

　少女の白磁はくじのような細指がマウスに添えられ、ツインテール少女のアイコンをクリックする。

　パソコンのモニターには目の痛くなる白背景に原色たっぷりのメーカーロゴが表示され、甲かん高だかいアニメ声がメーカー名を高らかに宣言した。

「□□□□□□」

　例えようのない緊張感に包まれ、フェンリルギルディは息を飲んだ。

　それを見て取ってか、少女はモニターから目を離さず、淡々と言う。

「インストールすればディスク無しで起動するゲームもたくさんあるが、わらわはこの作業に風ふ情ぜいを感じるのじゃ。エロゲーをプレイする時ディスクをドライブに入れるのは、戦いくさ場ばに赴おもむく武士が、兜かぶとの緒おを締める行為に似る……そうは思わぬか？」

「は、はい……」

　威圧感に呑のまれ、萎い縮しゅくするフェンリルギルディ。

「だが」

〝ロードする〟を選択し、セーブデータを読み込んで画面が暗転した、ほんの一瞬。

「緒おの緩ゆるんだ戯たわけ者がいる、ようじゃな……」

　ほんの一瞬──噂うわさの信しん憑ぴよう性を表わすような、凍いてついた瞳ひとみが垣かい間ま見みえた。

「！」

　それ以降、彼女はゲームのプレイを始め、また押し黙る。

　ある意味拷ごう問もんだった。フェンリルギルディの頬ほおを、冷や汗が伝う。

『ひゃううう、エッチー！』

　ゲームでは、登校中うっかり石に躓つまずいた主人公がヒロインを押し倒し、片胸を鷲わし摑づかみにしているイベントＣＧが表示されていた。

　テキストの妙、演技の質、グラフィッカーの職人仕事が一体となってヒロインのまんざらでもない心境を表現し、思わずニヤリとせずにはいられない名場面となっている。

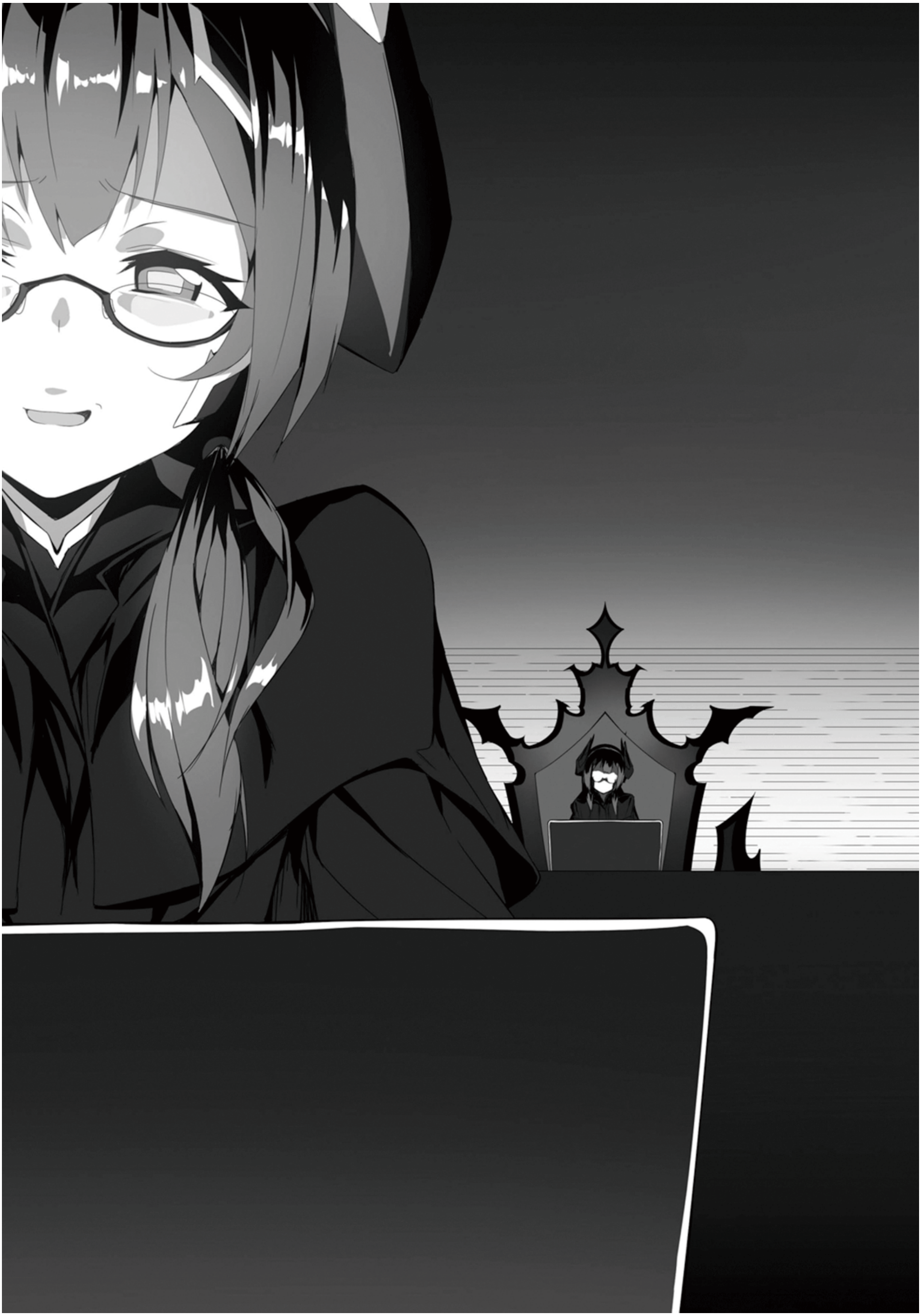
「フッ……」

　少女は、目め尻じりを下げ、口くち許もとを存分に歪ゆがめ、だらしのない笑顔を見せた。

　しかし、その光景にフェンリルギルディは戦せん慄りつを禁じえない。

（で、できる────！）

　他人の眼前で、エロゲーをプレイする。それだけでもすでに、難易度は高い。



　しかも、気心の知れた友人ではない。会ったばかりの他人の前なのだ。

　普通ならば、エロゲーをやってニヤニヤしているところなど、他人に見られたくはあるまい。

　顔面の筋肉を極限まで稼働させ、縫い合わせたように無表情を装おうとするはずだ。

　無意識のうちに、そうするはずだ。それは恥ずべきことではない。白血球がウイルスを喰くらうがごとき、生物の当然の防衛本能だ。

　だが、この少女は本能すら超越した高みで、そんな抵抗など女々しいと断じているのだ。

（なるほど……伊だ達てに首領様直属の戦士ではないということか……。少なくとも、媚こびだけでのし上がったわけではなさそうだ……）

　認識を改め、画面よりも目の前の少女をじっと注視するフェンリルギルディ。

　すると、少女はその視線に気付いたかのように横を向き、眼を細めて薄ら笑った。

「ふっ、エロゲーを始める時、まずオプションで文字速度を最速にするような小僧っ子が、幹部を欲するとは笑止ぞ」

「！　な……」

　野心は、すでに見み透すかされていた。ここに来る前まで、小躍りするほど舞い上がっていたことを今になって後悔する。しかし、よもや年とし端はも行かぬ小娘に小僧扱いを受けては、元々ほとんど無かった敬意など、いよいよもって苛いら立だちに塗り込められてしまう。

「い、言わせておけば……むうううう!!」

　フェンリルギルディはとうとう自分を抑えられず、尻しつ尾ぽに隠された長刀を抜いた。

「……自らの力量を知った上での乱心であろうな？」

「黙れ小娘！　我われらアルティメギルの力でそこまで強くなれただけの分際で、面つらの皮が厚いのはどちらか！　その属性力エレメーラ、もらい受けようぞ!!」

　若さの暴走も、ここに極きわまった。出世心を超え、下げ克こく上じようを実現しようという無謀。

　強大な自信に裏打ちされたプライドが、フェンリルギルディから冷静さを奪ってしまった。

「はっ……!?」

　少女の背に──死神鎌デスサイズを携たずさえ不吉に笑う、死神のシルエットが見えた。

　直後……振り上げた長刀に光条が走り、刃先から柄まで、短冊のように寸分狂わぬ等間隔で断壊する。

　剣を、斬られたのだ。

　立ち上がった少女の黒衣の下で煌きらめく鎧よろいに、フェンリルギルディは目を疑った。

（馬鹿な、あれは──!!）

「わらわの眼鏡めがねは、全てを見通す」

　少女は眼鏡のレンズをギラリと光らせ、冷厳な笑みを浮かべた。

「……貴様の謀む反ほんなど、この部屋に足を踏み入れた時から見えておったのじゃ」

「そ、そんな……！」

「だが分かっておろうな？　貴様が処刑されるは……わらわではなく、首領様への反逆ゆえ!!」

　事ここに及んで、無実の罪を咎とがめられていたのだと知る。縋すがるように手を伸ばすフェンリルギルディ。

「何かの、間違いでございます……反逆など……！」

「ツインテール属性を、不要と申したの」

「！」

　何な故ぜ、その言葉を。ここに来てそんな軽口を叩たたいたのは、ただ一度。

　それを聞いていたのは、クラーケギルディ……しかし、あの騎士気質かたぎの堅かた物ぶつが、告げ口のような真ま似ねをするはずがない。

　では――

　この黒衣の少女は、この眼鏡めがねは―本当に、〝全て〟が見えているというのか。

「元より貴様らの個々の属性へのこだわりは、ツインテール属性を奪取した上で許されていたもの！　それをどこで履き違えたか……愚か者どもは、黙っていればどこまでも増長しつけあがりおる」

「わ、私は……」

「こともあろうにツインテール属性を不要と断じるなど……首領様に、神に唾つばする行為！　死してなお余りある大罪じゃ!!」

「私はただ……ツインテール属性にだけこだわることはないと……首領様に楯たて突つく意志など微み塵じんも！」

　少女の眼鏡が激しく発光し、放たれた二つの光円まどかが視界全てを覆うように巨大化した。

　その形はまさに無限……∞インフイニテイー……！

「眼鏡よりの無限混沌カオシツクインフイニツト！　刮かつ目もくせよ、わらわの眼鏡が生み出す、属性力エレメーラの深しん淵えんに！　己おのれの闇やみと向き合うがよいぞ!!」

　フェンリルギルディは、円に溶け込むように、別の空間に沈んでいった。

　えっほ、えっほ、と野太い声が聞こえてくる。

「こ、これは!!」

　女性の麗しき下着を愛するフェンリルギルディにとって、死よりも辛つらいもの……男の下着。

　筋肉質なふんどし一丁の男たちが、汗に肉体を煌きらめかせながら、濃い吐息を撒まき散らし一面を闊かつ歩ぽする。

　男だらけの空間、男ディメンションが、フェンリルギルディのみを取り囲み展開していた。

　むせ返るような男スモークに、フェンリルギルディは恐怖した。

「お許しを！　どうかお許しをー!!　ダークグラスパー様!!」

　男たちの汗は蒸発し、立ち昇り、男クラウド、そして男レインボーを作り上げている。

　野心も全てかなぐり捨て、許しを懇こん願がんするフェンリルギルディの声は……えっほ、えっほ、というむさい声に飲み込まれ、空間と共に消えていった。

　軽口も許されよう。

　道化も許されよう、傾かぶくのも許されよう。

　野心さえ、見過ごそう。

　しかし、アルティメギルにおいて──ツインテール属性を軽んじることは、存在を許されぬほどの大罪なのだ……。

「さて……」

　中指で、弾はじくように眼鏡めがねのブリッジを持ち上げる少女。

　黒衣がほどけるように舞い上がって粒子になり、眼鏡に吸い込まれていく。

　ほどなく、眼鏡の下の少女の目つきが一変する。

　冷徹な処刑人・ダークグラスパーは、まるで別人になったかのように、目を垂れ下げ、柔和な笑みを浮かべた。

「こ、これで……心置きなく、続きができます」

　おずおずとマウスを掴つかみ直す少女。

「頑張って勉強して、素敵な女の子にならなくっちゃ。あの人に、相応ふさわしくなれるように」

　エロゲーのヒロインの甲かん高だかい声が、静寂を取り戻した部屋に、淡々と紡つむがれていた……。

キャラクター名鑑 009

クラーケギルディ



DATA

身長：291cm

体重：285kg

属性力：貧乳属性(スモールバスト)

ドラグギルディの部隊への援軍としてやって来たアルティメギル幹部。
自身の奉ずる騎士道に邁進(まいしん)する堅物であり、テイルブルーを理想の姫として求婚する。
普段は統率者として自分を抑えている分、抑圧から解放されると暴走してしまう。メインの十本の触手以外に、無数の触手を展開することが可能。

第四章　爆裂、第〝四〟のツインテイルズ。

「ふぁ……」

　放課後、部室で今後の話し合いをしている最中に、愛あい香かが大きな欠伸あくびをした。

「慧え理り那なさんの真ま似ねですか愛香さん？　もっと幼おさな可愛かわいくできないんですか!!」

「一睡もできなかったのよ！　目閉じたら頭の中で触手がグルグルして!!」

　昨日は戦わないで退却していったからよかったものの、あの執着ぶりからいって、クラーケギルディが今日にでも再び愛香を狙ねらってやって来るのは想像に難かたくない。

「とにかく、今度またあいつらが二体で来た時は、触手野郎クラーケギルデイの方は俺が引き受ける。もう一方の奴やつなら、愛香も平気だろ？」

「うん……そうしてもらえると助かる……」

「でも愛香、何でそんなに触手を怖がるんだ？　そこまでグロいか、あれ？」

「だって！　触手なのよ!?　しかもあんなとんでもない数っ……！　ぜ、絶対、一本二本斬きり飛ばしたって、残りが身体からだに絡からみついてくるんだからっ……………………いやあ！」

　その状況を想像したのか、愛香はぶんぶんと頭を振って悲鳴を上げる。

　悲しみに揺れる愛香のツインテールを俺はそっと手で受け止め、テーブルの上に乗せた。

「愛香さんは今、モザイク映像で脳内がいっぱいなんですよ。どうも、怪物といえば触手っていう先入観を持ってるとは思っていましたが、これはいよいよ愛香さんの部屋をチェックする必要が出てき

ましたね。触手系のアニメとかゲームがたんまり出てくるはずですうへへ」

「触手系？」

　でも、アニメやゲームっていえば、必ずああいう敵は出てくるもんじゃないのか？　ＲＰＧだって、海のステージならイカやタコのモンスターは鉄板じゃないか。それが部屋から出てきて、何か問題があるだろうか。俺も持ってるぞ。

「テイルブルーのスーツは隙すき間まだらけですからね～触手が這はい上がって、胸のアンダースーツを引っ張って、破って……ああっ、それどころか、今度は股またに！」

「い――――や――――――――――――――――――!!」

　トゥアールが耳元でボソボソ何か囁ささやくと、愛香は身体をピンと突っ張らせて絶叫した。

　この調子で、幹部クラスの相手と渡り合えるだろうか。厳しい戦いになるのは、間違いない。

　弱々しくも、ややせっかちなノックの音。

　俺が返事をするかしないかぐらいで、滑り込むようにして会長が入ってきた。

「っは、はあ、はあ……お、お待たせしましたわ……生徒会の仕事が、長引い、て……」

「そ、そんな急いで来なくても大丈夫だったのに……。ああ、とにかく座って。お茶でも……って、もう淹いれようとしてる⁉」

　桜さくら川がわ先生が我わが物もの顔で備品のティーセットを物色していた。妙な流し目を俺に寄越してくる。

　会長は椅い子すに座り、ランプの精霊を呼び出すかのように優しい手つきでブレスを撫なでていた。説明を聞きたくて、今日一日いても立ってもいられなかったのだろう。

　その期待に応こたえるようにトゥアールは例の未来型説明キットを展開し、会長にテイルギアの概要を説明する。

　聞き終えるや拳こぶしを放たれるほど愛あい香かには不評だった長い説明も、会長は表情をとろけさせて聞き入っていた。

「トゥアールさん、このエクセリオンショウツの部分が空欄なのは……」

　やはり、そこを疑問に思ってしまうか！　これはいけない!!

「二度目ですし、今回は実際に使ってみましょうか、ふふふふぼぅぁ!!」

　危険な表情で会長に迫るトゥアールを、愛香が背後からの貫ぬき手てで止めた。今回に限っては、俺も何とか止めようと思ったので、手段の是非はあれファインプレイだと言いたい。

　適当に機能をはぐらかすと、今度は別の質問がくる。

「観み束つか君、変身するための掛け声はありまして？」

「か、掛け声……？　テイルオンって決めてるよ。言っても言わなくても変身はできるけど、意識の集中に丁度いいからね」

「それは是非とも必ず言うべきですわ！　そういう積み重ねがあると、たまに無言で変身する回が無性にかっこよく感じますもの!!」

「そ、そうなんだ……」

　……回……って何だ……？

「それで、変身ポーズは!?　共通ですの？　それとも、各自違いますの？」

「ポーズゥ!?」

　子供のように目を輝かせ、畳みかけるように質問してくる会長。

　ヒーロー好きとは聞いていたけれど、まさかここまでとは……。

「さ、さすがにポーズはないかな。ほら、俺たち正体隠さないといけないし」

　まして、あいつらの前で男から女に変身するところを見せるなんて、絶対に嫌いやだ。

「そ、それじゃあ……変身してもよろしくて……？」

　あまりに嬉うれしそうなので、俺は苦笑して頷うなずいた。

「会長。言葉より、変身するっていう意志をしっかり心の中に描いて」

「わ、わかりましわ……。うう、緊張しますわ」

　会長は深呼吸すると、ブレスを胸の前にかざし、意を決したように凛り々りしく叫んだ。

「テイル──オンッ!!」

　しかし、何の変化も訪れない。

　会長以外の俺たち四人は焦って同時に身を乗り出した。

「だ、駄目か……!?」

　しかし、祈りが通じたのか、一拍子置いて右腕から光がほとばしった。

　黄色い光の帯が繭まゆ状に展開され、全身に光の粒子が張り付いていく……段階プロセスは一瞬なので知覚できないが、輝光を放ち、シルエットが変化した会長が目の前に現れた。

　思わず後あと退ずさってしまうほどの、激しいスパークが巻き起こる。

　自分の身体からだを包むテイルギアを見て、会長は嘆声を漏もらした。

「こ、これが……わたくし……？」

　ほんの少しだけ、声が大人びていた。いや、声だけではない。

　俺と同じで、変身することで姿が激変している。

　テイルギアをまとったその姿は、変身前の神しん堂どう会長からは想像もつかないほど成熟していた。

　身長は愛あい香かと同じか、少し高いぐらいだろうか。

　腰が高く、すらっと伸びた足。いわゆるモデル体型で、身体だけ見ると会長の面おも影かげは皆無だ。

　だが目を引くのは、変化した身体そのものだけではなかった。



「かなりの重装甲なんだな。防御力重視か？」

　俺や愛あい香かのギアと違って、肩や胸も満まん遍べんなく装甲板で覆われている。手足にしても装甲の面積が広く、どちらかといえば戦闘服というより甲かつ冑ちゅうのようだ。

　しっかりフィットした流線型の胸部装甲が、豊ほう艶えんに成長した胸を強調している。

　その中でも存在感を主張しているのは、身長と同じぐらいの大きさの背し負よいものだ。背中の装甲から左右それぞれ、宇宙ロケットの補助ブースターのように伸びている。

　先端に噴射口のように穴が開いているのを見ると、やはり重装甲を補うためのブースターの可能性が高い。やや斜めに固定され八の字を描くそれが何を意味するか、俺は一目で分かった。

　さすがは会長だ。あのブースター、ツインテールを意匠にしているに違いない。

　すでに完成している自分のツインテールだけでは満足せず、まとうテイルギアそのものにもツインテールを創造しようという貪どん欲よくさ。これは、俺も負けてはいられないな！

「黄色のテイルギア……ですわね」

「新たなるツインテイルズ……テイルイエローの誕生だな！」

「観み束つか君！」

　感かん極きわまったように目を潤うるませる会長……しかし、俺は肌が粟あわ立だつような寒気を感じた。

　嫌いやな予感がして愛香のほうを振り返ると、名だたる絵画コレクターたちが際限なく競せり値をつり上げそうなほど、見事に芸術的な絶句顔で固まっている。

「そ、そんな……」

　一度手にするはずだったテイルギア。一度は手にするはずだった夢。

それに背を向け、振り切ったはずの願いの残ざん滓しに惑まどわされた少女が、子供のようにいやいやと首を振りながら呆ぼう然ぜんと立ち尽くす。

「なってるじゃない……巨乳になってるじゃない!!　どういうことよトゥアール!!」

「なってますねー」

自分のよりもサイズが小さいことを瞬時に見切ったらしいトゥアールは、余裕の構えだ。

「お願い交換してええええええええええええええええええ!!」

愛香は会長に飛びかかった……かと思いきや、そのモーションからロボットアニメの空中変形を思わせるスピーディーなアクションで力強く身体からだを丸め、そのまま頭突きで部室の床を砕く勢いで、テイルイエローの前に土下座した。もはや愛香の土下座の価値がストップ安だ。

「青！　青にしましょ!?　ね、会長！　先輩なら後輩のお願い聞いて!!」

「ツインテイルズは愛香のほうが先輩だろ!?　少し落ち着け、見てて居たたまれないぞ!!」

「いいわよ！　どれだけ笑われたっていい！　頼むは一時の恥、頼まぬは一生の貧乳よ!!」

最近、愛香の口からは後世に残るほどの名台詞せりふがちょくちょく飛び出すなあ。

そこまで言われたら、言葉で止めるのは不可能だ。

「津つ辺べさん、わたくしはこのテイルギアに命を預ける覚悟ですわ。おいそれと交換できません」

「わかったわ！　じゃあトゥアールのおっぱいあげるから！　待ってて、今千切るわ!!」

「トゥアールのおっぱいあげてどうすんだよ、別に会長は大人になりたいわけじゃないだろ」

瞬間、トゥアールが目からビームを出す勢いで目を輝かせ、両手を祈るように組んで俺の前にダッシュしてきた。

「総そう二じ様、今、『トゥアールのおっぱい』って言って下さいましたね!?」

「え、言った!?」

しまった、適当に鸚おう鵡む返がえしししたらとんでもないとこ拾われた!!

「わぁい、一歩前進です！　素敵な言葉ありがとうございます総二様、私のトゥアルフォンの着信ボイスにしますね！」

『トゥアールのおっぱい』

いつの間に録音したのか、気け怠だるい俺の声がトゥアルフォンから再生された。

「や、やめてくれ――――――――っ!!」

「これで一週間ぐらい使えますね！　ああ、最近使える音声たくさん溜たまって幸せですぅ」

何に使えるのか知らないが……ふと見ると会長は、悲しそうに頭こうべを垂れていた。

「ごめん会長、せっかく変身できたのに水を差して」

「いえ、観み束つか君。……あの、わたくし、大人に……」

会長が何か言いかけたところで、焦じれた愛あい香かが自分のブレスをかざした。

「もういい……。交換してくれないなら……力尽くで奪うまでよ――!!」

変身機構起動略語スタートアップワード――テイルオンの掛け声なしにテイルブルーに変身する愛香の姿は、会長が憧あこがれていた積み重ねのシチュエーションそのもの。

しかし、何を積み重ねたというのだろう。俺には、悪逆の集大成

にしか見えない。

「おい愛香！　いくら部室改造してるからって、テイルギアの力で暴れたら保もたないぞ！」

　まだ右も左も分からないであろう会長に大人げなく向かっていく愛香。たまらず俺もテイルレッドに変身し、愛香を後ろから取り押さえた。

　身長差のせいで羽は交がい締じめにもできないので、羽根のような腰パーツを摑つかむも、我われを忘れて前進する愛香は止まらない。散歩中、大型犬に引きずられる子供のような構図だ。

「会長……！　あたしと会長は似ているのよ……！　あたしはおっぱいを求め、会長はヒーローの力という名の正義を求めた……！　なら、拳こぶしで語り合ってどちらに相応ふさわしいか決めるしかないじゃない!!」

　なまじ愛香がかっこいい台詞せりふを言うものだから、会長もニヤっとして雰囲気に酔ってしまっている。騙だまされてはいけない。満場一致で託されたものを、私利私欲でかっぱらおうとしているだけなんだ。信念を賭かけた戦いでは断じてないんだ、会長!!

「えぇぇ!?　愛香さん、今、慧え理り那なさんと似てるって言いました!?　むしろ可愛かわいさのアクセントになるくらいのヒーロー好きなだけで誰だれからも愛される為政者と、暴虐の全容をテープに収めて裁判所に提出したら執行猶ゆう予よすらつかないような犯罪者とが、似ていると!?」

　よせばいいのにツッコむものだから、先に始末してやろう、と犯罪者は向かう先を変えた。

「……テープ、もっと買っておいてね？　今だと媒体はＨＤＤ？」

「いや録画内容が痛々しすぎてＨＤＤも自分から回転を止めるレベぎゃあああああ!!」

　変身状態なのだから力加減を間違えれば大惨事だろうに、絶妙なバランスでトゥアールを背負い背骨を極きめる愛あい香か。これこそ、積み重ねが生むかっこよさというやつなのだろうか。

　初めて見る人には、言葉を失い仰天するような光景だろう。

慌てて助けようとする会長を、桜さくら川がわ先生が止めた。

「お嬢様、あれは友情です。お嬢様の好きなシチュエーションと同じ、戦いで友情を分かち合っているのです」

うん、うんと分かったように頷うなずく桜川先生。冗談で、面白がって止めないようには見えない。

「そうですか……少し、羨うらやましいですわ。わたくしも早く、その絆きずなを分かち合いたいものです」

いや、トゥアール以外だと絆イベントじゃなく退場イベントになるので、やめたほうがいい。

「観み束つか、お嬢様もこう言っていることだしどうだ。人生を分かち合わないか」

「後ろで生徒があんな悲鳴上げてるのに、よく婚こん姻いん届とどけ出せますね……」

とりあえず、会長にこの絆を分かち合わせてはいけない。

そう思った矢先……机の上に置かれたトゥアールのパソコンが、アラートを鳴らした。

『トゥアールのおっぱい』

『トゥアールのおっぱい』

『トゥアールのおっぱい』

愛香のバックブリーカーから離脱し、きりっとした表情でトゥアールが叫んだ。

「総そう二じ様、アルティメギルです！」

「やめろおおおお世界の危機を座視して見過ごしたくなるアラート音はやめろおおおお!!」

◇

「うむ、やはり女子中学生こそ至高」

　万死に値する暴言を吐いて中学校の校門の前で腕組みをしながら頷いているのは、これまた牛のような外見のエレメリアンだった。こちらは角がなく、ベルのような意匠の首飾りでマントを留めている。クラーケギルディのものと同じマントだ。

「モケー！」

「モケケー!!」

「そうであろう！　そうであろう!!」

　戦闘員アルテイロイドがカサカサと威い嚇かくするように動き回る中、下校中の中学生は右に左に逃げ惑まどう。

　以前もそうだったが、女の子の多い学校が狙ねらわれやすいようで、これは問題だ。

「走って揺れる醜い乳などに存在価値はない。貧乳こそ、始まりにして終わりの乳なのだ!!」

「なかなかいいことを言ってるけど、乳にこだわっている以上倒さなきゃいけないわね」

　到着早々、愛あい香かは据わった目でエレメリアンを睨にらむ。すでに乳属性シリーズの敵カテゴリに入れられた以上、あいつの命運ももう、尽きたな……。

「現れたかツインテイルズ！　我わが名はブルギルディ！　首領様、そしてクラーケギルディ隊長の栄光のため、この命燃え尽きるまで戦おう！」

「そのクラーケギルディが子供の貧乳は駄目だって言ってたぞ！　何で子供を狙うんだ!!」

「……私がこの年の頃ころの少女を好きだからに決まっておろう!!」

　駄目だ、全まつたく統率が取れてねえ。まあ、大将からして好みの貧乳見て暴走するしな……。

「イエロー。見せてもらうわよ。あなたの正義の心とやらが生む力がどれほどかを。もし口先だけだと感じた時は、容赦無くブレスを奪う。そのおっぱいは、あたしのものとなるのよ」

　聞きようによってはとんでもない台詞せりふだが、会長は「よくってよ」と自信たっぷりに頷うなずいた。

　もしかして俺が疎うといだけで、女の子同士で胸の貸し借りって、日常茶飯事なのか？

「必ず仲間として認めていただきますわ！　だってわたくし……あなたたちの戦いを、ずっと見てきたんですもの！」

　心熱くなることを言い、戦闘員アルティロイドたちの前に颯さつ爽そうと躍り出るテイルイエロー。

　さすがに愛香も胸に来たのか、むむむ、と唸うなっている。

「何っ!?　新たなツインテイルズだと!?」

　ブルギルディの大仰なリアクションに満足したように、会長は高らかに名乗りを上げた。

「わたくしの名はテイルイエロー！　第三のツインテイルズですわ!!」

　通信で、トゥアールから『第四の』と抗議が入る。

「えと、使用方法は……なるほど！　こんな風に頭の中に浮かぶんですのね！」

　会長のツインテールの結び目は頭の後ろのほうになるため、それをまとめるフォースリヴォンに触れる仕草は、髪をかき上げるように優雅だった。

　雷がほとばしり、手の平に形成されたのは……山やま吹ぶき色に

輝く拳けん銃じゆうだった。

「ヴォルティックブラスター!!」

　それが、テイルイエローの武装か！　さすがヒーロー好き、ウに点々も忘れていない!!

「モケェ!?」

　光る銃口が、戦闘員アルテイロイドたちに向けられる。確かに、初うい陣じんならばまずは戦闘員アルテイロイドとの戦いだ。

　黒ずくめたちには会長も積もる怒りがあるだろう。

「さあ、これまで多くの人々を危険に晒さらした罪、贖あがなっていただきますわ!!」

　無機質に走り寄ってくる戦闘員アルテイロイド目掛け、テイルイエローは拳けん銃じゆうを発射した。

　まさに、稲いな妻ずまのように弾丸が貫く様さまを想像したのだが……。

　縁日の射的のコルク銃を思わせるような頼りない弾道を描き、戦闘員アルテイロイドに当たったものの簡単に跳はね返ってしまった。

「モ、モケ？」

　倒されるのを覚悟したであろう戦闘員アルテイロイドが、一番驚いている。

「一撃で倒れないとは、やりますわね……！」

　大仰な横構え水平撃ちで、今度は三連弾。

　だがやはり、キャラメル箱すら倒せなさそうなコルク弾が、怪人に通用するはずもない。

「モケ……」

　まるで何か自分が悪いことでもしたかのように、ぽつんと立ち尽くす戦闘員アルテイロイド。

「う～！　う～!!」

　ムキになって乱射するも、戦闘員アルテイロイドには傷一つつかない。

「イエロー！　気合いだ！　心を燃やして、テイルギアに命を通わせるんだ!!」

「そ、そうですわ！　闘志で自己のスペックを超える展開こそ、ヒーローの醍だい醐ご味み！　威力不足は、わたくしのこの正義の心で埋めてみせますわ!!」

　いや、スペックは必要十分なんだが……。

　気を取り直して立ち上がると、銃を仕舞い、返しざま右腕を突き出す。

　ブレスの後ろにある腕の装甲が開いて、中から別のパーツが現れた。

　手の甲の先まで砲身を伸ばしたそれは━レーザー砲だった。

「テイルイエローのテイルギアには、全身に武器が内蔵されていますのよ!!」

　気合い一いつ閃せん、レーザーが発射される……が、水鉄砲のようにピューと伸び、敵に届く前に地面に落ちてしまった。

「……ま、まだまだ！　この肩アーマー、実はですわね！」

　肩アーマーが前面に稼働し、内側からさらにパーツがせり出してきた。

　左右二門ずつ計四門のバルカン砲。解き放たれた機銃が、戦闘員アルテイロイドに、容赦無く浴びせられる。

　すごい、まるで人間武器庫だ。重装甲じゃなく、重火力タイプだったのか!!

「……モケ？」

　……そこで威力もすごければ、申し分無かったんだが。

　三歳児が鬼役のお父さんに投げた豆でももう少し威力があるだろうという、まさに豆鉄砲。

　戦闘員アルテイロイド同士が、「やばい、どうしよう？」というふうに焦り始める。

　イエローは、ムキになって次々に武装を展開し始めた。

　腰からは三門ずつのミサイル。

　両足からは、質量にものを言わせ目標を粉砕する五連徹甲弾。

　おそらくは近接戦の切り札であろう、膝ひざのスタンガンや、爪つま先さきのニードルガン。

　それら武器の稼働音と会長の掛け声だけ聞くととてつもない威力を想像させるが、どれもこれも、目も当てられぬほどの弱さだ。

　戦闘員アルテイロイドたちは一列に整列し、それをせめてもの情けで全て漏もらさず受け止めていた。

　涙目で放った次の攻撃は、胸アーマーが上下四方向に開いて現れた、大型のミサイル。

　その軌き道どうを見るに、本来はホーミングミサイルなのだろうが……空気の抜けた風船のような頼りなさでヘロヘロと飛び、電柱にペチっとぶつかった。

「見た⁉　おっぱいからミサイル出たよ！　偽乳だ、偽乳！」

　やたらめったら嬉うれしそうに指差すブルーの視線の先で、悲しみに打ち震ふるえるイエローの胸は、装甲の下でしっかりと揺れていた。悲しみが伝でん播ぱしたように、無言で打ち震える愛あい香か。

「こ、こんなはずありませんわ……こんな……‼」

　もう一度ヴォルティックブラスターを抜き、至近距離から戦闘員アルテイロイドに連射する。

「モ、モケ……」

　戦闘員アルテイロイドは、ぐっと足に力を入れると、会長の銃撃に合わせ、勢いよくバックステップした。

　うわー、やられたー、とばかりに転げ回り、ガクリと力尽きる。

　日曜日、たまの休みに子供と戦いごっこをするお父さんの姿を、そこに見た。

「……敵に……情けを……」

　とうとう会長はへたり込み、銃ブラスターを取り落としてしまった。

「仕方ない、俺、イエローを助けてくるから……そっちはブルーに任せていいか？」

「ブルギルディ？　もう倒したわよ」

　振り返ると、ブルーは平然とした表情で、ブルギルディだった属性玉ものを手の上でバウンドさせていた。テイルブルーは、乳にまつわる全てを滅ぼす破壊神と化したのだ……!!

　戦闘員アルテイロイドは全て俺が倒したが、その間、もう一度たりとも会長は攻撃を試みようとはしなかった。いつまでも座り込んだまま動こうとしないので、俺は、肩を貸して帰還した──。

◇

「ブレスをお返しします、観み束つか君」

　翌日の放課後、早々にツインテール部室に姿を見せた会長は、覇は気きの無い声でそう告げた。

　ブレスを外はずそうとしたので、俺は慌てて会長の手を摑つかんだ。

「ツインテイルズを辞めるってことか!?」

「痛感いたしましたわ。わたくしには、観束君たちと一緒に戦う資格がありません……」

　理由を問い質ただしかけ……俺は踏みとどまった。会長の正義感を思えば、この結論に至るのも無理はない。

　新たなツインテイルズの出現は、メディアにとって待ちに待った朗報だった。

　そしてそれが敵に手も足も出なかったものだから、案の定ニュースではさんざんな言われようだ。テイルブルーの時のようにネットを見れば、さらにつぶさに悪あつ口こう雑ぞう言ごんが書き連ねられているであろうことは、想像に難かたくない。

「……いえ。約束通り、これは津つ辺べさんにお渡しするのでしたわね」

「ちょ、ちょっと待ってよ……いくらあたしでも、今の会長からもらうなんてできないわよ!!」

　当然、愛あい香かはブレスを受け取るのを拒んだ。

「俺と愛香は、一応子供の頃ころから武術を教わっているんだ。だから戦いにもすぐに順応できたのかもしれない。会長はまだ、緊張して上う手まく力を発揮できていないだけなんだよ」

　会長は力無く頭を振る。

「……すみません。観み束つか君と、二人だけで話をさせてください」

　会長は愛香とトゥアールに深々と頭を下げた。桜さくら川がわ先生にも同じように頭を下げられ、渋々二人は部室の外に出ていく。桜川先生が、それに続いた。

　扉が閉まり、それでも念のためか、たっぷり時間を置いてから、ようやく話を切り出した。

「テイルギアは、ツインテール属性というツインテールを愛する力で稼働する……そうでしたわね」

「ああ、そのツインテール属性をコアに作られているからな」

「正直、初めて変身する時は……失敗するのではという思いが強かったですわ」

　どうして、と問う俺に、会長は何度も躊躇ためらうように唇くちびるを動かしてから、か細い声で言った。

「わたくし……本当は、ツインテールが嫌いですの」

「――何だって!?」

叱しかられるのを待つ子供のように、ばつが悪そうに身を小さくする会長。

「会長。気を遣ってそんな嘘うそ言わなくてもいい。……いや、それは、俺が一番傷つく嘘だ」

「……観束君は、本当にツインテールを愛しているんですのね」

　とうとう、会長は目に涙を浮かべ始めた。

「本当は、自分でしたくてこの髪型にしているんじゃありませんの。ただ、お母様に絶対にそうしろと言われて、仕方なく……神しん堂どう家の家訓だとまで言われて」

　ツインテールをぎゅっと握り締め、唇を噛かむ会長。

「家訓って。そんな大おお袈げ裟さな」

「大袈裟、でしょうか……」

　会長のお母さんはきっと、会長に似合うからよかれと思って多少強く言ったんだと思う。

　それを会長は、家の方針のように曲解してしまったんだ。

「ともかく、わたくしは子供の頃からずっとこの髪型でした。子

供っぽい、子供っぽいと言われ続けて……やめたくても、やめられなくて。いつしかわたくしは、ツインテールを嫌って……いえ、憎んでさえいました。子供と言われて当然ですわ、罪もないツインテールに全てを背負わせて、自分は逃げたのですから」

　俺は、何か情けない声を上げそうになり、必死に言葉を飲み込んだ。

　ショックだったのだ。

　会長がツインテールを嫌いだったことにではない。

　そのことが腑ふに落ちない、自分が……。いつの間にか、誰だれもがツインテールを愛して当たり前という考えになっていた自分に気づいたことが、ショックだったのだ。

　ほんの一か月前まで、ツインテールはまだまだマイナーな髪型だった。

　ツインテールにしていても、会長のように成長するにつれやめたがる子が大半だった。

　それでもツインテイルズの影響で、誰もがツインテールを愛する世界になってくれた──

　いつしか俺の中で、そんな傲ごう慢まんが常識とすげ替わっていたのかもしれない。

「……〝あなたが、ツインテールを愛する限り〟」

　よく知った言葉を口にされ、俺はやおら会長に向き直った。

「とても、不安でしたわ。自分に嘘うそをついて、執念深くあなたの姿を追いかけて。いつ、見抜かれるのではないかと。わたくしが、言葉ばかりの偽りで、ツインテールへの気持ちを塗り固めていると」

　会長がテイルギアを装着できるほど強力なツインテール属性を持っている以上、心の底から憎んでいるなんてあり得ない。でも……。

「会長がツインテールを嫌いなら、それでもいいんだ。『本当は好

きなはずなんだ』って、無理に言いくるめるつもりはない。でも、会長はツインテイルズになる資格があったんだ。それは……もしかして、嫌いと思っているのが、本当の嘘なんじゃないのかな」

「嘘なんかじゃありませんわ!!」

「いや、分かるよ。会長のツインテールを見れば、分かる」

　激情をぶつけるように机を叩たたく会長。

「どうして！　どうして……観み束つか君は、ツインテールをそこまで好きなんですの!?」

　力無く揺れるツインテールは、彼女の悲しみを受けて、萎しおれた花のように生彩を失っていた。

「じゃあ逆に、会長はどうして、ヒーローがそんなに好きなんだ？　子供の頃ころからずっとヒーローに憧あこがれて、俺たちにもそんなヒーローを見たんだろ？」

「それは……かっこいいからですわ！　人々のために戦い、世界の平和を守る……背景がどうあれ、過程がどうあれ、必ずその信念を貫き通すからこそ、ヒーローは尊いのです!!」

「俺は、尊い信念なんて持っていないよ。何も知らない人が聞けば、びっくりすると思う。ツインテールのために命を懸かけて戦うなんて、普通、想像できないから」

「それは建前なのでしょう!?　世界を守り、そのついでにツインテールを守ると……！」

「ついでじゃない!!」

　今度は俺が、机を力一杯に叩たたいた。

「俺にとっては、世界のほうがついでだ！　ツインテールを守るついでに世界を守っているんだ、俺は!!」

「観み束つか君……」

　会長は、信じられないものを見るように俺を見ている。

「……幻滅した？」

「い、いえ、わたくしは……」

「なあ、会長。明日から、ヒーローを好きになるのをやめようぜ。玩おも具ちゃも全部捨ててさ、今時の女子高生らしく生きればいいじゃないか」

「そんなことできませんわ!!　わたくしにとって、命の次に大切なものですもの!!」

「……な？」

　俺が言いたいことを理解してくれたのか、会長はへたり込むように椅い子すに腰を下ろした。

「みんなそれぞれ、大切なものがあるんだ。かけがえのない、心の輝きが。でも、それは他人から見れば、何でもないものだ。会長が泣いて、ヒーローを好きになれなくなったって訴えたって、ほかの人は分かっちゃくれないさ」

「それは、その通り、ですわ……」

「だからこそ、俺はあいつらを許せないんだ。あいつらに征服された世界の人たちは、誰だれにも理解されない悲しみの中で訴え続けたはずさ。大切なものを奪われた、って」

　俺はこの世界を、そんな悲しみで満たしたくはない。

「だから俺は、ツインテールを守るために戦うんだ。俺に出来るのは、それだけだから」

　会長は目め許もとを擦こすり、微笑ほほえんだ。

「何だ……やっぱりかっこいいですわ、観束君」

「いや、さすがにこんな理由で戦って、それはないよ」

　これでかっこいいなんて、数多あまた存在するほかのヒーローの方々に申し訳が立たない。

「でも、それならなおさらわたくしがあなたたちと共に戦うなどで

きません！　変身だけできたところで、あんなみっともない……みじめな、かっこ悪い姿を晒さらしてしまっては、あなたたちまでも人々から後ろ指を指されてしまいますっ!!」

「かっこ悪いから一緒に戦えない!?　何だよそれ、俺だって、幼女になるって言っただろ!?」

「でも、テイルレッドは皆のアイドルですわ！　誰からも愛される、力も人徳も兼ねた真のヒーローではありませんの!!」

「じゃあ愛あい香かはどうなんだ！　目つきがヤバいとか近寄ったら殺されそうとか、散々言われても一緒に戦ってくれているんだ！　愛香はヒーローじゃないのか!?　違うだろ!!」

　扉の外で、八つ当たりされた誰かの悲鳴が聞こえたような気がしたが、俺は止まらない。

「愛されているからこそ怖い！　俺が、男だって分かった時……世界が、どんなふうに手の平を返すか想像できるだろ!?　仲間がいることで、一緒に戦うことで、俺はその恐怖とも戦ってこれたんだ！　会長が言ったんじゃないか、一緒に戦う仲間がいれば辛つらくないって!!」

「あ……」

　いつか、登校中に言ってくれた言葉。俺も愛あい香かも、あの言葉にどれだけ救われたか。

　だから、会長が仲間になってくれるって分かった時、本当に嬉うれしかったのに……。

「誰だれにも認められなくたっていい。俺には、思いを分かち合って共に戦う仲間がいればそれで十分すぎるくらい誇らしい！　慧理那もそうなるって思ってた！　けど……華々しくかっこいい姿を人に見せられなくちゃ、ツインテイルズになる意味はないって言うんだな！」

　いつしか俺は、会長に摑つかみかかっていた。

「あ、ごめん、呼び捨てにしちゃって……」

　これだけ熱くなりながら、妙なことを気にする自分に気づき急速

にボルテージが下がっていった。だが、会長は、逆にどんどん顔を赤らめていく。

「はぁ……はぁ……」

「会長、どうし……え──!?」

　俺が無意識に摑んでいたのは、会長のツインテールだった。

「みつ、か……く……」



　陶とう然ぜんとした声を上げる会長。俺は、穴が空くほどツインテールを凝視する。

「──今、会長のツインテールが、光った気がする」

「何を言ってるんですの!?」

　ああ、何を言ってるんだろうな。けど、事実だ。

　俺は、会長のツインテールが、今までにないくらい輝いたのを感じた。

「……会長。もしまだ、俺を……テイルレッドのことをかっこいいと言ってくれるなら。俺の馬ば鹿かに付き合ってくれないか？」

「つ、付き合う？」

「ああ、今すぐにだ。多分会長は……」

　言い終わる前に、ドアを突き破ってトゥアールが転がり込んできた。

「今すぐ突き合うですって!?　いけませんよ慧え理り那なさん、順番待ちをしてもらいましょう!!　一番は不動の私です!!　まあ、愛あい香かさんの前に横入りするのは許してあげます!!」

　口調は勇ましいのだが、身体からだは機能を停止しようとしている。

　後ろから桜さくら川がわ先生と、やけにむくれている愛香も姿を現した。

「……観み束つか君。お嬢様を頼むぞ。君になら任せられる。帰ってきたら、結婚しよう」

「帰ってきますが、結婚はしません」

　桜川先生からの求婚フラグを丁重にお断りし、俺は、壁の本棚をスライドさせた。

　地下基地へのショートカット用のゲートが出現する。

会長の手を引き、俺は、その中へと入っていった。

◇

「特訓だ!!」

テイルレッドに変身した俺は腕組みし、採石場で仁王立ちしていた。

前に、母さんが使われていない採石場の話をしていたのを思い出したのだ。それっぽい雰囲気で、もし特訓することがあるなら絶好のロケーションだと。

昨日あれだけ強引にブレスを欲しがっただけに、それを使いこなせず落ち込む会長を見て少し後悔しているのか、愛香は一応ついてきたものの、無言で突っ立っているだけだ。

「特訓、ですの……？」

「弱いなら、強くなればいいんだ!!　自分のツインテールを使いこなすんだ、会長!!」

いじけていた目に光りが灯ともり、笑みを噛かみ殺すように唇くちびるを引き結んで俺を見てくる会長。

いい傾向だ。会長なら、こういうシチュエーション好きだと思った！

「っ……わかりましたわ！　もう、好きにして下さい!!」

「おう、その意気だ!!　別に今はもう会長じゃなくていいんだ、肩かた肘ひじ張らないで思いっきり素すの自分を見せてくれよ！」

会長はビクリと身体からだを震ふるわせた。まただ。会長のツインテールの鼓動を感じるようなこの感覚が、きっとテイルイエローの力を使いこなす鍵かぎになるはずだ。必ず、ものにさせてやる。

「テ、テイルオンッ!!」

　再び、テイルイエローへと変身する会長。

　今、明らかに昨日よりもタイムラグが短かったぞ!?

「早速効果が見えてきた……いくぜ、会長!!」

　俺は走りながらブレイザーブレイドを握り、イエローの目の前の地面を斬きり抉えぐった。

　砂じゃ利りが間かん欠けつ泉せんのように猛烈に舞い上がり、会長は悲鳴を上げる。

「きゃあああああああああああああ!!」

「このくらいで叫ぶな！　物理的な衝撃や痛みなんて、いくらでも我慢できる！　いいか会長！　あいつらは、もっと気き色しょくの悪いことをしてくるんだぞ!!」

「わ、わかっていますわ……！」

　ぎゅっと目を瞑つぶったままリボンを弾はじき、ヴォルティックブラスターを握る。

　俺は身動きせず、放たれるコルク銃のような弾丸を黙って受け続けた。

「ツインテール属性の存在を感じるんだ、会長！　それは、いつだって会長の中にある!!」

「わかりません……それが、それだけが何もわからないんですの!!」

　どれだけ奥深く、心の中の箱にツインテールへの思いを閉じこめてしまったんだろう。

　鍵を開けるだけじゃ不十分だ。二度と仕舞えないよう、粉々に破壊するぐらいでなきゃ！

　会長に当たらないように、剣撃を繰り出す。棒立ちで狼狽うろたえ、何の対処もしようとしない。

「もっとツインテールを受け入れろ！　ツインテールは敵じゃな

い、頼もしい味方なんだ!!」

　ぶんぶんと頭を振る会長。今、揺れているそれが！　そのツインテールの存在をもっときちんと心に描ければ、きっと道は開けるはずなのに……!!

『総そう二じ様、手ぬるいですよ！』

「トゥアール……？」

　おそらく地下基地からだろう、トゥアールからの通信が入る。

『慧え理り那なさん！　私はそんなあなたを見るために、イベント満載になるはずだったゴールデンウィーク全部を費ついやしてテイルブレスを作ったわけじゃありません！』

「だから、わたくしはお返しすると言いましたわ!!」

『お下がりにしておいて今さら返すとはムシがよすぎます！　慧理那さん、あなたはテイルギアを中古にしてしまった女、略して中古女なんですよ！　責任を取って、何としても使いこなしてもらいますからね、中古女として！』

　えらく作為を感じる略し方だが、トゥアールなりに会長に発はつ破ぱをかけているんだろう。

『愛あい香かさん、総二様では慧理那さんが傷つくのを恐れてまともな特訓はできません！　特訓らしくその辺に転がってる大岩でもボンボン投げつけてやって下さい！』

　振り向いた愛あい香かは、口を尖とがらせていた。渋々といったようにテイルブルーに変身する。

「ま、待って下さい……いきなりそんな、大おお怪け我がをしてしまいますわ!!」

『何を甘ったれたことを言ってるんですか――――――――――ッ!!』

　トゥアールの絶叫が、耳をつんざく。

『怪我をしたくない!?　遊びじゃないんですよこっちは！　命いのち懸がけなんです！　世界の命運がかかっているんですから!!　私

はいつだって満身創そう痍い、死の瀬せ戸と際ぎわで毎日を生きているんです!!』

　嘘うそは言っていないが、その原因はエレメリアンとの戦いじゃないだろう。しかし、とてつもなく実感の籠こもった言葉だな。

「トゥアールの言う通りだ、会長。会長が憧あこがれていたヒーローたちは、一度や二度の失敗や敗北で、諦あきらめてしまったか？　傷つくことを恐れて、敵に背を向けたりしたか？」

「それは……」

「ヒーローって、そういうものだろ。綺き麗れいなところばかりじゃないんだ。俺だって愛香だって、敵の前で泣き叫んだこともある。仲間なら、上うわっ面つらのかっこよさばかり見ないで、素顔の俺を見てくれ。俺も……本当の会長が見たい」

「あっ……！」

　今。また会長の中で、何かが脈動するのを……ツインテールが息づくのを感じた。

　もう少しなんだ、もう少しで何かが見えそうなんだ……！

『ははぁん……。やっぱりそういうことですか。わかってきましたよ、慧え理り那なさんのことが』

　トゥアールは、何かに気づき始めたのか？　何だ、会長には一体、何が足りないんだ!?

　いつも太陽のように微笑ほほえんでいた会長の顔を、ずっと陰らせたままにはしておけない。

　そう思い天を仰あおぐと、本当に太陽が陰っていた。

　まだ、日の落ちる時間ではないのに……!?

　やおら正面に向き直ると、ブルーが直径五、六〇メートルはあろうかという巨大な岩を、バレーボールでも持つかのような気軽さで片手に乗せていた。

「……何してんだ、愛香」

　そんな簡潔な疑問だけでは驚愕を表わせないが、俺はあえてそう口にした。

「初めて使ってみたんだけど……体操服属性ブルマ。簡単な重力制御ができるのよ。こんな大岩だって、崩さずに片手で持てるんだから」

「こんな大岩どころじゃねー山丸ごと一個持ってきたようなもんだろうがそれ――っ!!」

「つ、津つ辺べさん……そ、そ、それ……は……」

　荒ぶる俺の幼おさな馴染なじみの凶行に、会長は腰を抜かしてしまった。

「……やっぱ、ほっとけない。会長、今ツインテイルズを辞やめたら、一生後悔すると思うから」

　会長は尻しり餅もちをついたまま後あと退ずさる。すでに、一生分の後悔を全身に滲にじませて。

「会長。あたしね、あなたに救われたんだよ。世界中で笑い者にされてさ、アルティメギルと同じみたいに言われてさ……。会長が、あたしをそーじの仲間だって。辛いことがあっても乗り越えていけるって言ってくれて、すごく嬉うれしかったんだ」

　愛あい香かにとっても、会長は太陽だったんだ。

　優しくて温かくて、けれど、直視しようとすると眩まぶしすぎる、太陽。

「だから、今度はあたしが会長を救いたい。辛い時を、今を一緒に乗り越えようよ。仲間なんだからさ――」

　その太陽に再び光を灯ともすために隕石をブン投げようという宇宙級の脳筋が、俺にはもはや一周回って眩しい。

「さあ会長！　破壊してみせなさい！　できなければ、潰つぶされて死ぬわよ!!」

「ほっとけないとか言っておいてとんでもないもん放って来ようとすんなアホー!!」

　会長はまだ腰を抜かしている。テイルギアの力を使いこなしていないってことは、防御力も最低限あるかどうかさえ怪しい。ものの例えではなく、ホントに死んでしまう。

　俺が破壊するしかないと腹を括くくった時、再びトゥアールから通信が入った。

『総そう二じ様。やっぱり慧え理り那なさんにはテイルギアをまとう資格があったんです』

「何っ!?」

『とりあえず、私の言う通りに言ってみて下さい！』

　大気そのものを押しのけるようなプレッシャーと共に、大岩が放ほうり投げられた。

　刹せつ那な、耳じ朶だを叩たたいたトゥアールからのアドバイスを、疑う時間すらなく俺は叫んでいた。

「慧理那あああああああああああああ！　本当のお前を、俺に見せろおおおおおおおおお!!」

　それにばかり気を取られていた俺は、大岩を破壊することを失念し……会長と共に、あえなく押し潰つぶされた──かに見えた。

　二条の閃せん光こうが大岩を貫き、内側から粉々に砕け散らせる。

　何が起こったのか分からず呆ぼう然ぜんとそれを見つめていた俺は、すぐ横で、イエローのテイルギアが変化しているのに気づいた。

　補助ブースターのように背中に背負われていた二本の大型装備を、脇わきの下したを通すように前面に稼働させ、側面からせり出したグリップを握っていた。これも武器だったんだ。おそらくテイルイエロー最大火力であろう、巨大な荷電粒子砲だ。

　稲妻が逆に天に落ちるかのように、尾を引き空に消えていった二本のビーム。

　今、会長は確かに、自分の力でそれを放ったのだ。

バシュウ、と音を立て、背中からパージされた巨大砲が鈍い音を立て、地面にめり込んだ。

「……え……」

誰だれよりも、会長自身がそれに驚いている。

「やったわね!!」

危うく「殺やったわね」になるところだった怪獣が、何食くわぬ顔で喜んでいる。

『フフ、やっぱり！　さすが私です！』

自信満々に自分を誇るトゥアール。いや、その通りだ。この短時間で、会長を奮起させるスイッチを見つけるなんて……やっぱりトゥアールは天才だ。

「……慧え理り那な」

試しに、もう一度呼び捨てで呼んでみると、会長はビクリと身を震ふるわせ、ゆっくりとこちらに向き直った。その顔は、満面の笑えみで溢あふれている。

「……はい」

何か、まるでプロポーズの返事を受けるような万感の思いと共に言われて照れるが……やはり、これこそが会長が求めていた物のようだった。

「感じたか、慧理那」

「は、はい……。恥ずかしいですけれど、わたくし……感……」

そうか、感じたんだな、会長。自分が持っている、ツインテール属性を。心の輝きを。

「嬉うれしいですわ、観み束つか君……。ええ、分かりますの。きっとわたくし、長い間、あなたを待っていたのだと……」

そういうことだったのか。

大きな期待を受け、生徒会長という重責を背負い、誰だれからも

慕われる模範でありながら、その実、みんな会長を愛あい玩がん動物のように思っていた。周囲の視線を見て何度か感じた既視感デジャヴは、俺がテイルレッドとして受ける視線と、会長のそれが似ていたからだったんだ。

　けど、会長が見て欲しかったのは、本当の自分。皆と同じ、一六歳の少女じぶんだったんだ。

　今の俺のように、「会長」ではなく、「神しん堂どう慧理那」と呼んでくれる人を、待っていたんだ。

「観束、くん……。もっと、見て下さい、わたくしを……」

　感かん極きわまったのか、頬ほおを赤らめて息を荒らげる会長。

「わかったよ。じゃ、もっと見せて、慧理那。本当の自分を」

　会長の雰囲気に釣られてしまってか、妙に甘い声で催促をしてしまった。

「ええ！　お見せしますわ！　わたくしの全てを……！　はぁ、は、ぁ……！　全部、全部見て下さいましっ!!」

「おおっと!?」

　突然胸のアーマーが開閉し、ミサイルが胸から発射された。この前とは比べものにならない、高速で追尾してくる巨大なミサイルだ。

　俺は全力で採石場を走り、十分に距離を取ってからブレイドで斬きり落とした。

　発射し終わった胸アーマーがパージされ、成長した慧理那の胸がたゆんと揺れた。

「まだ、まだですわ……！」

　肩のバルカンを発射してくる。

「よし！　完全にテイルギアを使いこなしてるじゃないか！　いいぞ、慧え理り那な!!」

「あっ……はぁ、嬉うれしい、ですわ――！」

　バルカンの着弾で砕けた砂じや利りがカーテンのように舞い上がり、煙がもうもうと立ち込める。

　煙の向こうのシルエットで、イエローがさらにアーマーを脱ぎ捨てたのが見えた。

「…………………………ん？」

　ちょっと待て、これって――

「うふふふっ、見て下さいまし観み束つか君！　わたくしを、本当のわたくしを――！　慧理那を見て、ご主人様ァ～～～～～～～～～～～～～～～～～っ!!」

「あれおかしい、これは違う、待て、止まれ――――――――――ッ!!」

　大盤振る舞いとばかりに、次々に武装を撃ちまくる慧理那。

　採石場に轟ごう音おんが響く。

　全ての武装を撃ち尽くしていく慧理那は、その都度パーツを排除し、今や、肌色の部分のほうが多いというとんでもない状況になっていた。

「隠して、慧理那！　駄目だーっ！」

「嫌いやですわ、もっと、もっと見て下さいまし！　わたくしを、もっと!!」

「うわああ――――――っ!?」

　慧理那のツインテール属性を仕舞っている箱は、開けてはならないパンドラの箱だった！

　ツインテールという名の希望を解放するために、俺はとんでもない災厄まで解き放ってしまったんだ!!

　トゥアールの嬌きよう声せいが耳に響く。

『やっぱり！　やっぱりーっ！　絶対そうだと思ってたんですよ、

大当たりです！　私は、慧理那さんの中に潜ひそむ魔物を見抜いていました!!』

　箱の中身を知っていて何な故ぜそれを俺に開けさせたんだ、このパンドラは！

　助けを求めて愛あい香かの姿を探すと、愛香は遠く離れた採石場の入場口へ視線を向けていた。

　爆発音を聞きつけてだろう、カメラを構えた取材陣が向かってきているところだった。

「……やばい、慧……イエロー！　撮られる！　離れ……」

「ご主人様ァ～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～ン」

　とろけるような甘い声と、とろけきった顔は、カメラに収められてしまったのだった。

◇

　今や、映像は一瞬で世界を巡る。

　地下基地に戻り、ようやく慧え理り那なが変身を解いて正気に戻る頃ころには、とっくに夕方のニュースの時間になっていた。

　当然、焦点は覚かく醒せいしたニューフェイスに大きく向けられていた。無論、悪い意味で。

「まあまあ、慧理那ちゃんったら♪」

　押し黙る俺たちを余よ所そに、居間では母さんが悠長にニュースを観賞している。

『わ～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～ん！』

　目を血走らせた露出度の高い女に無理矢理抱き竦すくめられ、泣

きわめくテイルレッド。

　俺はそんなつもりはないが、何な故ぜいつもあんなにか弱く映されるのだろう。

『ですからもう一刻の猶ゆう予よもならないのです！　テイルブルーが味方だと、野党の反対を押し切って放置しておいて、今度はあの凶悪な新しいツインテイルズですよ!?』

『そもそも何故ツインテイルズと呼ばなければいけないのです、もうあれは別の何かでは!?』

『総理、すでに世界中から批難を受けていますが、いかがなさるおつもりですか!!』

『遺い憾かんでは済まされません、国民が見ているのですよ!?』

　ものっっっすごい、やり玉に挙げられていた。

　テイルブルーと並べられたテイルイエロー写真は、もはや賞金首か何かのような扱いだ。

「あれが……わたく、し……」

「会長っ！」

　幽体離脱しかけた慧理那を、あらん限りの母性をまとった愛あい香かがそっと抱きしめた。

「分かる……！　分かるわ、今のあなたの悲しみが……!!　あたしも、あたしも同じだからっ……！　やっぱりそのブレスはあなたのものよ、会長！　あたしたち……仲間だもの!!」

「つ、津つ辺べ……さん……う、うう、わたくし……」

「慧理那さん……！」

　そしてトゥアールも両腕を広げ、二人を包むように抱き締めた。

「わかります……！　わかりますよ！　見ててぞくぞくしますもんね!!　中身が男性だと分かってるから、百倍興奮するんです!!　興奮して脱ぎたくなっちゃったんですね!?」

　女子三人で、抱き合って泣き合う。

　トゥアールだけ、うっかり聞き流すべきではない暴言を吐き散らしていたような気がするが、男の俺は一人、遠巻きにそれを見ているしかできない。

「わ、わたくしは……ヒーローに……皆に愛される、正義のヒーローを目指して……！　皆さんのおかげで、やっとなれたと思っていたのに……!!」

「大丈夫！　会長はヒーローだから！　あたしと一緒にダークヒーローとして生きましょ!!」

「何で慧理那さんには優しいんですか!?　だいたい愛香さんはダークヒーローじゃないです。正道を捨ててあえてダークヒーローにならなきゃ滅ぼせないような邪悪の化身です!!」

　三人の嗚お咽えつは止まらない。いや、暴言を吐いた一人は呼吸ごと嗚咽が止まった。

「青春ね～」

　母さんはせんべいをかじりながら、少女たちの涙に感じ入っている。

　俺も、ダークヒーローへの道を模索しようか。阿あ鼻び叫きよう喚かんのＴＶ報道を見て、そう思った。

◇

「テイルイエロー……まさかここに来て、新たなツインテイルズが現れるとは」

「今はまるで力を使いこなせていないが、あれほどのツインテール属性を持った戦士だ。時を置けば置くほど、覚かく醒せいを座視することになろう」

　リヴァイアギルディとクラーケギルディは、部下からの情報を受

け、歯は嚙がみした。

　しかし、残念ながら情報が古い。アルティメギルの与あずかり知らぬところで、新たな戦士はいろんな意味で完全覚かく醒せいしてしまっている。

「面目もない。私が取り乱したばかりに、先の戦いでは手間をかけさせた」

「フ、貴様らしくもない。随分と殊勝ではないか」

「いつまでも争いをやめぬ部下たちを見続ければ、慎みも生まれよう」

　巨乳と貧乳。

　組織を二つに割る争いは、泥沼化していた。

　二体の部下たちは、諍いさかいをやめず、戦闘行為にまで発展するケースも散見された。

　自分についてきた部下たちがあたら無駄に命を散らしていくのを、これ以上見過ごすわけにはいかない。

　焦る理由は、もう一つある。フェンリルギルディの行方だ。

　スタンドプレイも甚はなはだしい若造であったが、実力は確かだった。それが忽然と姿を消した理由に、思い至らぬ二体ではない。すでに闇やみの処刑人は降臨し、自分たちの尻しりに火を点つけているのかもしれない……。

　決断の時だ。

　二体は向き合い、互いの目をしかと見据えた。

「……無論、叶わぬな。巨乳属性ラージバストを理解できぬ者と手と手を取り合うなど」

「当然だ。貴様は不ふ倶ぐ戴たい天てんの宿敵。私が貧乳属性スモールバストを拒んだ者に助力を請うなど、断じてない」

　別たれた道を断固として進む。それが、二体の将の決断であり、

部下へのけじめでもあった。

　対極の属性を持つ者同士、和平は決してあり得ない。ならば……

「我われらのうち、ツインテイルズのツインテール属性を奪った方が、全ての部隊を率いればよい」

　リヴァイアギルディは粋いきな笑みを見せる。

　絶対的な力を得た者が、力を以て全てを屈くつ伏ぷくさせればよい。それで、争いは終わる。

　彼らは征服者。言葉ではなく、力で全てを統一することが、あるべき姿なのだ。

　無人の会議室に入り、二体は互いのパソコンをテーブルの上に置いた。

　リヴァイアギルディは、スパロウギルディに向け、今後の部隊のまとめ方、そして侘わびの言葉を綴つづり、パソコンを閉じた。そして、クラーケギルディも同様のことをしていた。

　リヴァイアギルディは、不器用な文面ながら、スワンギルディへの激励の言葉も残してある。

　お前は先が楽しみな戦士だ、と。

　立ち上がると、パソコンに背を向ける二体。

　リヴァイアギルディは、宿と敵もを最後の戦いへと誘いざなう。

「――征ゆくか」

「応よ」

　必ず勝って戻る―そう胸に秘め、会議室を後にする。

　勝って戻らねば、見られるのだ。

　巨乳と貧乳に彩いろどられた二体の半生が詰まった、このパソコンを。

　それまで背中にまとわりついていた哀愁を粉みじんに吹き飛ばし、二体の足取りは堂々たるものだった。

　それはくたびれた管理職ではなく、確かに、大部隊の将。兵を導く、大きな背中だった。

◇

　戦闘員アルテイロイドも引き連れず、リヴァイアギルディとクラーケギルディの二体は居直ったかのように揃そろって腕組みをし、こちらを睨ねめつけている。

　市街地から相当離れた、寂れた工場跡。錆さびて腐った鉄骨が所々剝むき出しになった廃工場以外は荒れ地が広がっており、元は駐車場だったと思われる足元のアスファルトも、いたる所がひび割れている。

　こんな人っ子一人寄りつかないような場所、間違っても属性力エレメーラを求めて来るはずがない。

　二体は、俺たちと戦うことだけを目的にやって来た。決戦の時だ。

　だが、会長は……慧え理り那なは、この場にはいない。

「ええっ、会長来ないの!?」

「一応、敵の出現は知らせたんだけど……返事がなかったんだ」

　あれから部室にも来ていないし、声をかけても会釈だけされて足早に去って行くばかりだった。まだ、心の整理がつかないのだろう。

　だから今回は正真正銘、二対二だ。

「姫。先日は取り乱しお見苦しいところを……申し訳もありませ

ぬ。しかし、私の気持ちは変わりません」

　早くも求婚モード全開の触手に、懸命に悲鳴を嚙かみ殺す愛あい香か。

　それを遮さえぎるように前に進み出た俺に、クラーケギルディは不満を露あらわにする。

「幼な子よ、そこをどきなさい。それとも、あなたのツインテール属性から奪われたいと？」

「ああ、やってみろ。お前の相手は俺だ。ブルーには触ゆ手び一本触れさせねえ!!」

　俺はブレイザーブレイドを抜き放つ。

「ブルー、リヴァイアギルディは任せたぞ。なるべく、こっちを見ないで戦え」

「わ、分かった……ごめんね、ホントごめん……!!」

　ウェイブランスを構えるブルーを前に、リヴァイアギルディは腕組みを解き、表情を引き締めた。

「よかろう、テイルブルーよ。そなたの槍やりと俺の槍、どちらが上か……勝負！」

「槍？　どこにあんのよ……」

　リヴァイアギルディは、身体からだに絡からみつけるようにまとっていた鎧よろいをほどいた。

　それは、股こ間かんから生はえた、一本の巨大な触手だった。勢いよく跳はね、天高く屹きつ立りつした。

　まるで、長槍を構えるように。

「ブ～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～ッ」

　吐血紛まがいに噴き出す愛香。

　確かに、海竜リヴアイアサンの名に相応ふさわしい立派な尻尾し

つぼだが……何な故ぜ、もう少し後ろから生やせなかったのか。

「今こそ見よ！　我わが槍の閃ひらめきを!!」

「ちょ、ウソ、や――――っ!?」

　動揺する愛香を気にせず、股間の槍が迫撃した。

「つおああ!!」

　引いて、突く。突いて引く。槍の基本動作だが、洗練され高速を極きわめれば、絶え間なく発射されるマシンガンよりもなお恐ろしい。奴の槍そう術じゆつは、間違いなく達人の域だ。

　剣での斬撃ならば直線で軌道を計れるが、あの技量レベルの刺突はもはや僅わずかに光る点でしかない。

　これまで力業で敵をねじ伏せてきた愛香では、あれほど極めた技を見切るのは厳しい。

　一刻も早くクラーケギルディを倒し、俺が加勢に入らなければいけないのだが――

「余よ所そ見みをする余裕があるか、幼な子よ!!」

「くそっ！」

　クラーケギルディが巧みに操る触手を前に、俺は防戦一方だ。

　リヴァイアギルディの槍の奏かなでる風切り音は、その間にもどんどん大きくなっていった。

「どうした、打ってこい！　その大層な槍は飾りか、テイルブルーよ!!」

「あんたの槍は何で飾りじゃないのよ!!」

　軽口に軽口で返したものの――知覚外の死の雨が無数に股こ間かんから放たれてくるのだから、愛あい香かの恐怖はひとしおだろう。

　槍やりを合わせ、避よけるので精一杯だ。反撃など望むべくも無い。

「ブルー……！」

　そしてこちらはもはや線でも点でもなく、面の攻撃だ。触手の数が、どんどん増していく。

　余裕を出しているわけではない……そうではないのだが、どうしても、視線の端で愛香を追ってしまう。誤算だった……まさか、リヴァイアギルディも触手を持っていたなんて！

「ぬうう……はあっ!!」

　仁王立ちして腕組みしての股間の触手の絶技は、熾し烈れつを極きわめていた。

　虚を突くように、鞭むちのようにしなり、リヴァイアギルディの周囲を旋回した後、触手は愛香に迫った。それは、愛香の苦手とする、触手本来のフォルムだ。

　軟と硬を使い分ける、股間の触手。恐るべき攻防一体の武器──！

「いやあああああああああああああああああ触手──────────っ!!」

　咄とっ嗟さに俺は、ようやく剣の間合いに入ったクラーケギルディを蹴けり飛ばすに留とどめ、背を向けて走り出した。

「……間に合え!!」

　パニックを起こして槍を取り落とし、棒立ちするテイルブルーのもとへ。

「避よけろ────!!」

「きゃっ……」

　俺は思いきり愛香の背中を突き飛ばす。

「うあああああっ!!」

　リヴァイアギルディの触手をまともに食くらい、俺は地面に叩たたきつけられた。

　砕けたアスファルトが舞い、顔に降り注ぐ。

「勝負を捨てるか、テイルレッド!!」

　そこへ間髪容れず、クラーケギルディが触手を二本切り離し、俺に飛ばしてきた。回避する余裕もなく左右からそれは俺に絡からみつき、簀す巻まきのようにして再び地面に転がされる。

「くっ……！」

　やばい、やばいぞ！　まさか、攻撃を受けるどころか、動きまで封じられるなんて！

「ブルーッ！」

　安否を確認するべく呼びかけても、返事はない。

　テイルブルーは地面に座り込み、もじもじしていた。

「……む、胸……さわった……」

　…………………え？　嘘うそ!?　俺が突き飛ばしたの……あれ、背中じゃなかったのか!?

　とにかく、この大ピンチに、何をもじもじしているんだ！

「く、くそ……ほどけない……!!」

　ブレイドを落とし、腕ごと胴体を締め付けられている状態では、脱出は不可能。

　このままじゃ、愛あい香かがあの二体を同時に相手にすることに……。

　□□□□□□!?

　ツインテールの気配を感じた。

　感覚を頼りに探った先━廃工場の入り口。剝むき出しの鉄骨の陰に、見知った顔を見つけた。

「……来てる……」

　鉄骨の陰から、テイルイエローがこっそりとこちらを窺うかがっている。当人は隠れているつもりかもしれないが、ツインテールの気配を感じとれる俺にとっては滑こつ稽けいなほどバレバレだ。

　しかし、何な故ぜかそのまま動こうとしない。

　……まさかとは思うが。これ、慧え理り那なの好きなヒーローものでよくある「仲間のピンチにドンピシャのタイミングで駆けつける」シチュエーションなんじゃないか。

　よく見れば、「今か!?　今か!?」という感じで、小刻みに膝ひざに力が入っている。

　やっぱ、華々しいフィクションって、見ちゃいけない舞台裏があるんだな……。

「自分の身をなげうち仲間を助けるとは見上げた心がけだが、それではどうすることもできまい！　勝負に横槍を入れた報むくいぞ！」

　股こ間かんの触手を大きくしならせ、俺に振り下ろすリヴァイアギルディ。

　しかし、驚くほど俺は焦っていなかった。この後の展開が手に取るように分かるから。

　おそらく……「あの台詞せりふ」がくれば、どうすることもできない今の俺は、助かるだろう。

「終わりだ、テイルレッド！」

　案の定、リヴァイアギルディの触手は、俺に命中する寸前で横腹に何かをぶつけられ、大きく宙を跳はねた。

「むう!?」

　その〝何か〟は、むしろ正体を誇こ示じするように、鮮やかな黄色の電撃をほとばしらせ、一発の銃弾の弾道を空に描いていた。

　凛りり々りしく銃を構えた戦士が、ツインテールをたなびかせて

ゆっくりとその姿を見せる。

「テイルレッド、わたくしはもう迷──」

「はっはっはっはっは！　そこまでです！　乳に魅入られた魔物ども!!」

……展開が手に取るようにわかる、など、驕おごるにもほどがあった。これは読めない。

フィクションを超えた超展開に鮮烈な再デビューを阻止され、テイルイエローは逃げ帰るように鉄骨の陰に引っ込んだ。

「真の巨乳を前にせず乳の話で盛り上がるとは、肉欲に餓うえた中学生男子も同然！　堕おちましたね、アルティメギル!!」

相も変わらずの傍若無人さで戦場に現れたのは──

「私の名は、世界を渡る復ふく讐しゆう者、仮面ツインテール!!」

「ぬうう、仮面ツインテール……」

「一体何者なのだ……!?」

リヴァイアギルディとクラーケギルディが揃そろって驚嘆の声を上げる。突然の闖ちん入にゆう者しやに律りち儀ぎに攻撃の手を止め刮かつ目もくしてくれる義理堅さは、アルティメギル共通のようだ。

登場するタイミングを失ったテイルイエローは、鉄骨の陰ですっかり萎い縮しゆくしている。

気持ちは分かる。よく分かる。多分、仮面ツインテールには他人の花道を阻止するスキルが標準装備されているんだ。

「乳の本質を知らず乳を語る憐あわれな道化に一いつ家か言げんありと、この場に参上しました!!」

「おのれ……我われらの生を侮ぶ辱じょくするか！」

「侮辱ではなく否定です！　そして、私にはその権利がある！　それだけのおっぱいがあります!!」

　リヴァイアギルディは、顎あごの汗を手の甲で拭ぬぐった。

「この女、言うだけのことはある！　恐るべき乳！　完全なる自意識に支えられた、誇り高き巨乳！　何な故ぜだ……その神域に乳を押し上げるに至り、何故巨乳属性ラージバストを生み出せなんだ!!」

「フッ……さて、何故でしょう。私が幼さを愛するからでしょうか。しかし、それと乳これとは別!!　真なる乳を吊つり支えるのは、クーパー靭じん帯たいではなく女のプライドなのです!!」

「おおっ……!!」

　よくわからない至言に打ち震ふるえるリヴァイアギルディ。

　反対にクラーケギルディは、露骨に敵意を剝むき出しにしている。

「聞き捨てならぬな、下品な乳の女よ！　大きさに頼みを置くその傲ごう慢まんこそ、よほど憐あわれ!!」

「大きさこそ乳の本質！　男性を労いたわり、子を育む胸が大きくあるべきなのは、進化の末に獲得した生命の真理なのです!!」

「だが、世界には乳の小さな女性がたくさんいる！　そして、強く気高い輝きを放っている！　どんな進化の系譜を辿たどろうと、如い何かなる世界であろうと、生物が巨大を捨て進化していくのは同じ！　大きさにこだわるのは、原始の心を捨て去れぬ過あやまちと知れ!!」

　恐竜から人間への進化……。女の子の胸の話なのに、スケールがやばくなってきたぞ。

「あ、アルティメギルのくせにいいこと言うじゃない！　そうよ、

時代はコンパクトなのよ！　テレビも電話もパソコンも、みんな時代と共に薄く小さくなってくんだから！　小さい胸が未来のトレンドなの！　付加価値ステータスなのよ!!」

　それまで、ぽけーっとしていた愛あい香かだったが、クラーケギルディの反論に感じ入ったのか、仮面ツインテールを糾きゆう弾だんするように立ち上がった。おい、今のうちにこれを解いてくれ。

「ハーハハハハハハハ！　貧乳がステータス!?　笑止な！　負け犬の遠とお吠ぼえとはもう少し後ろめたそうにするものと思っていましたが、こうも堂々と吠えるとは喜劇ですね！」

「な、何ですって!?」

「ステータスはステータスでも、バッドステータスでしょう！　浅はかな開き直りです!!」

「ぐぬぬ……!!」

　何な故ぜ仲間を論破しているんだ!?

「『貧乳でも気にしない』とか、『貧乳のほうがいい』とか！　そんな戯ざれ言ごとは、やりたい盛りの男の子が女の卑下に見せかけた『あたし褒ほめて』オーラをめんどくさがって、とっととおっ始めたいがために肯定しあげてるだけです!!　それに気づかず自己完結する女の、なんと滑こつ稽けいなことか!!」

　仮面ツインテールはマントを翻ひるがえし、天を仰あおいで高らかに謳うたい上げる。

　絶対的な矜きよう持じに支えられた大演説はもはや、史上に名を刻む独裁者のそれにも似ていた。

　さしものクラーケギルディも、その迫力に圧倒される。

　ここはもはや、トゥアールの独壇場だ。

「くっ……この女、何故ここまで自信に充みち満ちているのだ!?　天上の神々を相手取るかのような傲ごう岸がん！　わ、我われらが二の句を継げぬこの気迫は一体!?」

「乳はブルマやスク水などと違って、視覚より触覚、感触に価値の

大半を見み出いだすもの……所しょ詮せんそれを触れて審美できぬあなたたちに、乳を語る資格などない！　いかに属性として美しく結晶しようと、もはや存在そのものが矛盾しているのです！　乳の属性も、それによって生まれたあなたたちも!!」

「「□□□□□□!!」」

　存在そのものを全否定され、リヴァイアギルディとクラーケギルディはそれぞれ片かた膝ひざを地につき、息を荒らげ始めた。

「ば、馬ば鹿かな、我らが……」

　クラーケギルディの震ふるえる肩を、リヴァイアギルディが力強く叩たたく。

「負けられぬぞ……！　このまま言われっぱなしでは、我らを信じてついてきてくれた部下たちに顔向けできぬ！　仮面ツインテールに、目にもの見せてくれようぞ！　ツインテイルズを打ち破ることでな！」

「ああ……ああ!!」

　リヴァイアギルディの手を取り、立ち上がるクラーケギルディ。

　このあいだは喧けん嘩かしていたはずなのに……この二体、今は互いを信頼しあっている目だ！　属性が対極でも、二体は戦と友もなんだ！

「姫！　この身の全てが否定されようとも、私は愛を貫きましょう！　あなたの、その星々さえ霞かすむ輝きを放つ、大いなる貧乳に!!」

　またも儀式めいた動作で剣を掲かかげるクラーケギルディは、気づいていなかった。テイルブルーの目が、どぎつい逆三角になり、全てが赤に染まるほど血走っていることに。

「どいつも、こいつも……」

　テイルブルーの異変を敏感に察知したのか、仮面ツインテールは一目散に逃げ出した。

「我わが全霊の力、とくとご覧あれ！　私は再びこの愛を、貧乳の

美び姫きに捧げましょう!!」

　瞬間──

「貧乳貧乳うるせえええええええええええええええええええええええええええええええええ!!」

　テイルブルーはクラーケギルディに猛然と飛びかかった。

「！　い、いかん!!」

　儀式に陶酔し反応が遅れたクラーケギルディを、横からリヴァイアギルディが突き飛ばす。

　先程の俺の、焼き直しのように。

「こっち来いオラアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

「……うおおおおおお!?」

　馬の引き回しの拷問を思わせる惨さん憺たんたる勢いで、クラーケギルディの身代わりになったリヴァイアギルディがテイルブルーに引きずられていく。

「誰だれが……誰が貧乳星のプリンセスじゃボケエエエエエエエエエエエエエエエ!!」

「ひ、姫様!?　ご乱心召めされたか!?　おやめ下さい!?」

　リヴァイアギルディにマウントを取った愛あい香かを諫いさめようと近づいたクラーケギルディは、裏うら拳けん一発で吹っ飛ばされた。

　すいませんそいつ常にご乱心召されてるんで……。

　敵とはいえ、俺は一応心の中で謝りを入れておいた。

「うっがああああああああああああああああああああああああああああああ」

　理性無く本能のみで獲物を喰くらう獣けもののように、天をつんざくような咆ほう哮こうを上げた愛香が、拳こぶしの雨を降らせる。

　もはや、ランスも使わない。二対の拳げん骨こつだけで、屈強な戦士をアスファルトに沈めていく。

　触手を使うなどして抵抗を試みるリヴァイアギルディだが、リミッターを振り切り、自傷さえ厭いとわず全力で拳を叩たたきつけ続ける愛香の前に為なす術すべ無く、やがて、動かなくなっていった。

「……ク、クラーケギルディよ……」

　か細くなっていく声で、仲間に最期の言葉を伝える。

「大は小を兼ねる……だが、小は大を兼ねられぬのだ……。貧は、巨を兼ねられぬのだ……。ゆえに、悲劇が、起こ……る……」

　それを最後に、巨乳に生きた戦士は、貧乳星のプリンセスにモーニングナックルならぬおやすみナイトナックルで永ね眠むらされるという、戦士にあるまじき最期を迎えた。

　宇宙は恐ろしい。人類は果たして、あの宇そ宙らを目指していいのだろうか。

「リヴァイアギルディィイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ!!」

　戦と友もの叫びが、空むなしく響く。

「ふー、ふー……」

　やっと死のマウントを解除したテイルブルーが立ち上がる。その瞬間──

「う、あ、う……」

　力を使い果たしてしまったのか、愛あい香かは目を回すように、ボロ雑ぞう巾きんとなったリヴァイアギルディの横に倒れ込んだ。

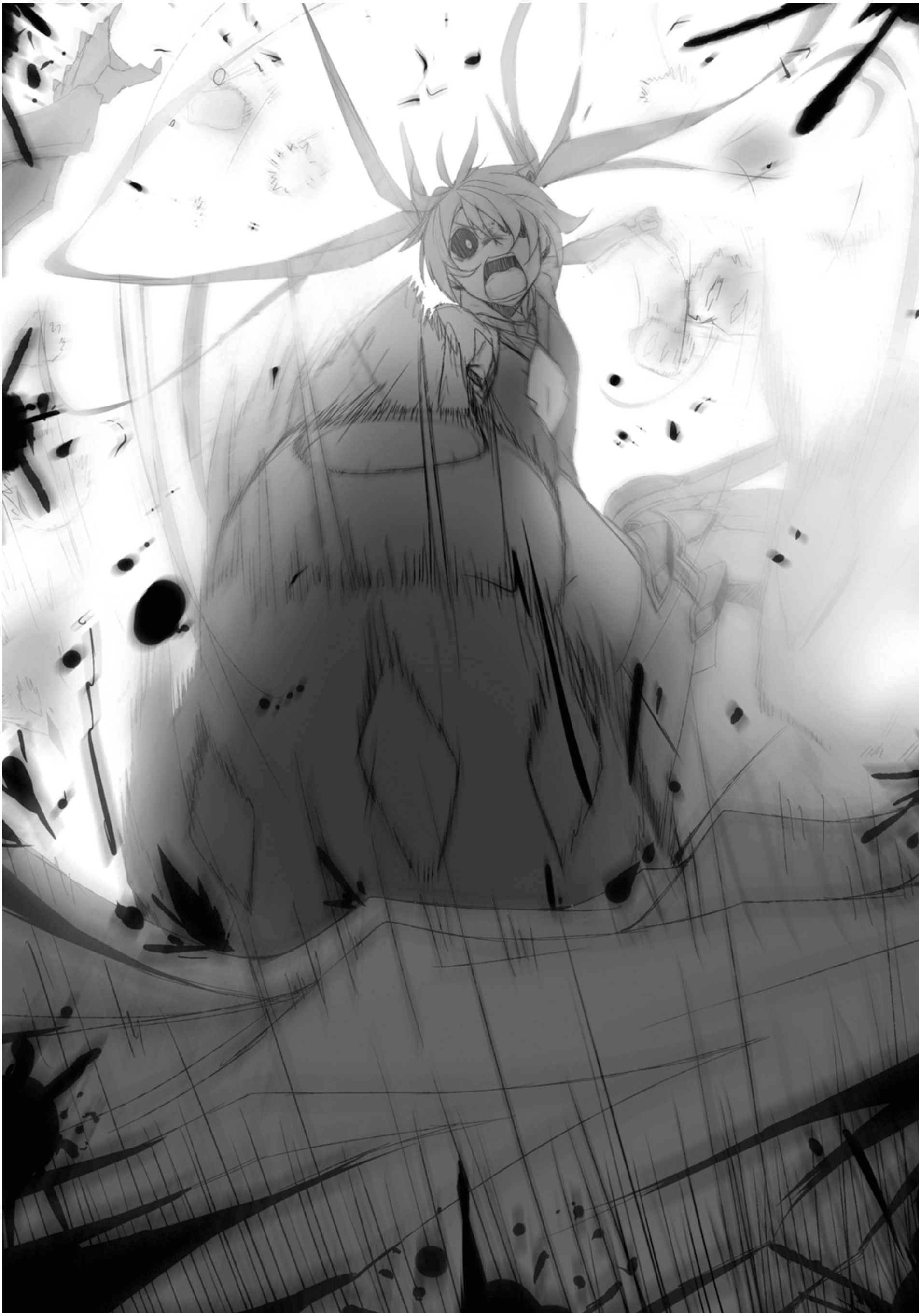
　そしてそれを見届けるや、満を持してとばかりにテイルイエローが再び姿を現した。

「どうやら間に合ったようですわね……テイルレッド」

　横持ちに銃を構えたまま、悠ゆう然ぜんとこちらへ歩を進めてくるテイルイエロー。

「え？」

　あまりの唐突さに間抜けな声を上げてしまう。



「わたくしはもう迷いませんわ……」

「──って、さっきの続きのつもりか!?　大分間が空いたぞ変態さんたちの舌戦のせいで!!」

　もう本人も吹っ切れて、邪魔された場面から続けるしかなくなったんだろう。

「わたくしに、本当に世界を救えるだけのツインテール属性があるかは分かりません。それでも……わたくしを信じてくれたあなたの心に、報むくいたいのですわ」

　覚悟は頼もしいし嬉うれしいけど、自分の中にある憧あこがれのシチュエーションを再現しようとするのはなかなか困った一面だ。ヒーロー好きがヒーローになるとこうなるのか……。

　テイルイエローは、気を絶した仲間に、労いたわりの言葉をかける。

「テイルブルー……わたくし、先程のあなたの姿にまこと感じ入りましたわ。異い形ぎようの怪物に身を堕おとしてなお、正義の心を失わず悪と戦う孤独な戦士……。それもまた、紛れもなきヒーロー。わたくしも……向き合ってみますわ。自みずからの異形と」

「ブルーへの敬意は俺も嬉しいけど、多分そのヒーロー性はブルー独自のものだと思うぞ……」

　これが愛あい香かが自分で言っていた、ダークヒーローの姿か。

　俺は愛香と口くち喧げん嘩かする時、貧乳以外に口撃の材料が見つけられず、そこばかりの罵ののしってきた。

　今、ボロ雑巾のように打ち捨てられたリヴァイアギルディは……止め時を逸して貧乳をネタにし続けた、もう一つの未来の俺なのかもしれない。

「テイルレッド。この触手オバケは、わたくしが引き受けますわ。どうか見ていてくださいまし、わたくしの、真の初うい陣じんを！」

「いや待て、先に俺を……」

　縛っている触手を何とかしてくれ、と言い終わる前に、テイルイエローはクラーケギルディに突進していった……って、おい！　何で銃火器持ってんのにインファイトを挑むんだ!?

「無謀な！　力を使いこなせぬ新兵と聞き及んでいるぞ、下品な乳の少女よ!!」

「その自分の下げ劣れつさと向き合ったことで、一皮剝むけましたのよ！」

「どけ、お前に用はない！　私は、決着をつけねばならないのだ！　敵を姫と讃たたえ、本質を見抜けず、今戦友ともの命を奪われた、自分の罪に!!」

　せっかくの遠距離武器を手に、互いの手が届くほどの距離で銃撃するテイルイエロー。

　だが、これが効を奏した。

　あえて懐ふところに潜り込むことによって、クラーケギルディの触手の力を半減させたのだ。

　この至近距離では、自爆を誘発するため迂う闊かつに触手を全展開にはできない。

　テイルイエローが、それを見越していた……のはないと思うが。

「おのれ！」

　最小限の触手を伸ばし、テイルイエローを攻撃する。アスファルトは発泡スチロールか何かのように易やす々やすと貫かれ、地面からすらも触手が襲い来る恐怖。

　変幻自在にして、豪快。クラーケギルディにとって、この必殺の武装こそが、真に騎士としての剣なのだ。

　それでもこの距離を不利とみるや、触手を地面に叩たたきつけた反動で、一気に距離を取った。

「終わりだ……！　貴様には求婚ではない、全力の攻撃と知れ!!」

　クラーケギルディは、ついに触手を全展開した。

「黄の戦士よ……戦いの経験をまるで持たぬお前が、どうしてこの決戦の地に姿を現した!!」

「経験ならありますわ！　物心ついた時からずっと……古今東西世界中あらゆるヒーローの戦いを目に焼き付け、記憶してきました！　どんな敵とどう戦うか！　どう勝利したか!!　それが、わたくしの戦闘経験です!!」

「想像だけで片がつくのなら、誰だれも鍛たん錬れんなどせぬ……。では、その焼き付けた記憶とやらに聞いてみるがよい。我わが全力の一撃、どう防げばいいかとな!!」

　クラーケギルディは触手を残さず全て伸ばし、身体からだの周囲に扇おうぎ状に展開させる。

　そして、右腕を突き出したのを合図に、一斉にテイルイエローに襲いかかった。

　天球から星が零こぼれ落ちるような神秘。無数の触手が降り注ぐ光景は、おぞましさを通り越して壮観ですらあった。

　機動力に乏しいテイルイエローには、それを防ぐ手立てはない──はずだった。

「！」

　両の足をしかと踏みしめ、テイルイエローは迫り来る魔の雨を決然と見据えた。

「こういう場合は──」

　テイルイエローのアーマーが硬質な駆動音を響かせ次々に展開、発射態勢を取っていく。

「全て、撃ち落とすのですわっ!!」

　大気が弾はじけるような爆音轟ごう音おんを嘶いななかせ、テイルイエローの全身に格納された武装が我われ先さきにと飛び出していく。

　肩から。腕から。腰から。足から。背負った巨砲までもが。高貴なる雷をまとい飛ひ翔しようする。

　照準を度外視した完全火力の極撃。

　触手と弾幕は二人の丁度中間地点で激突し、押し合いを開始した。

　千切れ飛ぶ触手を意にも介さず、なおもクラーケギルディの突貫は勢いを増していく。

「ぐ、ううううう……!!」

　強きよう靭じんな触手の膂りょ力りょくと、自らの斉せい射しゃの反動。二つの想像を絶する圧力に晒さらされ、じりじりと後退していくテイルイエロー。踵かかとはアスファルトにめり込み、それでもなお止まらない。

　駄目だ、あれじゃ慧え理り那な自身が保もたない！

「ッ……テイルレッド……力を貸して下さい……わたくしに、力を……!!」

　鼓膜をつんざくような爆音と極限の破壊劇のさなかに聞こえた、慧理那のか細い呟つぶやき。

　俺は弾はじかれたように、腹から声を振り絞っていた。

「何ちまちまやってんだ！　勿もつ体たいつけてないで全部見せろ、お前の全てを!!　全部だッ!!」

　慧え理り那なは覚悟をして戦こ場こへ来たんだ。俺が恥ずかしがってどうする!!

　俺たちは、腹を割って語り合った仲間なんだ。

　気にせず自分を晒さらせ！　好きなだけ〝弾けろ〟──慧理那!!

「□□□□□□」

　ドクン、と、鼓動が響いたような気がした。

　テイルイエローはぜんまい仕掛けのようにぎこちなくこちらに首を向け、

「かしこまりましたわ、ご主人様」

口くち許もとを吊つり上げ、息を荒らげ始めた。

「全て、全てお見せしますわ……隅から隅までたっぷりと!!」

瞬間、押し切られる寸前だったイエローの攻撃が、精彩を取り戻したかのように勢いを増す。

「お願い、わたくしのツインテール！　どうかわたくしの願いを叶かなえて！　わたくしを……世界を守る、ヒーローにして下さいまし!!」

暴威に晒され、今にも吹き飛ばされそうだったテイルイエローの身体からだが、突如、地面に吸い付いたように不動となった。

「あれは──」

為なす術すべ無く爆風にはためいていた慧理那の……テイルイエローのツインテールが……先端の縦ロールがドリルとなってアスファルトを抉えぐり、地面に打ち込まれている！

ツインテールが鋼はがねのように屹きつ立りつし、アンカーとなって、慧理那の身体を支えているのだ。

慧理那の心に、願いにツインテールが呼応した。まだまだ彼女の潜在能力は計り知れない。自分を晒け出し、解放するたび、彼女は強くなっていく!!

俺は、瞳ひとみの奥が熱くなるのを感じた。

慧理那……君はやっぱり、ツインテールを嫌ってなんていなかった。

心を閉ざす者に、ツインテールは応こたえてはくれない。たとえ表層で偽いつわりの嫌悪感を示しても、本心ではツインテールを愛していたんだ。

育はぐくみ、慈いつくしんできたツインテールは今、君を確かに支えている。

存分に撃てと。遠慮無く浴びせろと。とことんまで爆あ射ばれよと。

　心に、身体に……感じているか、慧理那。君の最高の相棒ツインテールを──!!

「う、お、おおお！」

「邪魔ですわ！　服がとっても邪魔ですわ!!」

　五七五で猛たけ々だけしく吠ほえ、早く撃ち尽くしたい、早く脱ぎたいと、テイルイエローの全身が爆裂する。

　空から舞い降る雨粒のことごとくを、漏もらさず全て砕き散らすような神技。

　光の閃せん雨うとミサイルの煙えん尾びが、触手を封じ込め、飲み込んでいく。いずれも雷をまとい輝いているため、空に光の網を放ったかのように、幻想的な幾何学模様を描いていた。

「ぐ、ば、馬ば鹿かな──！」

　永えい劫ごうに続くかと思えた拮きつ抗こうは、相打ちにて終わりを迎えた。

　最後の最後、一本だけ飛来した触手をヴォルティックブラスターが撃ち落とし、それまでの轟ごう音おんが嘘うそのようにかき消えてしまった。

　触手を全て失ったクラーケギルディは、バランスを崩し歯は噛がみと共に上体をよろめかせる。

　全弾を撃ち尽くしたテイルイエローは、アーマーを一斉に強制排除し水着同然の艶あでやかな立ち姿になり、こちらを露骨に見て頬ほおを赤らめる。

　どこに姿を隠していたのか、にゅっと姿を現した仮面ツインテールは、その姿を天あつ晴ぱれと賞賛し、拳こぶしを握り締めて叫ぶ。

「見事な心意気ですテイルイエロー……脱衣前提の全力発射！　あれこそまさに一撃必殺の切り札、完全脱衣形態フルブラストモード!!」

　心意気を見事と讃たたえるなら、ルビを託す漢字を今一度再考し

てはくれまいか。

　触手を全て失ったクラーケギルディと、武装を全て脱衣パージしたテイルイエロー。

　互いに身体からだ一つという対等の条件で、二者は最後の対たい峙じをする。

　だが、触手全てを失っても、クラーケギルディには剣が残っている。

　ヴォルティックブラスターをも捨ててしまったテイルイエローはまさしく徒と手しゅ空くう拳けん、万事休すだ。

「部下や同胞の怠たい惰だを憂いていながらその実、この私自身、ツインテール属性の底力を見誤っていた……。教えられたぞ、少女よ……それだけ潜在能力ツインテールを秘めていたとは」

「女は脱がなければ分からないものですわ……！　ご主人様が教えてくれましたのよ!!」

「とてつもなく身に覚えがない!!」

　俺は冤えん罪ざいを訴えるが、熱く燃え盛る二者には届かない。

　敬服するように薄く笑うと、クラーケギルディは剣を構え、テイルイエローへと突進した。

　ツインテールを鞭むちのようにしならせ、地面に叩たたきつけるテイルイエロー。

　縦ロールが今度はバネのようにしなり、反動で彼女は空高く跳躍した。

「ツインテールで……飛んだ!?」

　予想外の戦法に驚く俺を余よ所そに、すでに腹を括くくった騎士は冷静だった。

「空へ逃げたところで、的になるだけだ！」

　大上段に剣を構え、渾こん身しんの一いち斬ざんで迎撃する構えのクラーケギルディ。

　だが、跳躍したイエローから一呼吸置いて、脱衣パージし地面に転がっていたアーマーが、意志を持ったように主人のもとへと飛ひ翔しようしていった。アーマーは再びイエローの身体に装着されるのではなく……跳躍の最頂点に達した彼女の後ろに、折り重なるように集つどう。

　さらに砲身を伸ばした巨大砲を中心に、ランチャーや各部武装が上面側面にジョイントされ、最後に、ヴォルティックブラスターがグリップのように底面後部にはめ込まれた。

「ご覧あそばせ！　わたくしの……完全解放ブレイクレリーズッッ!!」

「むう!?」

　イエローの背後に、合身巨大砲ユナイトウエポンが完成する。

　脱衣パージされた全ての武装が合体し、戦艦にも似た一個の巨大な砲を作り上げたのだ。

「オーラピラー!!」

　裂れつ帛ぱくの叫びと共に、主砲以外の武装が一斉に火を噴く。

　完全脱衣形態フルブラストモードの時よりもさらに眩まばゆく雷をまとい放たれた弾丸たちは、螺ら旋せんを描きながらクラーケギルディに殺到し、爆裂すると同時に巨大な円柱形の結界を作り上げた。

　残された主砲が電撃を集束させ、閃せん光こうと共に放たれた。

　巨大なビームは彼女の背中を、身体からだを直撃する。

　最後に発射される弾丸は――テイルイエロー、彼女自身だった。

「ヴォルティックゥゥゥッ！　ジャッジメントオオオオオオオオ

オオオオオオオオ!!」

　人は太たい古この昔、雷を神の怒りと畏おそれ、崇あがめた。

　今、人は自みずからをその神の怒りの化身として、見上げるだけのはずだった天より降臨したのだ。



　肉弾と呼ぶにはあまりにも華麗な、絢けん爛らんたる光をまとった蹴しゆう撃げき。

　天から降り注ぐ神罰は、構えていた剣をも砕き割り、クラーケギルディを貫いた。

「ぐあああああああああああああああああああああああああああああ!!」

　蹴けり足を削さく岩がん機きのように地面に突き立て、なおも勢い止まらずアスファルトを捲めくり爆走したテイルイエローは、最後に今一度、ツインテールにブレーキをかけてもらい、静止した。

「やり、ました、わ……ご主人様……」

　満足げな表情で気を失い、地面に倒れ込む。

「……ああ、本当によくやったよ。君はやっぱり……英雄ツインテールだ」

　クラーケギルディが倒れたことで効力を失ったのか、俺を縛いましめていた二本の触手も、力無くほどけて落ちた。

　テイルイエローに駆け寄ろうとした瞬間……俺の目の前を、無用の長物と化したはずの二本の触手が、猛烈な勢いで飛び去っていった。

「何!?」

　二本の触手は、ボロ雑ぞう巾きんのようになって動かないリヴァイアギルディのもとへ辿り着く。そして、物言わぬ戦士の側頭部に、最後の力を託すように合体した。

　そういえば、リヴァイアギルディは爆発して属性玉エレメーラオーブになっていなかった……！

　まだ、力が残っていたのか!?

「乳という名の絆きずなを分かち合い、同じ時を駆け抜けた戦と友もよ……今こそ最後の執念を見せようぞ……!!」

　ゆっくりと立ち上がったリヴァイアギルディは、クラーケギルディの触手をはためかせ、雄おゝおしく咆ほう哮こうした。

「触手で……ツインテールに!?」

「「さすがだ、ツインテールの戦士たちよ……。多くの同胞たちのため、我われらも最後の命火を燃やそう！　二つの命で、ツインテールとして燃え尽きよう!!」」

　二体の声が、重なって聞こえる。頭には触手のツインテール。そして、力を取り戻したように猛たけゝだけしく股こ間かんをうねる巨大な触手。

　リヴァイアクラーケギルディというべきか……合体し、完全変態メタモルフオーゼした二体は今、巨乳と貧乳を超えて一つになったのだ。

　俺は炎の剣・ブレイザーブレイドを抜き、残された命を燃やす戦士のもとへ疾駆した。

　やっぱりこいつらは、強い。

　何な故ぜかは分からないけど、どれだけほかに愛するものがあっても、アルティメギルの戦士にとって、ツインテールは別格なんだ。全てを失った時、最後に求め、縋すがるものがツインテールなんだ。それはもはや、信仰や崇拝を超えた、命に根ざす何かなのかもしれない。

　ツインテールと化した触手が、鞭むちとなって俺に襲いかかる。

「くっ……」

　触手とはいえツインテールを斬きり飛ばすのを躊ちゆう躇ちよし、俺は背後に跳躍してかわしてしまった。

　その隙すきを突き、飛来した股こ間かんの触手にしたたかに打ちつけられる。

「ぐあっ……！」

　もんどり打って地面を転がり、止まらぬ勢いのまま廃工場の壁面に叩たたきつけられた。

　老朽化した建物はその衝撃に耐えられず、雪崩なだれのように倒壊していく。

　視界が明滅する。またツインテールへの攻撃を躊躇ためらった自分の甘さに、歯は噛がみした。

　躊躇っている場合じゃない。あのツインテールを敵と認識しなければ、俺はやられる。

　背後には、力尽きた仲間たちがいるんだ。

「本当に、最後に残った力みたいだな……。初めから二人で力を合わせていれば、今の一撃で倒されていたかもしれない……。いがみ合ってさえいなければ……」

「「真に分かり合えるはずはあるまい……巨乳と貧乳、それは別の存在なのだから!!」」

「違う！　同じ胸だろう……！　分かり合えるに決まってる！　大きいのが好き、小さいのが好き！　それぞれ好きなものを認め合えばいいじゃないか!!」

　意を決した俺は、ツインテール触手に剣を叩きつけた。

　だが、クラーケギルディの最後の力が込められているおかげか、ツインテールだからか、硬度の上がった二本の触手は交差して楽々とブレイザーブレイドを受け止めた。

　そして横殴りに振るわれた三本目の触手を、紙一重でかわす。

「俺は、全てのツインテールを愛する！　長くても短くても、結び目が高くても低くても、みんなツインテールだ！　人それぞれ好みの差はあったって、ツインテールに変わりはない!!」

「「それほどの高みで心を輝かせられる者ばかりではない！」」

「人間をみくびんじゃねえっ!!」

　ツインテールそのものが攻撃してくるのなら……見切ることはできる！

　心のツインテールを動きに調和させ、鬼気迫る猛襲を捌さばく。

「「ドラグギルディとの戦いを経た以上、お前は世界の真実を知ったはずだ！　容易たやすく手の平の上で操られ、芽吹き、そして奪われる属性の儚はかなさを！　それでも戦うか、幼な子よ!!」」

　空に踊る敵のツインテールを見つめた。

　ドラグギルディの時にも感じた、悲しい矛む盾じゅん──ツインテールを守るためにツインテールと戦わなくてはいけない、世界の争いの本質にも似た答えのない命題。

　それでも、俺はこの矛盾に背を向けるわけにはいかない。

「知ったからこそ戦うんだ！　儚いからこそ、守らなくちゃいけない！　それが、まがりなりにも世界にツインテールを花咲かせた、俺の使命だ!!」

「「たとえそうだとしても！　分からぬ！　属性力エレメーラを糧かてにする我われらと違い、お主たちは属性力エレメーラを失おうと生きていくことはできるではないか！　それなのに何な故ぜ戦う！　何故、生命と天てん秤びんにかけてでも属性力エレメーラを守る戦いを選ぶのだ！」」

　まさしく命をぶつけるように触手を閃ひらめかせるリヴァイアクラーケ。

　俺は歯を食くいしばり、巨大な鎚つちのように振り下ろされるそれを、力の限り弾はじき飛ばした。

「分かってねえな……。秤はかりにかけようがねえじゃねえか」

「「何!?」」

「初めっから吊つり合ってんだ……！　比べようがねえだろ!!」

　振り下ろされる股こ間かんの触手を、宙返りしながら両足で蹴けり下ろして、地面に突き刺した。

　完全解放ブレイクレリーズ。

　巨大に伸長したブレイザーブレイドを手に、俺は疾は走しる。

　股間の触手へ螺ら旋せん状に炎がほとばしり、オーラピラーが本

体に巻きつく。

　お前たちが、巨乳や貧乳を核に生まれたように。

　俺にだって、この身体からだの中まん心なかで鼓動する、譲れない思いがあるんだ！

「俺のツインテールは……生命いのちだ!!」

　最後に襲い来るツインテールの触手をかわし、渾こん身しんの力で跳躍する。

　命を、翼のようにはためかせて。

「グランドブレイザ――――――――――――――――――ッ!!」

　跳躍の勢いそのままに、リヴァイアクラーケの胸に炎えん刃じんを突き立てた。

「うおおおおおおおおおおおおおお……」

　業ごう炎えんに包まれ、力無く倒れていくリヴァイアクラーケ。

「「よかろう……我われらに吠えた心の輝き、真かどうか、星となって見守ろうぞ！　汚れなく、純粋に、ツインテールの愛に邁まい進しんせよ！　果たして、いつまで見続けられることか！」」

「お前たちがツインテールを愛する限り……ずっと見えるだろうぜ」

　生命尽きるその時まで……俺のツインテール属性が消えることはないからな。

　後には、ブレイザーブレイドだけが地面に突き立って残った。二体の墓標のように。

　厳しい戦いだった。

　特に仲間が怪物扱いされたり脱いだりと、いろいろ厳しすぎてこうして立っているのも限界だが、俺たちは勝ったんだ。

　そして、俺はまた敵に改めて気づかされた。ツインテールのかけがえの無さを。

エピローグ　黒き衣の異世界人。

　巨乳属性ラージバストと、貧乳属性スモールバストの属性玉エレメーラオーブ。二体の命の証あかしを握り締め、俺は天を仰あおいだ。

　乳って……何なんだろう。何な故ぜ、女の子の胸で、争いが起こってしまうんだ。

「ひとまずお二人を起こして帰りましょう。周囲に目はありませんが、強制変身解除の防止装置は急作りです、そう長くは保ちません」

「わかった」

　仮面ツインテールに促うながされ、身体からだを横たえたブルーとイエローに近づこうとした、その時。

『見事じゃ……さらにツインテール属性の輝きを増したのう……』

　周囲一帯の空気を、澄んだ声が震ふるわせた。

「！　誰だれだ⁉」

　まるで、天空から賛美歌でも響いてきそうな、荘厳な雰囲気。

　夜の帳とばりが下りるにはまだ早いというのに、周囲は不気味なほど薄暗くなり始めた。

「何だ、これ……」

　蜃しん気き楼ろうがゆっくりと実像を持つように、地平線が揺らめく。

　俺たちのほうへ向かって、真まっ直すぐに歩いてくる影があった。

　比ひ喩ゆではない。それは、影そのものだった。

　首から下を覆う黒衣も。お下げのように胸に垂らされたツインテールも。

　凛りん然ぜんとした瞳ひとみを彩いろどる、眼鏡めがねのフレームも。

　全てが、黒かった。

　今倒した幹部エレメリアンを遙はるかに上回る、周囲全てを覆い尽くすような、巨大な属性力エレメーラをみなぎらせながら。

〝少女〟は、歩いてきた。

「……君は、誰だ？」

　素直に問いかけると、少女は寂しそうに頭こうべを垂れた。

「そうか……分からぬか……」

「え、いや……忘れてるだけかも、ごめん……」

　あまりにも悲しそうな顔をするので、俺は頭をフル回転させて記憶を探った。

　しかし、眼鏡とツインテールが見事に調和したこの少女、物心ついて以来全てのツインテールの記憶を振り返っても、全まつたく覚えがない。

「無理もない。あの頃ころは、まだ手足の伸びきっていない小娘であった。これほどに艶あでやかに美しく成長してしまっては、あの頃の面おも影かげを見つけられないのも仕方のないことじゃ」

　少女は、見下ろす形になる俺に視線を合わせ、目め許もとに涙を湛たたえた。

「だが……今度は貴女あなたが幼女になってしまうとは、なんと皮肉な運命なのじゃ……！　それは世界を超えた弊へい害がいか、それともカモフラージュか!?　わらわがこうして、貴女の愛を受け止められるだけの身体からだになったというのに!!」

少女は黒衣に手をかけ……一気に投げ捨てた。

「わらわは……ダークグラスパー」

それを目まの当たりにした俺は、さらなる驚きよう愕がくに身体を打たれた。

「な、何!?」

黒とは、輝きの対極に位置する色ではなかったか。

光沢を持つ黒色の加工品はあっても、黒という名の光など存在するはずがない。

だが、それは確かに輝いていた。

禍まが々まがしさを超え、もはや畏い敬けいすら感じるまでの、凜り々りしく気高い純黒に。

「それは――――テイルギア!?」

少女は黒衣の下で……俺たちと同じ、テイルギアに身を包んでいた。

「違う。これはグラスギア……頑強装甲グラスギア。眼鏡めがねを愛する力、眼鏡属性グラスの力によって作られた、最強の鎧よろいじゃ」

支配者グラスパーと眼鏡グラス……頑強と眼がん鏡きようをかけている……このネーミングセンス、まるで……。

「貴女に憧あこがれて作ったのじゃ、トゥアール。同じツインテール属性で作らなかったのは、貴女への敬意リスペクトあってこそ」

「……あなた？　……トゥアール？」

少女は、確かに俺に向けてそう言った。それが聞き違いでないことを証明するように、もう一歩近づき、はっきり俺の目を見み据すえて言った。

「そして、今のわらわは、アルティメギル首領直属の戦士」

俺の横で一言も言葉を発せずにいるトゥアール。

　仮面の下の表情を、窺うかがい知ることはできない。

「貴女を迎えに来たのじゃ、トゥアール。わらわと共に、戦って欲しい」

　冷徹に光る、半黒縁の眼鏡。魂たましいさえ抜き取るほど透き通ったレンズは、人も、世界も映さず、ただトゥアールという属性力そんざいだけを映していた。

続く

あとツインテールがき

　皆様の応援のおかげで、こうして二巻を出せることとなりました。本当にありがとうございます！　水みず沢さわ 夢ゆめですこんにちは。

　アンケートや励ましのお便りは、思っている以上に続刊への力となるようですので、引き続きなにとぞよろしくお願いいたします。もちろん、作者自身の力の源でもあります！

　続刊したからにはやりたいこと、書きたい展開がどんどん出てきます。例えばテイルレッドに水着を着せて海イベントとか!?　皆様はどんなイベントを見たいですか？　「俺はトゥアールや愛あい香かよりエレメリアンの水着姿が見たい！」という方も遠慮なく書いて送って下さいませ。

　謝辞を。日本ツインテール協会様、そして会長の古ふる谷や様、推薦コメントありがとうございました！　感激です！　担当の濱はま田だ様、一番大事な時期に体調を崩し締め切りではご迷惑をおかけいたしました！　イラストの春かす日がさん、今回も男の子の夢満載のイラスト感謝感謝です！　そして、完成と出版に携たずさわって下さった全ての皆様に感謝とツインテールを!!

　さて、二巻は短いあとがきとなりましたが、最後に告知を！　実は今回、作中に登場したエレメリアンの中に、公式ブログやツイッターなどで募集しました一般の方からのオリジナル・エレメリアンが一体います。この企画、是非今後とも続けていきたい！　その要項などを隣のページに記載しましたので、我こそはという方はご応募よろしくお願いいたします!!

ぼくのかんがえたエレメリアンのコーナー

No.001 フェンリルギルディ



水沢夢の選んだポイント

今回は初回にもかかわらず力作が多く、できればもっと多く採用したかったのですが、今巻のストーリーに「爪弾き者のエレメリアン」がピッタリだったのと、属性を意匠にしたデザインが気に入り、選ばせていただきました!



奈良県・パルさん(23歳)の作品

応募方法

ハガキの表に住所・氏名・年齢・電話番号を、裏にエレメリアンの名前とデザイン、属性力を書き、下記のあて先までお送りください。

▶▶▶ 〒101-8001
東京都千代田区一ツ橋2-3-1 小学館
ガガガ編集部「ぼくのかんがえたエレメリアン」係

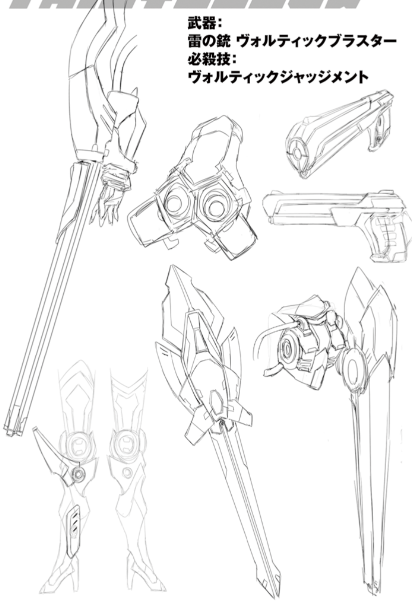
メールでのご応募の場合は、データファイルを添付してこちらのアドレスまで。

▶▶▶ **sukisukitwintail@gmail.com**

なお、採用したエレメリアンの著作権は著者およびイラストレーターに帰属されます。また、応募していただいたハガキ、ファイルの返却は行っておりません。

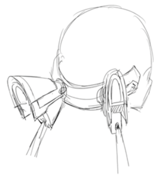
TAIL YELLOW

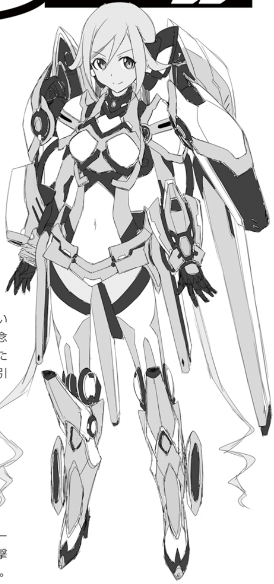
武器：
雷の銃 ヴォルティックブラスター
必殺技：
ヴォルティックジャッジメント



テイルギア設定資料 03

テイルイエロー



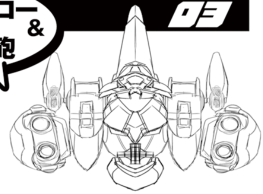


神堂慧理那（しんどうえりな）がテイルブレスで変身した姿。
当初はテイルギアを全く使いこなせなかったが、慧理那の念願叶って心を総二に曝（あば）かれたことでツインテール属性を引き出し、自分のものとした。
全身各部に武装を内蔵しており、装弾数は慧理那の気力次第。雷の力を付加されている。
切り札は、全身の武装を一斉に発射する完全脱衣形態（フルブラストモード）。ツインテールがアンカーロックとなり、全弾発射の衝撃からテイルイエローを支える。

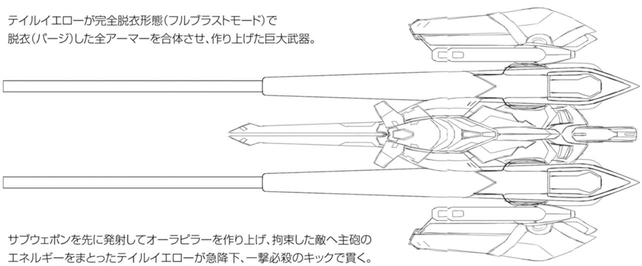
TAILYELLOW & UNITE WEAPON

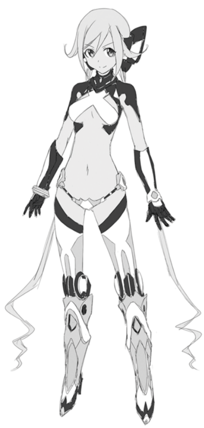
テイルギア設定資料 03

テイルイエロー & 合身巨大砲（ユナイトウェポン）

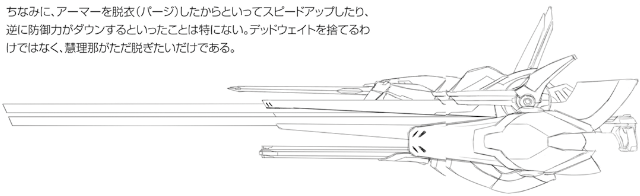


テイルイエローが完全脱衣形態（フルブラストモード）で
脱衣（パージ）した全アーマーを合体させ、作り上げた巨大武器。





サブウェポンを先に発射してオーラピラーを作り上げ、拘束した敵へ主砲のエネルギーをまとったテイルイエローが急降下、一撃必殺のキックで貫く。ちなみに、アーマーを脱衣（パージ）したからといってスピードアップしたり、逆に防御力がダウンするといったことは特にない。デッドウェイトを捨てるわけではなく、慧理那がただ脱ぎたいだけである。



水沢夢

Yume Mizusawa

北国在住のツインテール作家。１巻を読んで、自分の属性力は何だろうとふと思った方はいますか？　すぐには思い浮かばなくても、焦らず、じっくりと心の輝きを育てていって下さい。成熟すれば、そのことだけ考えて小説が書けたりします。例えばツインテール。

小学館ｅＢｏｏｋｓ

俺、ツインテールになります。２

２０１３年２月22日　電子書籍版発行

著　者　水沢夢

発行人　佐上靖之

編集人　野村敦司

編　集　濱田廣幸

発行所　株式会社　小学館

〒１０１-８００１

東京都千代田区一ツ橋２-３-１

s-ebook@shogakukan.co.jp

底　本　２０１２年11月25日　初版第１刷発行

　ISBN978-4-09-451375-2